

九 州 縱 貫 自 動 車 道
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書
(3)

1 9 7 9

宮 崎 県 教 育 委 員 会

九 州 縱 貫 自 動 車 道
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書
(3)

1 9 7 9

宮 崎 県 教 育 委 員 会

序

宮崎県教育委員会は日本道路公団の委託を受けて昭和51年度から53年度にかけて、九州縦貫自動車道建設用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施いたしました。本書はその記録であります。

自動車道建設帯には、縄文・弥生等各時代の12遺跡が所在しました。中でも住居跡の発見、弥生式土器群の出土をみた都城市丸谷第1遺跡、及び石垣列、柱穴群等の検出、陶磁器片等の出土など本県における城跡遺跡の先鞭をつけた清武町域内遺跡の調査は本県考古学解明のための貴重な調査例となりました。

この調査の成果が学術関係者だけでなく、社会教育や学校教育の分野にも広く活用されることを期待いたします。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された日本道路公団福岡建設局及びえびの市をはじめ関係市町並びに関係者各位に謝意を表するものであります。

昭和55年3月

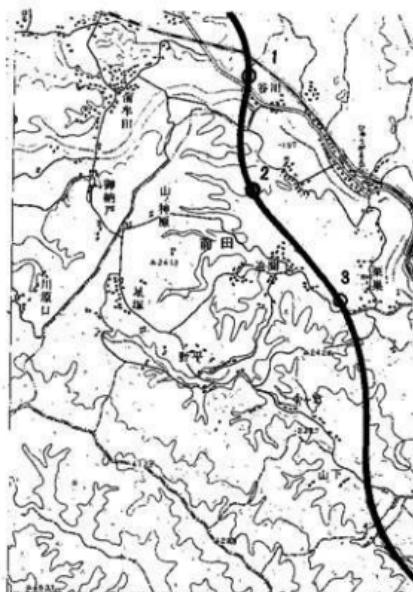
宮崎県教育長 四本 茂

例　　言

- 1 本報告書は、九州縦貫自動車道（宮崎線・鹿児島線）建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書第3集である。
- 2 発掘調査は昭和51年度から53年度に実施し、報告書作成作業を54年度に行なった。
- 3 調査団組織、調査遺跡、調査員は別表のとおりである。
- 4 本稿の執筆には、石川恒太郎、茂山 譲、野間重孝、面高哲郎、北郷泰道、岩永哲夫、遠藤 尚があたり、執筆分担は総目次に記す通りである。
- 5 本書に使用した遺物実測トレース、遺構トレースは各執筆者が行なった。
- 6 本書の編集には文化課があたり、監修には石川恒太郎、日高正晴、田中熊雄があたった。

総 目 次

I	調査に至る経緯	1	
II	高崎町の歴史的概観	石川	5
1	鳥井原遺跡	岩永	9
2	上所追遺跡	野間	19
3	栗巣上原遺跡	茂山	31
4	下原遺跡	茂山	57
5	今村遺跡	茂山	83
III	山田町の歴史的概観	石川	100
	牛谷遺跡	茂山	101
IV	都城市の歴史的概観	石川	103
1	丸谷第2遺跡	茂山	105
2	丸谷第1遺跡	面高	117
V	田野町の歴史的概観	石川	155
	黒草遺跡	北郷	157
VI	清武町の歴史的概観	石川	184
1	小原遺跡	面高	185
2	城内遺跡	石川、面高	199
VII	えびの市の歴史的概観	石川	238
	前畠遺跡	遠藤、北郷	239

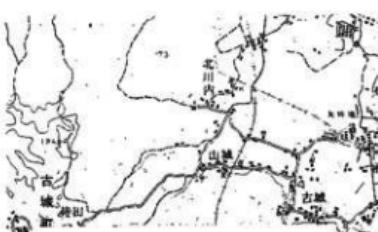


1. 鳥井原遺跡
2. 上所迫遺跡
3. 葉巻上原遺跡
4. 下原遺跡
5. 今村遺跡
6. 牛谷遺跡
7. 丸谷第1遺跡
8. 丸谷第2遺跡



遺跡位置図 (1)

中野島 駅前 一 沿線 二
中野島 駅前 一 沿線 二



遺跡位置図 (2)

I. 調査に至る経緯

九州縦貫自動車道は、昭和40年に基本計画、翌41年に整備計画が決定、北九州市門司区から宮崎県えびの市に至り、えびの市から鹿児島市と宮崎市の2道に分かれ、全長約409kmにおよぶものである。

このうち、本県に関するものは、えびの市から宮崎市までの約82.1km、えびの市から鹿児島県境までの約3.1km、計85.2kmについてである。

宮崎線については、第一期工事のえびの市から高原町に至る28.8kmの遺跡分布調査を昭和44年度に国庫補助事業として実施し、周囲4km幅の区域内にある遺跡48ヶ所を確認した。日本道路公団ではこの資料をもとに路線を決定したが、第2段階として決定路線内についての分布調査を昭和46年に実施した結果、9ヶ所の遺跡を確認し、宮崎県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存することとした。これらの遺跡の発掘調査は昭和47・48年度に行ない、既に発掘調査報告書を刊行している。^{注1}

えびの市から高原町までの28.8kmについてはすでに開通している。

第二期工事の行なわれる高原町から宮崎市までの約53.3kmについては、昭和45年度にえびの高原間ににおいてと同様な分布調査を実施したところ、102ヶ所の遺跡を確認した。その資料をもとに路線が決定されたが、昭和49年5月27、29、30日の3日間、県文化財専門委員石川恒太郎、県文化課主事岩永哲夫の両名が、日本道路公团福岡建設局都城工事事務所とともに、決定路線内の分布調査を行なった結果、11遺跡を確認し、記録保存の措置をとることとしたのである。

発掘調査は、昭和51年度から53年度の3ヶ年に亘り実施してきたが、その内容等は別表のとおりである。この内、荒場については土器等の包含がなく、2日間で打切ったが、下原遺跡については、谷を隔てた丘陵にも遺跡が広がっていることが判明し、下原第2（今村）遺跡として調査を行った。

鹿児島線の宮崎県側についても、県境に近いえびの市大字浦前畑に1ヶ所遺跡の所在することがわかり、昭和53年度発掘調査を実施した。

注1 九州縦貫自動車道埋蔵文化調査報告書1)、1972、宮崎県教育委員会

九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書2)、一灰塚遺跡— 1973、宮崎県教育委員会

調査主体 宮崎県教育委員会

受託年度 51~54年度

発掘調査団の構成		現 任 者	前 任 者
団 長	教 育 長	四 本 茂	穂 積 正 晴(~52)
副 団 長	教 育 次 長	國 府 重 則	荒 川 克 明(~51)
		坂 口 鉄 夫	
事 務 局 長	文 化 課 長	日 高 三 好	
々 次 長	課 長 補 佐	申 間 実	寺 原 俊 文(53、教育庁主幹)
(庶 務)	庶 務 係 長	田 中 君 彦	廣 田 陽 一 郎(現 総合博物館総務課長)
			坂 本 譲(現 文化振興係長)
	主 任 主 事	王 原 敦 美	矢 野 剛(現 東臼杵教育事務所主任主事)
(計画施行)	文 化 財 係 長	山 下 正 明	
	主任主事(調査担当)	岩 永 哲 夫	矢 野 茂 美(現 宮崎県税事務所)
	々	小 森 達 郎	
	々	立 元 久 夫	
	々	今 村 正 人	
(調査員)	考 古 担 当	石 川 恒 太 郎(県文化財保護審議会委員)	
		日 高 正 晴(々)	
		田 中 雄 雄(宮崎大学名誉教授)	
		茂 山 譲(県総合博物館学芸課主任)	
		面 高 哲 郎(々 主事)	
		野 間 重 孝(宮崎市教育委員会社会教育課主事)	
		北 郡 泰 道(々 社会教育指導員)	
		黒 木 昭 三(高崎町教育委員会文化財主幹)	
		岩 永 哲 夫(文化課)	
		小 森 達 郎(々)	
	地 質 担 当	遠 藤 尚(宮崎大学教育学部教授)	

なお、九谷第1遺跡の出土炭化材については、宮崎大学農学部講師大塚 誠氏から玉稿をいただいた。

調査遺跡は下表のとおりである。

番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 日	調 査 員
1	鳥 井 原 遺 跡	北諸県郡高崎町大字前田 鳥井原	昭和51年10月13日 ～10月30日	日高正晴、岩永哲夫、黒木昭三
2	上 所 追 遺 跡	大字前田 上所追	昭和51年8月19日 ～8月27日	田中 茂、野間重孝、黒木昭三
3	栗 巢 上 原 遺 跡	大字前田 栗巣上原	昭和51年8月17日 ～9月2日	石川恒太郎、日高正晴、 田中 茂、茂山 譲、野間重孝、 面高哲郎、黒木昭三
4	下 原 遺 跡	大字東霧島 下原	昭和51年10月13日 ～10月30日	石川恒太郎、茂山 譲、 黒木昭三
5	今 村 遺 跡	大字東霧島 今村	昭和51年11月6日 ～12月4日	茂山 譲、面高哲郎、 黒木昭三
6	牛 谷 遺 跡	山田町大字山田	昭和51年11月1日 ～11月5日	茂山 譲、黒木昭三
7	丸 谷 第 2 遺 跡	都城市丸谷町	昭和52年9月19日 ～10月19日	茂山 譲、田ノ上哲
8	丸 谷 第 1 遺 跡	都城市丸谷町	昭和52年9月19日 ～10月31日	石川恒太郎、日高正晴、 面高哲郎、茂山 譲、 田ノ上哲
9	黒 草 遺 跡	宮崎郡山野町黒草	昭和53年9月8日 ～9月28日 10月18日 ～10月28日	石川恒太郎、日高正晴、 田中熊雄、茂山 譲、 野間重孝、北郷泰道、 遠藤 尚
10	小 原 遺 跡 (谷の口)	宮崎郡清武町 小原	昭和52年7月4日 ～7月30日	面高哲郎、野間重孝、 田中熊雄、遠藤 尚
11	城 内 遺 跡 (船引)	大字上加納 城内	昭和51年10月12日 ～12月22日	面高哲郎、野間重孝、 岩永哲夫

番号	遺跡名	所 在 地	調査期日	調査員
12	前畠遺跡	えびの市大字浦前畠	昭和54年2月22日 ～3月22日	石川恒太郎、日高正晴、 田中熊雄、面高哲郎、 北郷泰道、岩永哲夫、 小森達郎、 遠藤尚、

II. 高崎町の歴史的概観

北諸県郡高崎町は郡の北部にあり、北は西諸県郡野尻町との境界を大淀川の支流岩瀬川が西から東に流れしており、東は北諸県郡高城町との境界を大淀川が南から北に流れ、西は西諸県郡高原町に境し、南は都城市と北諸県郡山田町に境している。

町内のはば中央を大淀川の支流高崎川が西北から東南に流れしており、これらの河川の沿岸には狭小な水田があるが、大部分は丘地で、畑作が行われている。

この地方は、建久年間（1190～1197）以前は諸県郡の三股院に属した土地で、院司は高城町にあった。それが平安時代の末期に攝政関白近衛家領の島津庄内に取入れられ、建久8年の『日向国畠田帳』には「三股院300町」とある中に入っていたようである。その後、南北朝になると三股院司肝付八郎兼重は真先に南朝に応じ、院の政所を城としてこれに権籠り月山日和城と称し、果敢な戦闘を展開した。

その後、室町時代になると、都於郡城（西都市）の伊東氏は次第に有力となり、土持氏と戦って、これを県北郡（あがた—延岡地方）に追い詰め、薩摩の島津氏としばしば戦戈を交えた。そして文明17年（1485）に伊東祐国は飫肥城を攻めて戦死したので、その子伊祐は全軍を挙げて復讐しようとした。島津氏は驚いて、飫肥の替地として三股院千町の地を伊東氏に与えて和を乞うた。これからこの地方は伊東氏の領地となった。当時高崎郷は高原と同郷で、高原に城があつて地頭が居たのであるが、『日向記』の伊東義祐麾下の48城主の中に高原城主福永源左衛門尉の名が出ている。

その後、天正5年（1577）に伊東義祐が国を棄てて豈後に去って、日向国一円が島津氏の有に帰してからは、この地方は都城の北郷氏の領地となり、高原城主は小杉丹後守とある。その後、江戸時代の延宝8年（1680）に高原郷は高原と高崎の2郷に分れ、高崎郷には前田村、大牟田村、繩瀬村、東霧島（つまきりしま）村の4村があつたが、明治22年（1889）に町村制が施行されたとき、この4村に野尻郷の笛水村と江平村を加えて6ヶ村を併せて高崎村となり、その後町制を布いて高崎町となった。そして前の村は大字となっているが、町内の字名は次の通りである。

前田

谷川、前田追、高崎町、町口、割付、江平川内、水溜、朝倉、迫間、星塚、柳迫、福堂、野平、小狩倉、豆付、栗巣、外園

大牟田

柏ノ木、田平、新田、荒場、瀬原、上ノ園、牛込水流、原村、高阪、鍋

繩瀬

横谷、桶ノ口、大庭馬場、五代、薬師、越、宮ヶ中、桶ノ渡、倉元、上小牧、下小牧、星敷平、鶴戸、東霧島

王ノ前、王ノ下、下水流、田中、松ヶ水流、稻荷馬場、今村、中野

笛水

氏益、椎屋、後平、笛水、竹ノ元

江平

木下、温泉、吉村、炭床

以上のうちに今回発掘調査を行った所があるわけであるが、その前に知られていた遺跡について記せば次の通りである。

先土器時代

大字前田

字鼻ブリ（谷川地区） 石器

縄文時代

大字前田

字鳥越（谷川地区） 後期土器、石器

字鳥越前（同上） 晩期土器、石器

字朝倉上（朝倉地区） 石器

字下原（割付地区） 石器

字上村（栗巣地区） 石器

字上原（栗巣地区） 晩期土器

大字大牟田

字東迫中（柏木地区） 晩期土器

字小ヶ倉（荒場地区） 石器

字白水（同上） 晩期土器、石器

字永迫（同上） 石器

字大丸（上勢西地区） 晩期土器

字中切（鍋地区） 晩期土器

大字江平

字權現ヶ字都（木下地区） 晩期土器、石器

字元満（炭床地区） 早期土器

字宇都口（同上） 早期土器、石器

字柳田（同上） 石器

字大川毛（鶴戸地区） 早期土器、石器

大字笛水

字竹元西原（竹元地区） 早期土器

大字繩瀬

字屋敷平（森地区） 石器（以上、黒木昭三氏調査）

弥生時代

弥生時代の遺跡は大字大牟田字示野原の集落跡以外に充分調査されたものはないが、概して高崎川の流域に遺物が多く散布しており、大字江平では古墳群のある丘の麓地方に遺物の散布をみるが、現在知られている遺跡は次の通りである。

大字大牟田

字示野原 後期集落跡
字荒場鉢 包含層（日向上代遺跡遺物地名表）

大字江平
字吉山 同上

大字繩瀬
字樋ノ口 （公民館所蔵土器）

古墳時代

町内において現在までに知られている古墳は次の通りである。

大字江平
字前原 前方後円1、円4（県指定）

大字繩瀬
字塚原 方1、円1（県指定）、地下式5

字千原 円2（県指定）

字横谷原村 円7（県指定）、地下式5

字横谷繩瀬小学校庭 地下式2

大字大牟田
字原村小字城 地下式

大字前田
字飯屋尾 地下式2

以上に見てきたごとく、ここは各時代の遺跡が豊富で、古い時代から人々が居住したことを知り得るが、これはこの地を潤おす大淀川が諸県盆地の水を集めて大きく回流して東に流れ去ろうとする腹部に当り、この水流を利用して生活するに好適な地であるから、古代より幾多の人々が此所に生活の地を求めて来り住み、その時代相応の文化を遺したものと考えられるのである。（石川恒太郎）

鳥井原遺跡

北諸県郡高崎町大字前田鳥井原

目 次

1. 遺跡の位置.....	11
2. 調査の経過.....	11
3. 調査区の概要.....	11
4. 出土遺物.....	12
5. 結 語.....	12

挿 図 目 次

第1図 遺跡付近地形図.....	13
第2図 第4～7トレンチ東北壁土層図.....	14
第3図 第4～7トレンチ出土遺物分布図.....	15
第4図 出土品実測図.....	16

図 版 目 次

出土土器及び石器.....	17
---------------	----

1. 遺跡の位置

鳥井原遺跡は、北諸県郡高崎町大字前田字鳥井原にある。

高崎町全体からみると、最も北部に位置し、高原町との境界に近い。遺跡は標高約200mの台地上にあり、台地の下、西側には都城・小林を結ぶ国道221号線が走っている。その国道の西には高崎町の中心部を流れている大淀川の支流高崎川が流れ、対岸には水田地帯が広がっている。更に西は山田町へと続く山なみの麓一帯標高240m前後の台地があり、上所追跡、栗原上原遺跡が所在する。

また、遺跡の東側は国鉄吉都線が国道と平行的に走っているので、丁度、国道と国鉄吉都線に挟まれた状態の位置に所在していることになる。

国道から遺跡に上る途中の坂道の脇に墓地があるが、墓石には弾痕がさまざまに残り、西南戦役の際官軍と薩軍が交戦した場所であるということだった。

鳥井原遺跡は、縦貫道関係分布調査の際に発見したのであるが、前に述べられているように、高崎町内には非常に多くの遺跡が確認されており、ほとんどの台地上には遺跡の存在が予測された。

2. 調査の経過

調査は、51年10月13日から30日まで行なった。

調査地点に定めた台地は、北西から南東に突出した形状で同方向に長く延びている。現状は畠である。道路はこの地点では南北に走る予定で台地を斜めに横切ることになる。

まず、細長い台地を横断する形で第1トレンチ(2×30m)を設定、南から4m区切りにし、A、B、C、……G区とした。また、第1トレンチに直角に第2、3トレンチ、第1トレンチに平行に第4、5、6、7トレンチを設定した。その他、試掘坑2ヶ所を設けた。

3. 調査区の概要

調査地点は、路線STA9+00からSTA10+00の間の約60×50mの範囲内である(第1図)。

各トレンチはそれぞれ直交するか平行するかどちらかに設定した。各トレンチの長さは、第1トレンチ30m、第2トレンチ30m、第3トレンチ28m、第4～第7トレンチ各15mである。

第4～第7トレンチにおいての層序を観察すると(第2図)、第I層混ボラ耕土層(15cm)、第II層混ボラ耕土層(15cm)、第III層高原スコリア層(3～10cm)、第IV層黒色土層(3～6cm)、第V層灰黒色土層(3～6cm)、第VI層漆黒土層(20～25cm)、第VII層黒褐色土層へと続き、第VII層及び第VIII層が遺物包含層である。

遺物は主として、第4～第7トレンチ内において出土し(第3図)、次いで第3トレンチである。遺物の出土状況は、路線内の北西に寄るほど濃密になっているので、より北西の畠地(路線外)に遺跡の中核があると思われ、その流れ込みが、第3～第7トレンチに分布している可能性が大きいものとみられる。

4. 出土遺物

出土遺物は、弥生式土器片及び石鏃であり、ほとんどが第4、5、6、7トレンチの出土である。

弥生式土器

口縁部 [第4図1]~(4)]

- (1) 推定の口径11.2cmの長頸壺口縁部と思われ、外反している。口唇はナデ調整のため平坦で約45度外傾しており、外側に調整によるふくらみを持つ。外面についてみると口唇下5mmは範状工具による横ナデ調整をしているが、その下は同様工具により縦に調整されている。器厚は口唇で6mm、下部で8mmを測る。色調は褐色で焼成は良好である。第4トレンチ出土。
- (2) 高環口縁破片と思われる。色調はうすい褐色を呈し、焼成良好、口唇は調整のため平坦で、外側にふくらみを持つ。器厚は口唇において7mm、下方において肥厚し、8mmである。第7トレンチ出土。
- (3) 高環口縁破片と思われる。褐色を呈し、焼成は堅緻である。口唇は平坦で、若干のふくらみを外側にもつ。器厚は口唇で6mm、下方において5mmである。第5トレンチ出土。
- (4) (2)(3)同様高環口縁破片と思われる。うすい褐色を呈し、焼成良好である。口唇の状態も前記同様である。外面には範状工具による調整痕がみられる。器厚は口唇で7mm、下方で5mmをはかる。第4トレンチ出土。

底部 [第4図5)]

小さな平底片である。色調は褐色で、堅い焼成である。推定径不明。第4トレンチ出土である。

石鏃 [第4図6)]

黒曜石製の無茎打製石鏃である。長さ1.4cm、幅1.8cm、厚さ0.25cm。第6トレンチ出土。

5. 結語

高崎町内には多くの遺跡が確認されているが、学術的調査の実施された例は少なく、弥生時代のものとしては大字大牟田上示野原遺跡について、今回の縦貫道関係が2度目である。調査されたもののほとんどは古墳時代の地下式古墳であった。

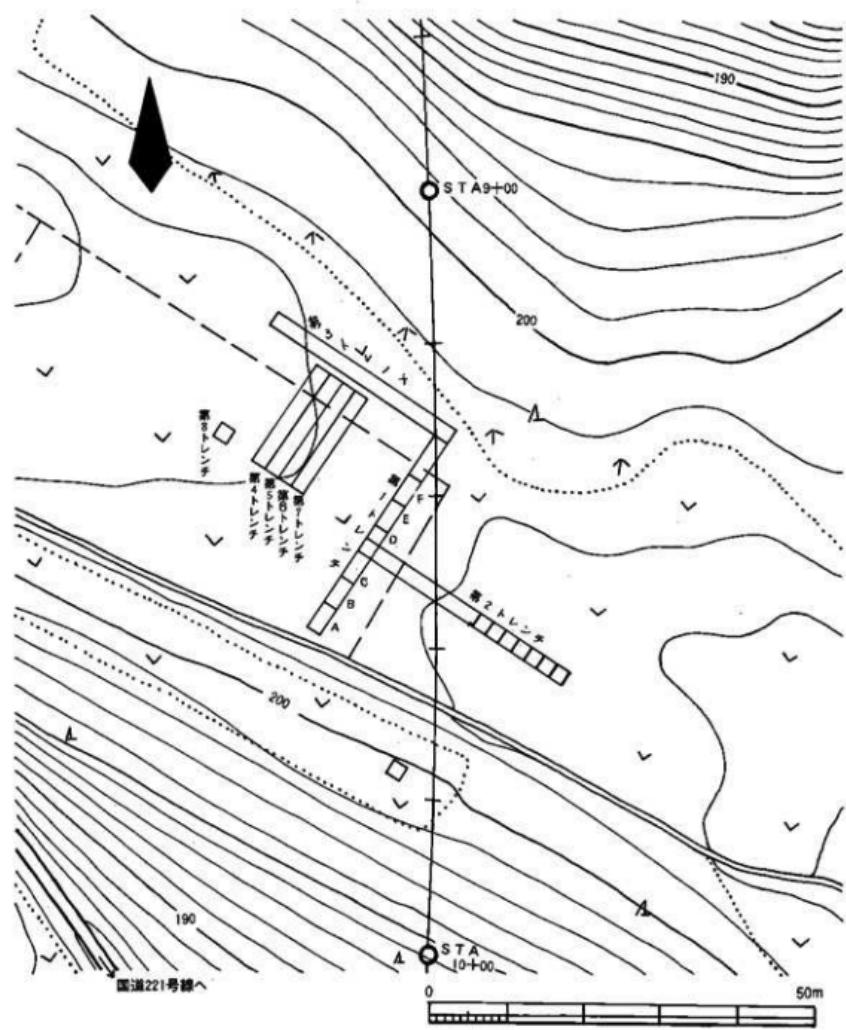
大字前田地区にも分布調査等により確認された遺跡が多いが、鳥井原遺跡が初めての発掘調査であり、その成果が大きいに期待された。

調査の結果は先述のとおりで、遺構は確認されず土器片の分布状況が明らかになっただけではあるが、縦貫道路線に接する地域に遺跡としての中心が存在することが充分に予測できる状況であった。

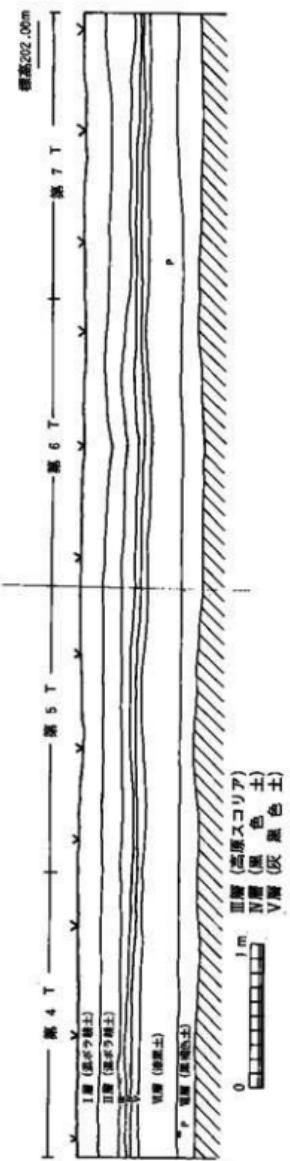
また、同地区の弥生時代包含層が把握できたことも成果の一つといえよう。

遺跡の時期的な問題・性格については、土器の一定の広がりは確認できたものの、破片のほとんどが小破片であり、特徴的なものの出土も少ないが一応弥生時代終末期のものとすることができよう。

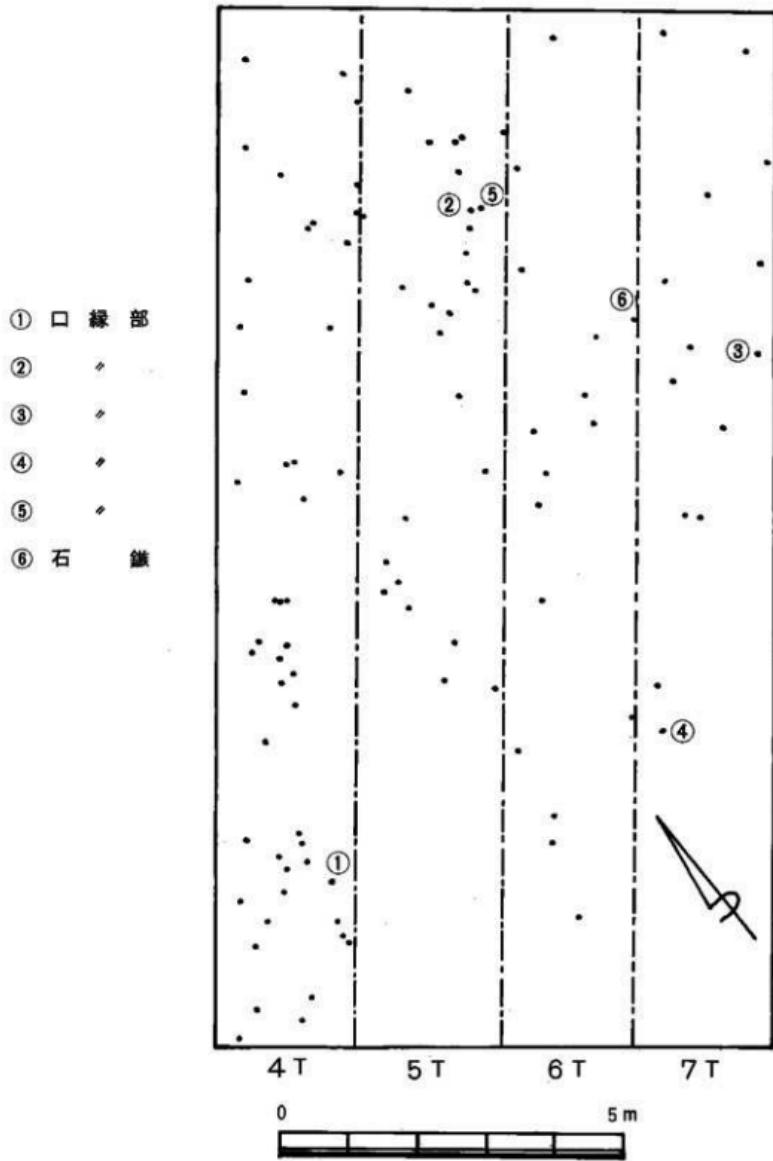
(岩永 哲夫)



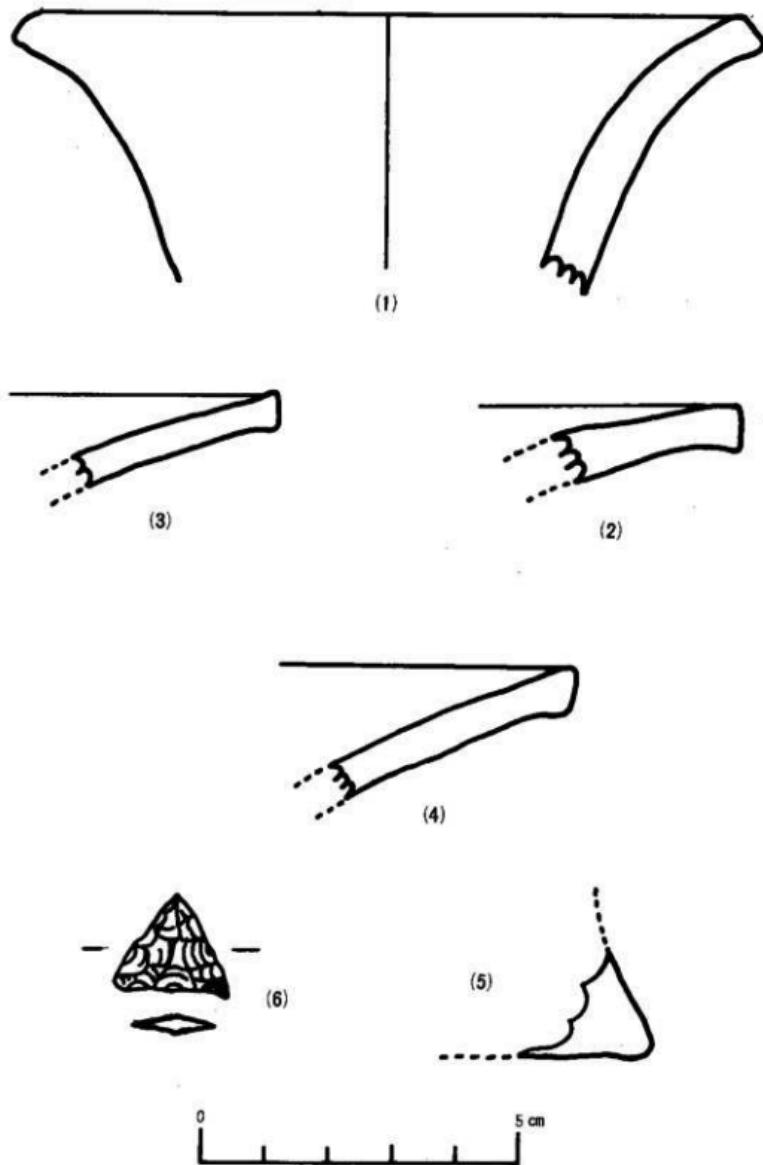
第1図 遺跡付近地形図



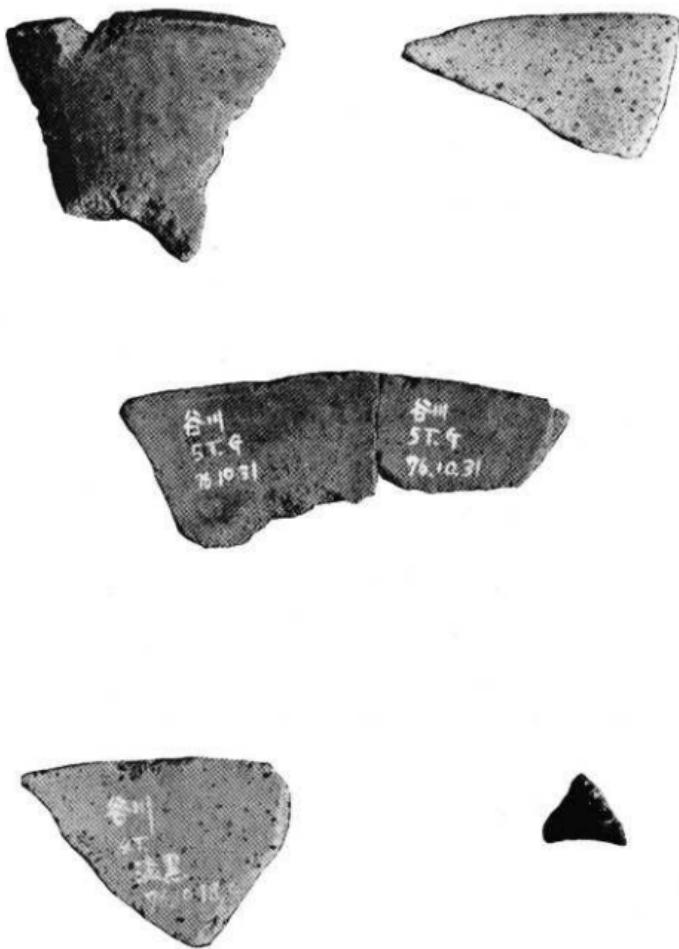
第2図 第4~7トレンチ東北壁土層図



第3図 第4~7トレンチ出土遺物分布図



第4図 出土品実測図



出土土器及び石錐

上所迫遺跡

北諸県郡高崎町大字前田上所迫

目 次

1. 位置と環境.....	21
2. 調査の経過と概要.....	21
3. 層 位.....	22
4. 出土遺物.....	22
5. 結 語.....	23

挿 図 目 次

第1図 発掘区図.....	25
第2図 土層図.....	26
第3図 土器実測図.....	27

図 版 目 次

図版1 遺跡の状況.....	28
図版2 出土土器.....	29

1. 位置と環境

追間は、北諸県郡高崎町大字前田にあり、都城・小林を結ぶ国道221号線と国鉄吉都線が平行して走る「日向田駅」の西南の位置にあたる。

遺跡の乗る台地は、東端は栗原から高崎川が、谷川において西に湾曲し御戸納に至る南位に形成された標高200m～210mの火山灰第四紀古層である。

遺跡は、この台地の中央部に東からY字状に入り込む小谷に狭まれて東西に延びる南北幅100mの舌状台地に営まれている。

調査時は、かなり平坦な畠地であり、陸稻や落花生が栽培されていた。

2. 調査の経過と概要

上所追遺跡の調査は、8月19日から8月27日までの8日間実施した。

計画道は、東西に延びる舌状台地の中央部を南北に横切るため調査予定区域は、約2,500m²程である。しかしながら、この地は陸稻や落花生が栽培されていたため全面的な調査は不可能であったが、幸い畠地の中央部の落花生栽培の地が収穫時期となっていたため、これらの収穫と平行して調査が進められることになった。

最初に、台地の南側部分に第1トレンチ、幅2m、長さ16mのトレンチを南北に設定し、それを各4m間隔で、南側からA～Dの4区に区切って調査を行なった。

第1トレンチでは、A・C区の包含層確認を行なったが、A区では、遺物の露出を見ず、C区において数点の遺物を見るにすぎなかった。

そこで、第1トレンチの東に接して、第2、第3トレンチを設定し、第3トレンチのD区とC区の調査を進めたが、遺物の包含は、非常に少なく、遺構の存在は不可能な状態であった。

8月20日にブルトーザーが導入されたため、舌状台地を南北に横割りする形で計画道センター杭S T 26から東に1.5mの位置に第4トレンチ（幅2m、長さ24m）と第4トレンチから5mの間隔をおいて第5トレンチ（幅2m、長さ28m）を設定し、大粒ボラ層までを除去した。

第4トレンチは、南側から4mの間隔でA～Fの6区に区切り、先に包含層の状況をつかむため、B区とD区の掘り下げを行なった。

遺物については、第V層の下部（層位については第3項で述べる）から土器の小片が散発的に露出するのみであり、しっかりした状態ではない。しかし、B区の北側よりの中央部にピット（径35cm、深さ26cm）1個とD区の中央部東側よりにピット（径35cm、深さ20cm）1個を検出したため、C区とE区の掘り下げを行なった。E区においてはピットの検出はなかったがC区の中央部西側においてピット（径25cm、深さ21cm）1個を検出した。

C区、E区においても出土遺物は非常に少ない状況であった。

ピットは、第V層の上面から掘り込んでおり、その配列についてみると、D区のピットとC区のピットとの間隔は380cm、C区とB区のピットの間隔は300cmあり、それぞれのピットとの間隔が非常に離れていることから住居跡等に伴うものではないと思われる。

その後、F区の掘り下げを行なったところでは、第Ⅳ層の上面において、他の区よりも、やや大きめの破片になることや、出土点数が多くなることはみられたが、遺構等についても確認することができなかった。

第5トレンチは8月23日から掘り始めた。最初にG区とE区の包含層確認を行ない、その後にC・D・F区の掘り下げを行なったが出土遺物は散発的であり、他に遺構らしきものも検出できなかつた。

そこで調査区域を広くする意味から、幅2m、長さ2mのトレンチを計画道内の東側に沿って南側に第6トレンチ、北側に第7トレンチ、西側の北に第8トレンチを設定して調査を進めたが、いずれのトレンチも、遺物の出土は希薄であり、遺構等も検出できない状況にあつたため、24日までトレンチによる調査は終了した。その後は、第4トレンチF区の東側層序の実測作業と地形測量に入り27日までですべての調査を終了した。

3. 層位

層位的には、第I層に耕土層(擾乱層)、第II層に高崎スコーリア層があるが、この層は大部分が深耕された耕作土となっており一部分にのみみることができる。第III層に大粒ボラ層(この層は地元では焼けボラと呼んでいる)、第IV層に黒色土層が薄くはいり、第V層に黒灰色の火山灰土層(この層は、地元では、二ガ土といわれ、耕作時に鍬等の刃部にくつつき作業が非常に困難なことからその名が呼ばれている)、第VI層に黒褐色土層、第VII層に少量ボラ混入の茶褐色土層がある。

上所追跡について、第VI層の下部から第VII層の上部が主要な包含層となっている。第VII層は多量ボラ混入の黒褐色土層、第VIII層に黄色ボラ層、第IX層に漆黒色土層、第X層に褐色土層(地元では、かじわんと呼ばれる非常に固い土層である)。

以上のようにこの地区は非常に火山活動の影響を受け、特徴的な層序を成している。

4. 出土遺物

上所追跡出土の遺物については、破碎した土器のみで、石器等の他遺物はみることができない。

土器については、復元できる状態のものではなく、器形を知るうえでの資料は、口縁部12点、平底の底部1点のみで、他は破碎された小片にすぎなかつた。こうした資料を器形と胎土から5分類にすることが出来た。以下、分類ごとに記述する。

第I類(第3図① ②)

これらの土器は、口縁部が直行するものであり、口唇部下がやや肥厚する感をもつ。胎土は固く砂粒を混入している。色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。器面は良く整形されており、横行の刷毛目をみることができる。口縁部のみでみるとかぎり深鉢を思わせる感があるが第3図①でみられるような頸部に台形状の凸帯をめぐらし、その凸帯に棒状のもので斜に押圧した絡繩凸帯(この土器片の斜行押圧には布痕を認めることが出来る)をもつ頸部が同一片であること。また、第3図②の平底の底部をともなうことから、器形としては變形土器とみて良いのではなかろうか。

第II類(第3図③ ④)

この土器は、口縁部が内湾し、胴部がやや張って平たい丸底をなす。胎土は、第I類の土器と同様に

固く砂粒を混入している。色調は赤褐色を呈し焼成は良い。No④は、口径16cmほどの小型浅鉢とみて良いものであろう。No③は、口径部の内湾は、No④よりやや鈍くなるものであり、深めの浅鉢であろう。浅鉢は全体的に薄手のものである。

第Ⅲ類（第3図⑤～⑧）

口縁部が外反し、頸部でゆるやかにしまり胴部にいたって膨張し、底部は肥厚した丸底か低い平底を成すものと思える。胎土は粗く石英等の小粒子を混入している。色調は、黄褐色を呈し焼成は悪い。

口縁部から頸部にかけては横行の刷毛目調整であり、胴部下は範調整である。器形的には、変形土器より深鉢形土器とみるべきであろう。また、こうした土器になると胎土、焼成等から弥生式土器の器形を残しながらも土師器への様相を呈し始めている。

第Ⅳ類（第3図⑨～⑪）

これらの土器は、口縁部のみであり、器形を知ることは出来ないが、粗製の土器であり口縁部が直行するものと、やや外反するものとがある。胎土は粗く砂粒を混入する。色調は褐色を呈し焼成は良い。器面は横行の刷毛目調整を行なっている。この類の土器は、弥生式土器の様相を残している。

第Ⅴ類（第3図⑫）

口縁部がかなり朝顔形に開く薄手の土器である。胎土は粗く砂粒を混入している。色調は黄褐色を呈し焼成は悪い。

口縁部のみで器形ははっきりとしないが、おそらく皿状を呈し、脚部をもつものと思われ、非常に土師器の様相を強く呈している。

5. 結 語

上所追跡については、遺構にともなう遺物の包含はみることができなく散発的な形での遺物の露出をみるとすぎなかった。このことは、九州縦貫自動車道の計画道用地内での調査という制約があったからである。

調査中に近隣の人間に聞いたところによると、数年前に今調査地点から南東に200m程離れた人家の敷地を造成したところ、多量の土器片を露出したとのことであり、遺跡の主体部はこの周辺にあったのではないかと思われる。

しかし、今調査での遺物は、單一層に包含されており、一時期の遺物であることは疑えないものである。土器についてみると、第1類、第2類、第4類は弥生式土器の様相を呈しているが、第3類、第5類については、弥生式土器の様相をもちらんながら土師式土器の様相を強く呈するものである。

こうした土器の類例を出土した遺跡を掲げてみると、小林市大字南西方字平木場の平木場遺跡出土の弥生式土器、⁽¹⁾小林市大字細野字竹山の竹山遺跡の弥生式土器、⁽²⁾えびの市大字長江浦字西城の灰塚遺跡の⁽³⁾弥生式土器B類等がある。これらの遺跡からは、それぞれ頸部や胴部に一条から二条の刻目凸帯、あるいは結繩状凸帯をもつ變形の土器を出土している。

また、結繩状凸帯をもつ土器には土師器的様相をもつ土器を共存していることに注目しなければならない。この現象は、小林、えびの、諸方地方と霧島山系の麓地域に集中している。いわゆる弥生式時代の後期から終末に比定されている成川式、免田式、安国寺式の土器とは様相を異にするものであり、こ

の地方特有の一様式を成すものと考えられる。

上所追遺跡出土の土器についてもこの範疇に入るるものであり、弥生式時代終末から古式土師器への移行接点にあたるものと思われる。

平木場遺跡、竹山遺跡、灰塚遺跡にしても類例土器の出土点数が少なく正確に様式の位置付けをすることは困難である。

しかしながら、弥生式時代の終末を考えるうえには欠かせないものであろう。

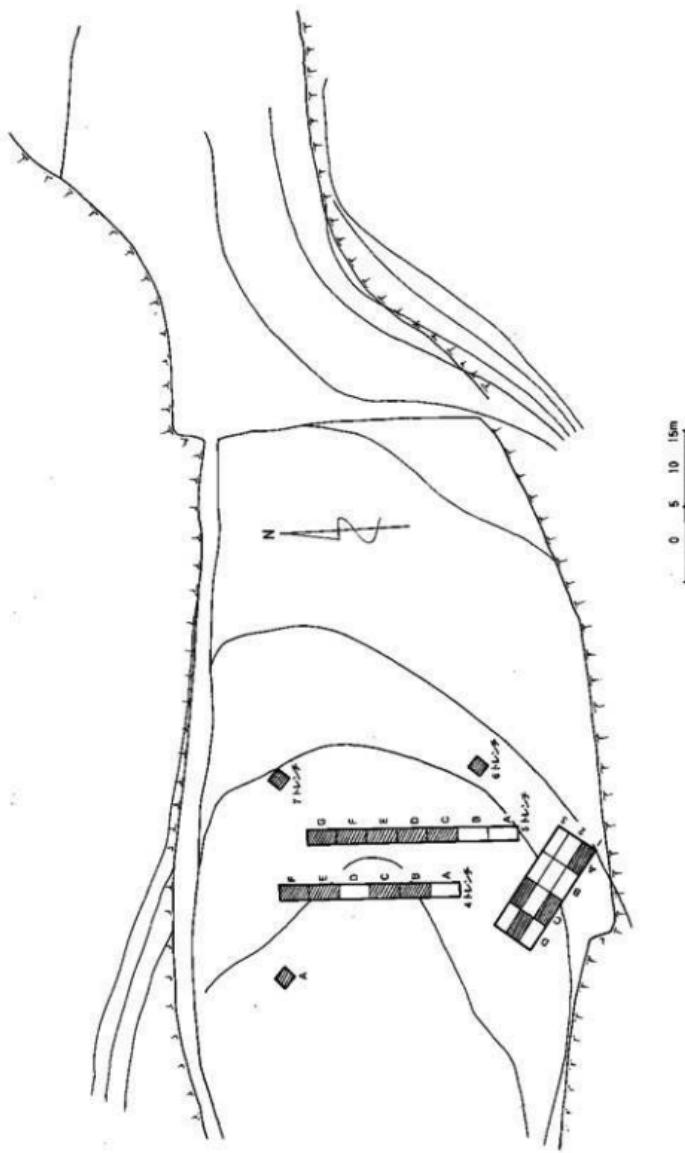
今後、こうした時期の指標となる遺跡の発掘調査を行ない、弥生式土器から土師器への移行過程を明らかにしたいものである。

(野間重孝)

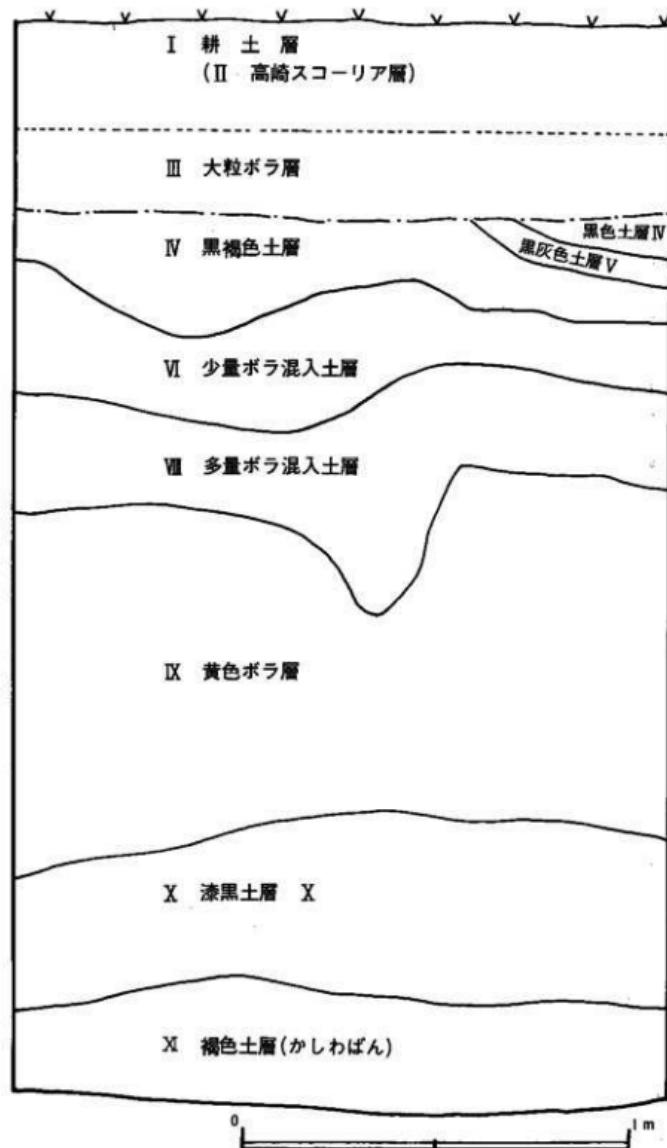
注1 宮崎県教育委員会(1972)九州概観自動車道埋蔵文化財調査報告(1) -平木場遺跡-

注2 * * -竹山遺跡-

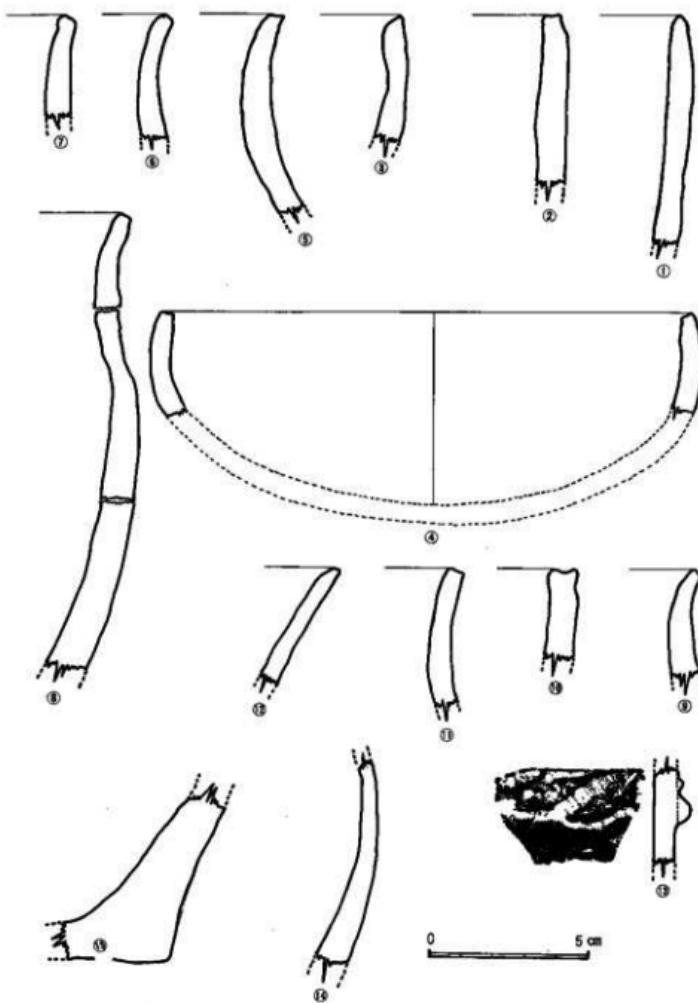
注3 * * (1973) * (2) -灰塚遺跡-



第1図 発掘区図



第2図 土層図



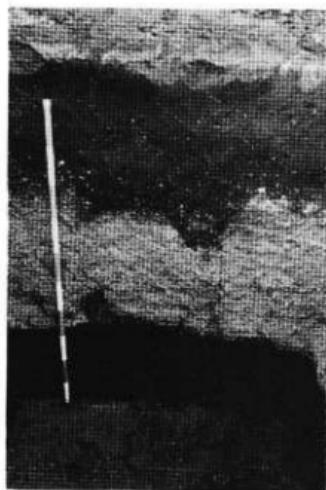
第3図 土器実測図



(1) 造跡造景



(2) トレンチの状況



(3) 土層状況



(4) 発掘風景



栗 巢 上 原 遺 跡

北諸県郡高崎町大字前田字栗巣上原

目 次

1. 位置と環境.....	34
2. 遺跡の概要.....	35
3. 造構と造物.....	39
(1) 造 構.....	39
(2) 造 物.....	42
4. 結 語.....	48

挿 図 目 次

第1図 逸跡付近地形図.....	33
第2図 トレンチ配置図.....	36
第3図 地 層 図.....	38
第4図 XIトレンチの遺物出土状況.....	39
第5図 VI・VIIトレンチの造構実測図.....	40
第6図 IV・Vトレンチの遺物出土状況.....	41
第7図 土器実測図.....	43
第8図 土器実測図.....	45
第9図 変形土器復原図.....	46
第10図 石鎌と小玉.....	46
第11図 土器実測図.....	47

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景.....	50
図版2 発掘状況.....	50
図版3 IV・Vトレンチ遺物出土状況.....	51
図版4 VI・VIIトレンチ遺物出土状況.....	52
図版5 XIトレンチの遺物出土状況.....	53
図版6 栗巣出土の絹繩突蒂土器.....	54
図版7 栗巣出土の絹繩突蒂土器.....	55
図版8 栗巣出土の丹塗土器.....	56



第1図 遺跡付近地形図

1. 位置と環境

栗巣上原遺跡は、北諸県郡高崎町大字前田字栗巣上原3355に位置している。高崎から小林へ向って国道221号線を進むと、高崎から約6kmの柏ノ木入口で国道から分岐して南西へはいる町道がある。この町道にはいるとまもなく国鉄吉都線を踏み切り柏木橋に至る。橋を渡ると道は大きく右廻し北西方方向へ進路をとる。水田の間を高崎川の支流追間川を左にして進むことおよそ1kmで栗巣の集落に到着する。この栗巣の家並の背後に広がる標高180~190mの台地が、今回調査の対象になった栗巣上原遺跡の所在地である。（第1図）

遺跡の所在する台地は、高崎川の右岸に沿って追間川との間に、北西から南東へ連なる開折台地の南東端の舌状部にあたる。この地は、南東に向って開け、前面に高崎川の流れと、その右岸に開かれた狭長な水田を見おろし、西方には霧島山の秀峰を眺望する景勝の地ではある。台地の南西側は急崖をなし、追間川に面し、迫を隔てて、標高242mの丘陵と対立する。自動車道は、この栗巣上原の台地をほぼ南北に近い方向に縦断するよう設定されていた。

遺跡周辺には、高崎川をはさんだ東方丘地に、柏ノ木遺跡（縄文散布地）が、それに北方の谷川の国道沿いに鳥越遺跡が知られているだけで、目立った遺跡は確認されていない。昭和46年度の遺跡分布調査によれば、高崎町内では、大字前田地区に源太遺跡（弥生）、大牟田地区では荒場遺跡（弥生）、上勢西遺跡（縄文）、東霧島地区に東遺跡（古墳）、江平地区には塚原古墳群、大川毛遺跡（縄文）、縄瀬の桶ノ口遺跡（弥生）、共和地下式横穴群、横谷古墳群など13遺跡が報告されているだけである。このほかに主要な遺跡として、仮屋尾地下式横穴群、木下遺跡（縄文）、上示野原遺跡（弥生）、山王原遺跡（縄文）、一家遺跡（土師）、鶴戸遺跡（縄文）、小牧遺跡（土師）、それに炭床遺跡（縄文）などが加えられる。これらの遺跡の多くは遺物の表様によって所在の確認されたもので、地下式横穴の緊急調査を行なった横谷、共和、仮屋尾を除いては遺跡の性格の明らかなものは数少なく、高崎町内に分布する遺跡の考古学的調査研究は、これからようやく開明の緒につこうとするところである。

現在、高崎町教育委員会に保管されている収集資料を見る限り、縄文期に関しては炭床遺跡の隋円押型土器が早前期の資料としてあるだけで、中期に関しては皆無に近く、指宿式や市来式系統の後期資料が多い。弥生期に関しては、後期から終末期にかけての資料が多く遺跡の分布もある程度把握できる。前期から中期については、これまでのところほとんど遺物が採集されていない。古墳期については、縄瀬と塚原にかけて分布する横谷古墳群、塚原古墳群の指定古墳16基をはじめ緊急調査で確認された地下式横穴10余基などが知られている。

北諸県郡地方の主要遺跡の大半は、高崎町、高城町、都城市、山ノ口町、それに山田町の1市4町が境界を接する都城盆地の北西部段丘状台地上にあり、大淀川、高崎川、丸谷川等の合流する地域を中心に分布していることになる。このことは、この地域の遺跡の性格解明が、北諸県郡地域の古代史究明の上からも重要なことを示唆しているといえよう。

注1 九州縦貫自動車道（宮崎線）関係遺跡分布調査報告書 宮崎県教育委員会 昭和40年

注2 高崎町内の遺跡分布と遺物等の収集保存については、高崎町教育委員会の黒木正二氏の盡力に負うところが大きい。石川恒太郎“高崎町炭床出土の縄文土器について”宮崎県文化財調査報告書第16号 宮崎県教育委員会 47年

2. 遺跡の概要

発見の経緯 49年に土地の所有者牛谷一氏が、芋の貯蔵用穴を掘った際、壺や环形土器が出土し、この届出を受けて高崎町教育委員会の黒木昭三氏の踏査により遺跡の存在が確認されたものである。今回現地での表面観察では、わずかに数片の工器細片が採集されただけで、大規模な遺跡の埋蔵を予想することは困難であった。しかし、予定路線が先の土器の出土地点を通っていることもあり今回の現状調査となったものである。

路線にかかる調査対象地は、微量ではあったが土器片の表探地点を中心におよそ 9,000 m² を越える範囲に及んだが、土地の買取問題が片付いていない畠地や、栽培作物の収穫がおわっていないなど種々の制約もあり、実際に調査できたのは対象地の約 3% にあたる 250 m² の範囲にすぎなかった。

調査の経過 調査は51年8月17日から9月2日にかけて15日間実施した。調査に際しては、栗巣の集落を見おろす台地南線に近く、予定路線基準線の STA 40から40+60の間の畠地をⅠ区、その西方に飼料畑を間にした畠地、STA 39の標柱の立つ畠地をⅡ区とした。調査はほとんどⅠ区に集中して行なわれ、Ⅱ区については、期間内にじゅうぶんな試掘を実施されないままに調査期間を終了した。以下、調査の経過を概説する。

16日 午後高崎町教育委員会で、調査員・県文化課・道路公団三者間の調査打合せ実施。その後、公園側の案内で現地を訪れ、調査区を設定する。

17日 発掘に着手する。予定路線の中心線を基準にして、これに平行して調査溝を設定し、包含層及び遺構の現況調査にはいる。福尾・緒方・蛇島の3君は地形測量にあたる。

18日 第1トレンチを中心に発掘を進め、B・C区において若干の遺物出土するにも確実な包含層なし。

午後から激しい降雨に見舞われ作業を中止する。

19日 本日より野間調査員の率いる上所追遺跡の調査班が分れたために人夫数も半減し作業能率が低下する。第Ⅱ・第Ⅲトレンチの発掘を併行する。Ⅱ-B、Ⅰ-Cで土師器や結縄突帯文の土器片を、Ⅲ-Aで須恵器片の出土をみたが、各区ともまとまりある包含層はみつかなかった。

20日 Ⅲ-A区及びⅠ-A区の掘り下げを行なう。Ⅰ-A区で炭化材を検出する。

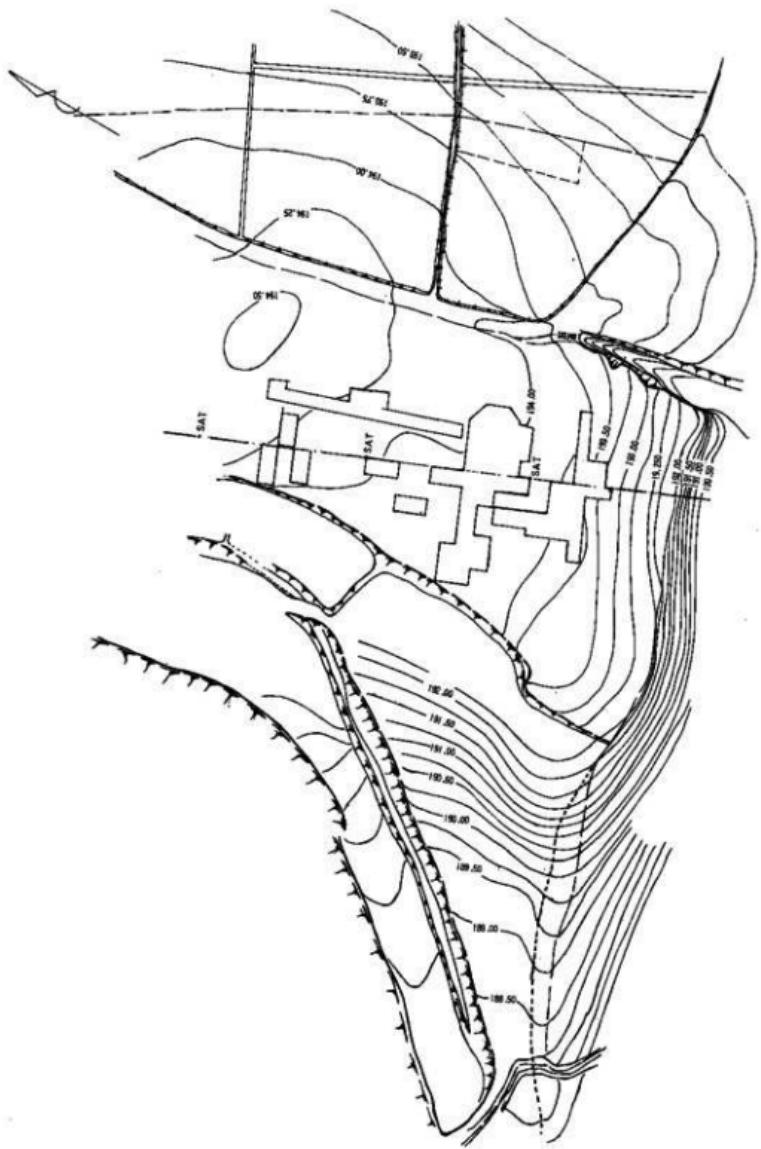
21日 第Ⅵ・Ⅶトレンチの調査にはいる。Ⅵ層を中心にかなりの土器片を検出する。ある程度のまとまりをもった包含層が存在するかもしれない、若干の期待をもつ。

23日 Ⅵ・Ⅶトレンチを中心に土器包含層の広がりの確認にあたる。検出される土器はいずれも細片化し、破碎散乱の状態にあり、まとまりをもった土器片の出土をみなかつた。

24日 Ⅵ・Ⅶトレンチの散乱土器に伴う遺構確認のために、トレンチ内の掘り下げを行なった。この結果、ボラ層面に長軸を N 24°E におく 4.2 × 3.7 m の長方形状の掘り込み痕跡を検出した。

25日 本日から再び上所追遺跡の調査班合流し、11トレンチの発掘を担当する。昨日にひきつづき、Ⅵ・Ⅶトレンチ内の検査にあたるのも柱穴とみられるピットの検出がなく、竪穴住居跡としての確認は得られなかつた。

26日 作業開始後まもなく降雨、次第に激しくなり晴れる気配もないで作業を中止し、宿舎に引き



第2図 トレンチ配置図

あげ遺物の整理にあたる。

27日 VI・VIIトレンチと拡張区との間に残っていた観察用土堤の撤去作業をすすめる。午後から再び降雨のため作業中止。

28日 VI・VIIトレンチを更に西方へ拡張する。拡張区から多量の炭化物細片と滑石製小玉1点を検出。炭化物の細片は出土状況から焚火跡と考えられるものであった。

30日 各トレンチ内の精査・実測作業を行なう。

31日 昨日に引きつづき出土遺物の実測や土層図の作成にあたる。

9月1日 第II地区の試掘調査を行なう。2×10mのトレンチを南北に設定発掘したが、ボラ層上面に若干の縄文土器の破片や黒曜石の細片を検出したが、特に造構を伴う出土状況ではなかった。I区とは出土遺物に相違が認められるだけにさらに周辺への拡張がのぞまれたが、調査期限もあり断念せざるを得なかった。

2日 I区の残務整理を行ない、午後調査テントの撤収・器材搬出を行ない栗巣上原遺跡の確認調査を終了した。

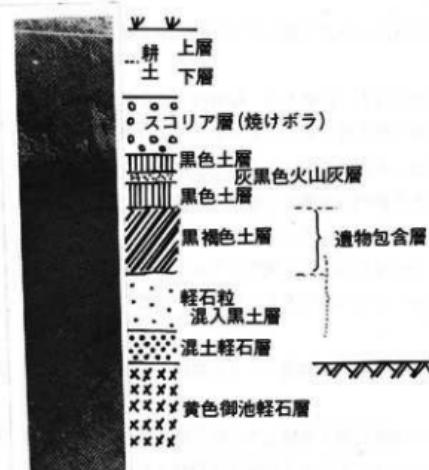
遺跡の層序 シラスなど火山噴出物を基盤とする段丘状地形の台地上にある栗巣上原遺跡では、VI・VIIトレンチ西壁の地層図によれば、次のような層序が観察された。

I層 表土上層（耕作土で灰黒色を呈する）(20cm)、II層表土下層（暗灰黒色土）(7~10cm)の下層に、III層は俗に焼ボラと呼ばれる黄灰色の硬質軽石層（20~30cm）があり、畑作に大いに障害となっている。IV層は漆黒色土層（7~10cm）がはいり、V層は黒灰色土層（5~8cm）、VI層黒色土層（10~18cm）と薄い層がつづき、VII層に黒褐色土層（15~20cm）がくる。VII層は、黄橙色のボラ粒を混在した黒土層（20cm）となる。この層は次第にボラの混在密度が増し、ボラの中に黒土が混在する混土ボラ層（10~15cm）に移行する。そして、V層に完全な黄橙色から灰白色のボラ層（御池軽石層）が170m~200cmの厚い層をなして台地に覆っている。軽石層の下層には再び黒色土層、黒褐色土層の腐植質土層がくるが、今回は、この下層までの調査はできなかった。

以上の層序では、第VII層の黒褐色土層が遺物包含層になっていた。各トレンチごとに、かなり土層の乱れがあり、畑地の開墾や基盤整備等で一度ならず上層面は擾乱を受けた形跡がみられた。しかし、出土遺物の大半は、第VII層に集中しているのをみると、第VII層に栗巣遺跡での生活面が一時期あったことを暗示するものであった。しかしVI・VIIトレンチの掘り込み以外に性格の明らかな造構は検出されなかつた。

遺物の出土状況 断片的ではあったが、発掘区全域にわたって何等かの土器片の出土をみている。トレンチ別では、VIIトレンチに最も集中して出土した。ついでIV・Vトレンチ、Xトレンチ、IIIトレンチの順に、細片化しながらも部分的にはある程度のまとまりをもって出土しているが造構を伴うものはなかった。層位では各トレンチともVII層からVIII層にかけて出土したが、特にVII層上層部に集中出土している。VII層以下は無遺物層となる。IV・VトレンチとVI・VIIトレンチを除き、出土遺物の大半は破碎細屑化したものがほとんどであった。

出土土器の主要なものは、弥生土器系の縦縄突帯文の變形土器であったが、XIトレンチ及びII区の試掘溝からは、VII層上面で数個の縄文式土器が出土している。縦縄突帯文土器はVII層からVIII層にかけて出



第3図 地層図

土しているが、層位的に形態差を確認することはできなかった。Ⅳ層内から出土した縦縄突帯文土器の破片総数は46点で、量からみて数個体分の分量と考えられる。Ⅱ・Ⅲトレンチと、Ⅵ・Ⅶトレンチからは、丹塗された壇や商環の破片とみられる細片がかなり出土している。そのほかに、須恵器の破片がⅢトレンチとⅥトレンチから數片出土した。ⅢトレンチではⅤ層とⅥ層にかけて検出されたが、共に同一個分であった。

全体的に土器の細片化の傾向が強く、層位的にはⅥ・Ⅶ層に集中してはいるが、かなり上層からも混然とした状態で出土しており、鋤歎による擾乱を受けていることが考えられた。しかし、なかには単に鋤歎による破損擾乱とだけ断定できない出土状況のものもあった。例えば、Ⅺトレンチの中央部分に見られた剝石を中心とした丹塗土器片の散乱や、Ⅳ・Ⅴトレンチにおける比較的まとまりをもった土器片の集積などは、意図的な破碎投棄による散乱や集積と見なされる可能性のつよいものであった。

Ⅳ・Ⅴトレンチの土器片の集積は、第Ⅳ層の褐色土層中に検出されたもので、壺・甕・高环・鉢形土器がおよそ3米四方に散乱集積していたものである。壺形土器と高环土器を中心に破碎散乱した土器は高环の脚台を除きほとんど原形を留めるものはなかった。また、Ⅺトレンチの場合は、長さ50cm、幅15cm前後の安山岩の剝石3個を中心にして径2.5mの範囲に細屑化した土器片が散乱していたものである。剝石の傍には、掘方20cm、内径8cmの垂直に掘りこまれたピット1個が検出されており、支柱のあったことを示していた。剝石を中心と丹塗高环土器等の散乱状況と合わせて考えると、何等から儀礼行為に伴う祭場の神籠的な性格をもった支柱跡とも推定されるものであった。Ⅳ・Ⅴトレンチには剝石は存在しなかったが、集積散乱した土器群の西傍にも同様の径20cmのピットが1個検出されており、何等かの儀礼行為の存在したことを暗示させるものである。



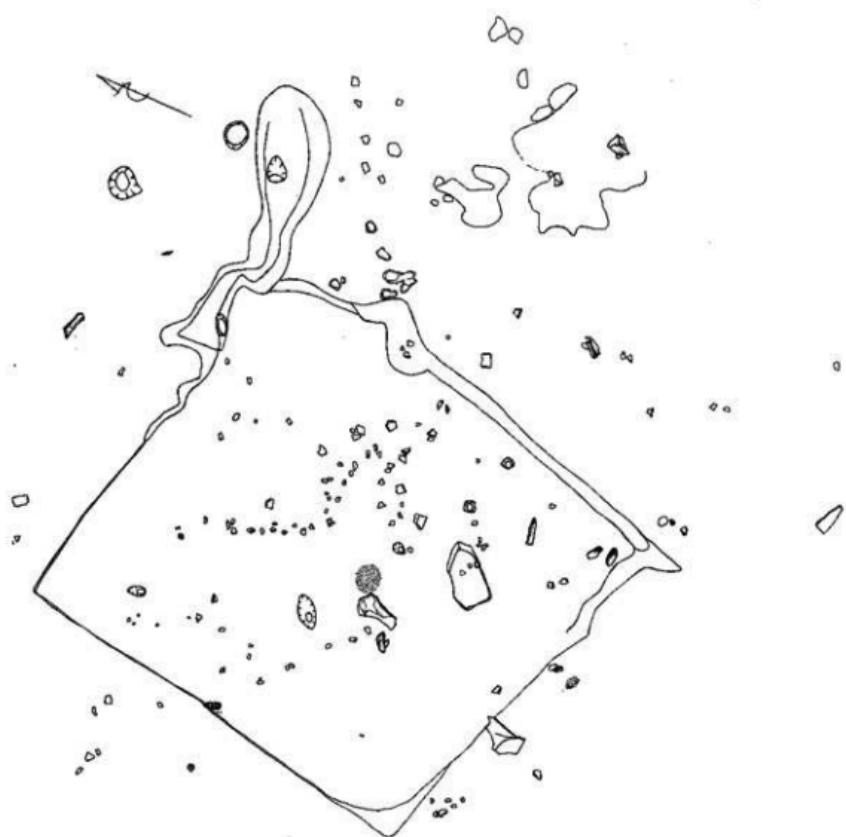
第4図 XIトレンチの遺物出土状況

3. 遺構と遺物

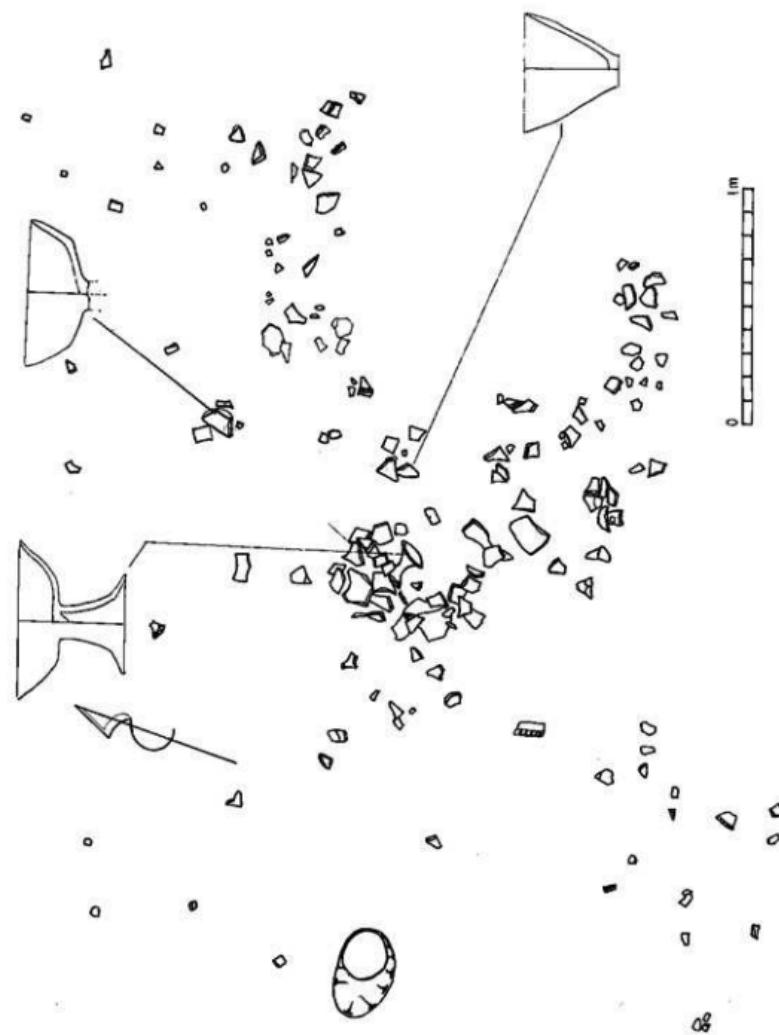
(1) 遺構 (第5図)

遺構としてある程度のまとまりをもったものは、VI・VIIトレンチに検出された長方形の豊穴だけである。XIトレンチの剝石と碎屑土器群とピット、IV・Vトレンチのピットは、何等かの儀礼行為に伴う祭場としての性格をもつたものではあるが、祭祀遺構と断定できるだけの確証には乏しいものであった。

豊穴住居跡様遺構 VI・VIIトレンチの第X層軽石層面で検出されたもので、南北4.3m、東西3.4mの長方形状に、およそ5cmの深さに掘り込まれていた。西側辺が若干短かいため、全体平面形はやや梯形状になる不規則な長方形豊穴になっている。北東角に楕円状に伸びた構様の凹みが、東西に約2mの長さに伸びていた。床面には内径5cm前後のピットが5個検出されている。4個は床面のほぼ中央付近を東西方向に60~80cmの間隔で並び、1個は北西隅近くに位置していた。床面には他にピットではなく、豊穴住居跡の支柱となるような配列は見られなかった。掘り込みの北側外周に径20~30cmの掘り方をもつ円径10~15cmのピットがあったが、豊穴と関連づけられるようなま



第5図 VI・VIIトレンチの遺構実測図



第6図 IV・Vトレンチの遺物出土状況

とまりのあるものではなかった。床面のほぼ中央付近に径20cmほどの焼土面が検出されたが、焼土の厚みもさほどなく一時的な焚火の跡と推定されるものであった。この焼土の傍に安山岩の剝石と、楕円球状の礫石1個があり、南東へ60cmほど離れた位置には長径60cm、短径30cmほどの扁平な砂岩礫が放置されていた。この扁平礫は、軽石層の床面に密着しており、最初から平坦な自然面を上にして横置されていたものと考えられ、立石が倒れたような痕跡は全く認められなかった。このほかに、掘り込みの南東隅や、西側辺にも楕円球状の礫石がそれぞれ2個・1個と放置されていた。また南側辺には剝石1個が出土している。竪穴の床面に検出された土器片はいずれも細かく破砕したもので、1個体分としてとまりのある復原可能な土器片は皆無であった。

長方形の掘り込み、焼土とその傍に置かれた礫石等竪穴住居跡としての様相はみられたが、明確な支柱を示すピットがなかったことなど、住居跡としつて断定できる確証を欠いた遺構であった。住居跡とは断定されなかつたが、同様な扁平礫を床面に放置した例として西諸県郡野尻町大萩住居跡群の3号竪穴がある。また、楕円球状の自然礫が数個竪穴内に放置されていた例として高崎町上示野原住居跡遺構がある。ここでも縦縄突帯文土器を出土しているが、どの土器も粉々に破碎されていた点、本遺構と共に通した様相がみられる。出土土器からほど同時期と考えられるが、上示野原でも長方形竪穴でありながら明瞭な柱穴が確認できなかつた事は、床面がボラ層という地層的な影響があるかもしれないが、或はこの時期の共通した竪穴住居の形態だったとも考えられる。遺構そのものが明確さを失っていたために連続はさしひかえたいと思う。

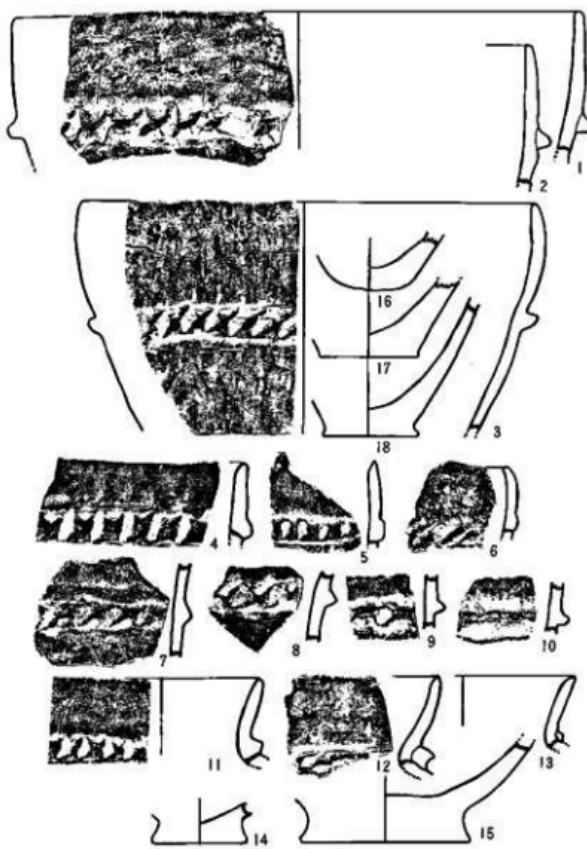
(2) 遺物 (第7~11図)

栗葉遺跡から出土した遺物には、弥生土器のほかに滑石製小玉、磨製石器、それに縄文土器がある。

弥生土器 (第7~9図)

斐形土器 (1~10、16~18) 口縁部が直口乃至は内湾する胴張りの小さな斐形土器である。口径は30~35cmの間にある。口縁から約8cm、短かいものでは5cmほど下った位置に器体をひとめぐりする貼付突帯がある。突帯には布を巻いた範囲工具でもって斜に刻目を施文している。刻目は粗く押引き状に施文され、刻目内に布目压痕がみえる。なかには指頭による施文と考えられるような押点状のものもあるが、全体としては刻目自体が幅広い事もあってちょうど繩を巻きつけているような印象を与え、いわゆる縦縄突帯文を構成しているのが特徴である。底部は、ゆるやかに裾開きする小形の平底 (17·18) か、或は、丸底に近い平底になる。この斐形土器を図上復原したものが第9図である。復原による推定口径は28cm、器高30cm、底径6cm。内湾する口縁から底部へ向って直線的に傾斜する胴張りの少ない器形は、底部の小さい事もあってやや不安定である。斐形土器はいずれも輪積成形で、器面には部分的に刷毛目痕をみる。口縁内面にはヨコナデがみえる。

一般に、北諸・西諸県郡地方に出土する縦縄突帯文をもつ斐形土器は、形態から大きく2つに分けられる。すなわち、(A類) 口縁が外反し、「く」の字形にくびれ部に突帯をめぐらすもの、(B類) 直口乃至内湾する口縁部をもち胴張りの小さな器体のものとである。底部は、どちらも平底がやや上り底気味の平底がつく。中に若干脚台状を呈するものがあるが、著しく中空上げ底の脚台形を呈



第7図 土器実測図

するものはきわめて少なく、無に近い。この變形土器は、口縁から突帯までの口縁部立上り部分の間隔に長短があり、さらにa(長い)、b(短い)に細分されることは、各地の出土例から明らかである。栗巣遺跡の變形土器は、1・2・4が直口を呈するが、全体の傾向としてはB類bに属している。

壺形土器(11~13) 外反あるいは内湾する口縁部をもつ。推定口径は12~14cm、口縁部の長さは5cm前後である。屈曲する頸部には變形土器同様の絡繩突帯文がめぐる。胴部の形態については明らかでないが、高崎町示野原出土の壺形土器例に従えば、かなり胴張りの器体が予想される。底部は丸底あるいは丸底に近い平底になるものとおもう。15にみるような比較的大形の平底をもつものも存在するようである。絡繩突帯を有する壺形土器と變形土器は、確実な共伴例が少なく、両者の組みあわせについては、検討の余地がある。本例はⅢとⅤトレンチから出土したもので単独に出土したもので単している。形態的には、直口乃至内湾する口縁部をもつB類の變形土器と本例が組みあわせになることは考えられるが、破碎土器片だけに速断は避けたい。

壺形土器(19・20) 口縁の屈曲部が明瞭な稜をなす開口した二重口縁をもつ壺形土器である。下腹部から底部を欠くが、扁球形の器体がつくものと予想される。胴最大径は中位にきそうである。器面は丹塗研磨され光沢を有する。胎土はきめ細かい。焼土はやや低い。器形から土師式土器の五鎮系に近く古式土師器との接触が十分に考えられる土器である。

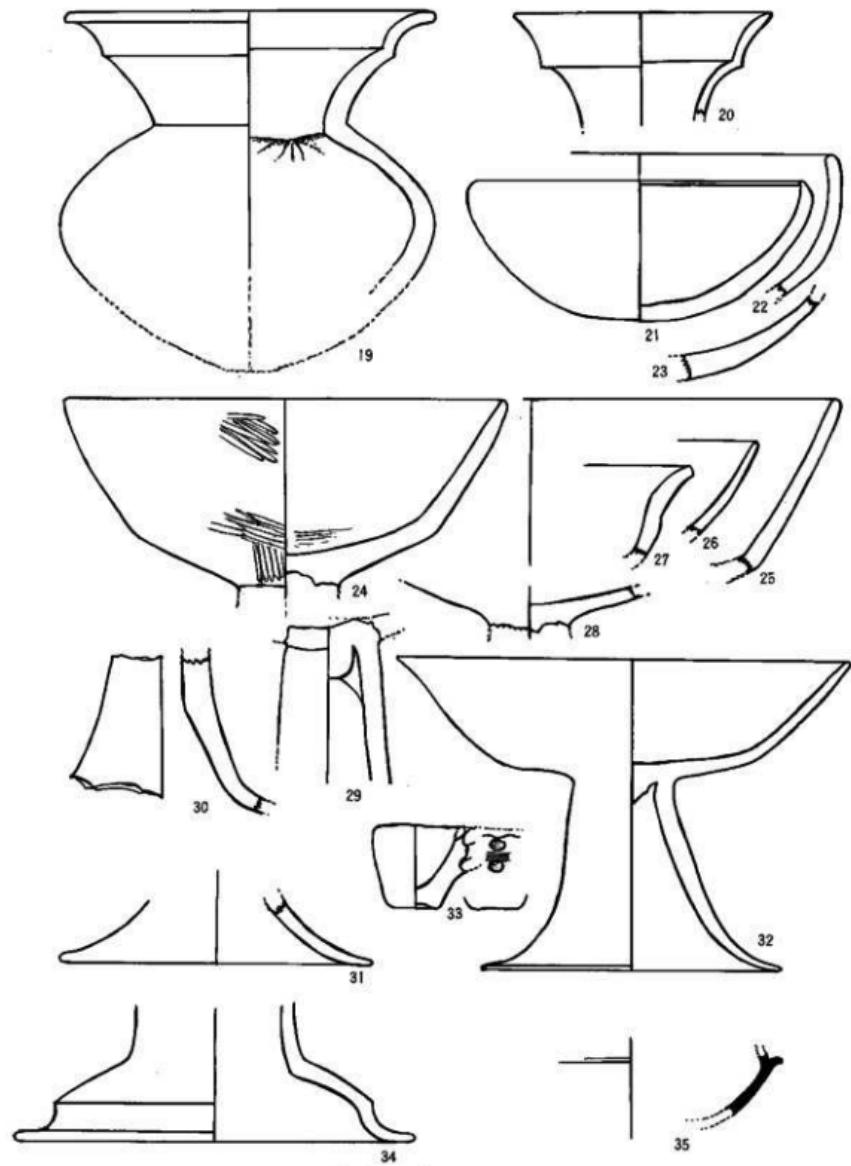
楕形土器(21~23) 口縁端が内湾する楕形土器である。口径は13~14cmを測る。器面は箠磨研磨され丹塗されている。胎土はきめ細かく、焼度も高い。22は、胎土に多量の石英粒を混在しており、化粧土の剝離した器面には石英粒が光沢を与えている。推定口径は18cmを測る。VIトレンチから出土したものである。形態から土師器の和泉式の楕形土器に近い。

高環形土器(24~32) 24・25のような環部の深い高環と、32のような環部の浅い型のものがある。どちらも環部の立あがり部分と受部の境に屈曲がみえる。脚台は29のように脚柱状のものもあるが、30・32のように裾開きの脚底となるものが多い。24は口径19cm、環の深さ6.5cm、内外面とも丹塗されている。32は口径19.5cm、環の深さ4.5cm、器高13.5cmを測る。脚底面は器高とほぼ同長の径を測り、開底となっている。34は、器台の脚底部分と考えられるもので、部分的に丹塗の痕跡がみえる。焼度はあまり高いとはいえない。

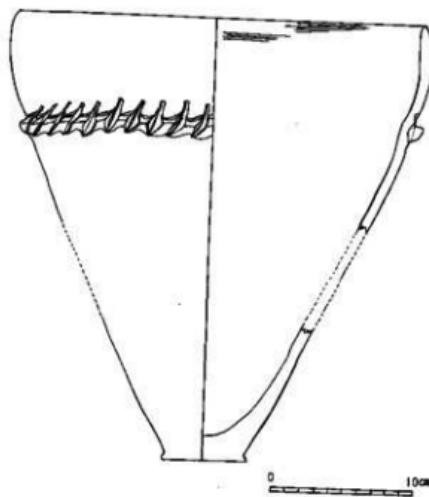
小形土器(33) 唯一の完形に近い出土品である。VI・VIIトレンチ内の竪穴住居跡様遺構の上層部分から出土している。片側に把手があつたらしく5mmの間隔をおいて上下に径5mmほどの円形の把手痕跡がある。胎土は一見きめ細かに見えるが、わりと石英粗を混在する。焼度は良好で、焼きしまりを感じさせる。色調は褐色を呈する。現存品の口径は3.8cm、器高3.5cm、底径は2.3cmを測る。このような小形土器は、野尻町大荻遺跡や、今回の調査遺跡の一つ都城市丸谷町の丸谷第2遺跡にも類例がある。

須恵器(第8図-35)

1环の受部の破片である。小片であるため完形は明らかではないが、平坦な受け部に傾斜角度が比較的小さな立ち上がりをもつ环が予想される。受け部の推定内径は10cm前後になるのではないかともわれる。胎土に白色の微粒子を含むため器面に白い斑点がみえる。斑点部分に間隙があるため器



第8図 土器実測図



第9図　変形土器復原図

面にザラつきがある。色調は暗青灰色を呈する。

磨製石鏟（第10図-1）

IV・Vトレンチから出土したものである。正三角形状を呈し、周辺に両刃の研磨線が通る。底辺は若干の扶り込みがある。長さ1.8cm、底辺幅2cmを測る。岩質は粘板岩である。

滑石製小玉（第10図-2）

扁平な滑石製の小玉である。VIトレンチ南側の埴層上面で検出されたもので1点だけであった。直徑6mm、中央に径1.6mmの穿孔あり、玉の厚みは1.8mmである。玉は、周辺が薄く、中央に厚みをもった蒲鉾形の断面形を呈する。緒孔は片側穿孔、色は緑を帯びた褐色を呈する。



2

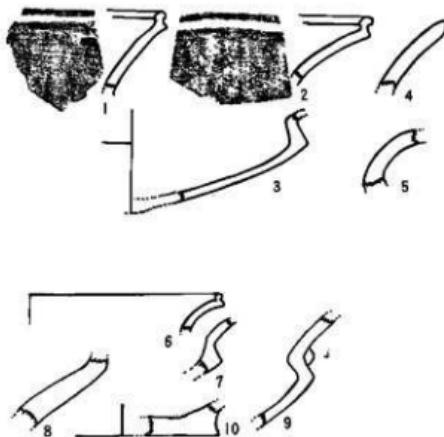
第10図　石鏟と小玉

縄文式土器（第11図）

縄文期の遺物としては、I区のⅠトレンチⅦ層から出土した5点と、II区の試掘溝Ⅹ層に検出された5点の計10点の土器片がある。いずれも縄文晩期に比定される黒色研磨土器の破片とみなされるものである。

外反する口縁部は、くの字に屈折して立あがりの短かい二重口縁を形成しており、立あがり部分には内外面に一条の凹線をめぐらしている。このため口縁は両面から削られた様に丸形の口唇をなしている屈折した頸部は短かく、肩部の張り出しも小さい。縫をなして屈折した下腹部はそのまま底部へと移行し、身の浅い鉢形となるものとおもわれる。以上の形態は、I区・II区どちらの破片とも共通してみられ著しい差は認められない。肩部に瓢形状の飾りつけたものもある。これらの破片は、灰黒色ないしは灰褐色を呈し、器面は滑らかで光沢を保っている。いずれも小破片で出土量も少なく断定できないが形態から晩期中葉あたりに比定されるのではなかろうか。

本類に類する縄文晩期の土器は、県内では宮崎市松添貝塚をはじめ、高千穂町陣内遺跡、薄糸平遺跡西都市宝財原などで採集されている。諸県地方では、都城市尾平野洞穴や小林市こまくりげ遺跡などの出土例があるが、この時期の遺跡として特に調査された報告例はない。今回の栗原上原遺跡の出土も断片的なもので、直接遺構や包含層を伴うものではなかったが、高崎地域の段丘状台地上に縄文晩期の生活遺構存在の可能性を示唆するものとして注目される。しかも、この地域の台地上を覆う厚い御池軽石層の上面に出土したことは、高崎地域における縄文晩期の文化の波及期を考える上でも貴重な収穫であった。



第11図 土器実測図

4. 結語

栗巣上原遺跡から出土した弥生土器には、壺・壺・鉢・高環に、丹塗の壺や楕形土器、それに小形土器がある。その中でもっとも特徴的な器形を有する主要土器は絡繩突帯をもつ變形土器といえよう。直口ないし内湾する口縁部直下に粘土粂をめぐらし、これに布を卷いた範様工具でもって右上から左下へ向って斜行する粗い刻目を施文することによって絡繩状の突帯文を構成したものである。

絡繩突帯をもつ變形土器は、県内では、高崎町示野原遺跡をはじめ、今回の縦貫道関係調査遺跡であった高崎町下原遺跡・同町今村遺跡や、先に調査された小林市竹山遺跡、平木場遺跡、あるいは須木村原殿、高原町広原など、いずれも西諸県郡から北諸県郡の霧島山麓一円に分布が限られるのが大きな特色である。諸県郡地方に分布する絡繩突帯文土器は、口縁部が外反するものと、本例のように直口ないし内湾する形式に大きく2つに分類され、さらには口縁部立あがりの長・短によって細分されることはある。ところで、これらの形態差のうち、口縁の外反するものが内湾するものに若干の時期差をもつて先行するものであることは、高崎町示野原遺跡で層位的に確認されており、鹿児島県花熟里遺跡でも指摘されている。^(注1) ただ立ちあがりの長短については、器形の大小に起因する形態差なのか、あるいは、それぞれに時期差をもつものであるのかについては確証がなく、いまのところいずれとも断定できない。

従来、絡繩突帯文をもつ土器については、鹿児島県成川遺跡の第Ⅳ類土器を標識とする成川式土器に包括され、南九州の終末期に位置づけられてきたものである。その実年代については、共伴する鉄器や須恵器との関係から、その下限は5~6世紀にあってすでに弥生時代の範疇を脱しているとの指摘があることは周知のことである。^(注2) しかしながら、成川式に包括されてきた絡繩突帯文土器の中には、かなり形態差があり、共伴する土器形式にも様相の異なるものがあることから細分化が検討されてきている。遺跡によって、弥生期に属するものと古墳期に属するものとそれぞれ区別し、共伴する壺や、高環などの対比から、成川式の上限を3世紀後半とする考え方も示されている。^(注3)

ところで、栗巣上原遺跡の絡繩突帯文土器は、鹿児島県花熟里遺跡のⅡ類や、辻堂原遺跡のⅡ類に類似を求めることができるが、形態上若干の差異も認められる。すなわち、底部に花熟里や辻堂原にみるような中空上げ底の脚台状になるものが少ないと、あるいは、器面調整にナテが多く、辻堂原にみられるような刷毛目痕の顕著なものが少ないと、また、刻目を施文しない突帯だけをめぐらしたものがないなどが相異点として挙げられる。壺形土器については、變形土器との共伴関係が明瞭でない点があるが、成川系壺形土器のC型とされた広幅突帯に斜行線文や竹管文を施した大形の壺形土器が、諸県郡地域の絡繩突帯變形土器との確実な共伴例がないことは、栗巣上原遺跡も含め、霧島山麓一円の絡繩突帯文土器が鹿児島県側に分布する絡繩突帯をもつ成川系土器との間に地域性のあることを示すものとして注目される。^(注4)

成川系土器には、しばしば須恵器を伴うことが多く、年代比定の決め手とされているが、栗巣上原遺跡でも壺や壺の破片など数片の須恵器が出土している。しかしそれは遺跡での混在であり、絡繩突帯文土器と共に関係にあるという確証はなかった。同じような例は示野原遺跡や平木場遺跡それに今回調査の今村遺跡においても須恵器の出土をみたが、同じく混在とみるべきものであった。従って、いまのところ諸県郡地域では、遺跡に須恵器を混在することはあっても確実な共伴例ではなく、須恵器をもってこ

の地域の結縄突帯文土器の時期比定の決め手とすることができない。しかし、混在の多くが、栗巣上原遺跡と同じく、口縁の直口ないし内湾する壺形土器を出土する遺跡であることは、やはり留意しなければならない点であろう。今回の栗巣上原遺跡の共伴土器の中に胴張り扁球体の器体に、棱をなして屈曲開口する二重口縁をもつ丹塗壺形土器のあることは注目される。本例は、成川遺跡の第V類の壺形土器に類似しており、土師式土器の五綱式に類例が求められるだけに、古式土師器の様相をもつ移行形とも考えられ、本遺跡結縄突帯文の時期比定の指標ともなるべき資料として注目される。^(注9)

諸県都地域の結縄突帯文土器の編年に関しては、各遺跡における土器の組みあわせをはじめ、鹿児島県下の成川系土器との関連、あるいは東九州の終末型式である安国寺系土器との対比、さらには、土師式土器として齊一化された丸底壺形土器との関係など総密な考証が必要であり、層位的に検証できる遺跡の発見がのぞまれるところである。

(茂山 譲)

注1 工場誘致のための造成工事で4棟の堅穴住居址が発見され50年緊急調査されている。

注2 河口貞徳・出口 浩「第一次花熱里遺跡調査報告」鹿児島考古第5号 1971

注3 “成川遺跡”文化庁 1974

注4 同上書(149~150頁)、河口貞徳他“永山遺跡”鹿児島考古第8号 1973

注5 池畠耕一“南九州における弥生時代終末期から古墳時代初期の土器”一社堂原I類の位置づけ—鹿児島考古学会発表要旨 1978

注6 注2の掲上書に同じ

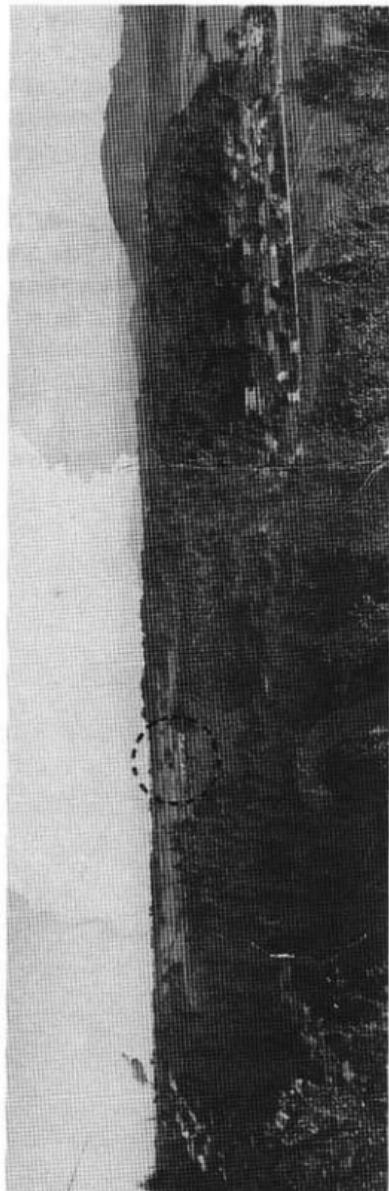
注7 池畠耕一・井谷久志・出口 浩・久保二男“让堂原遺跡”吹上町教育委員会 1977

注8 河口貞徳“南九州”『弥生式土器集成本編』

注9 注3同書(62頁指載図の102、97)

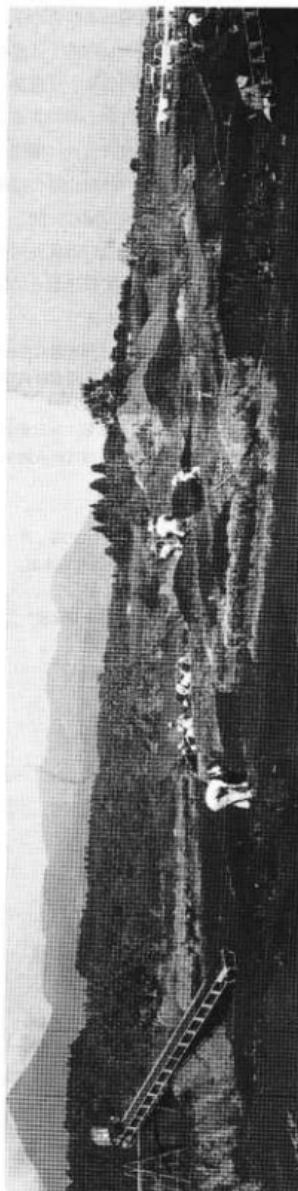
注10 杉原莊介・大塚初重編“土師式土器集成”

図版一

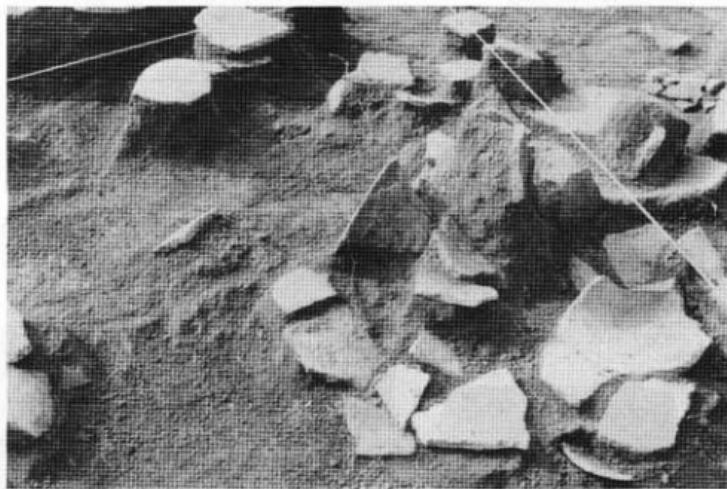
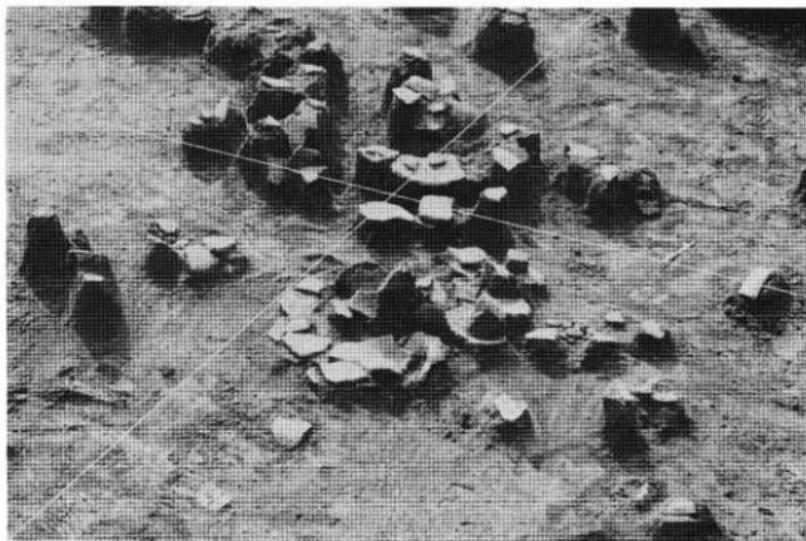


基盤上所見の透視圖

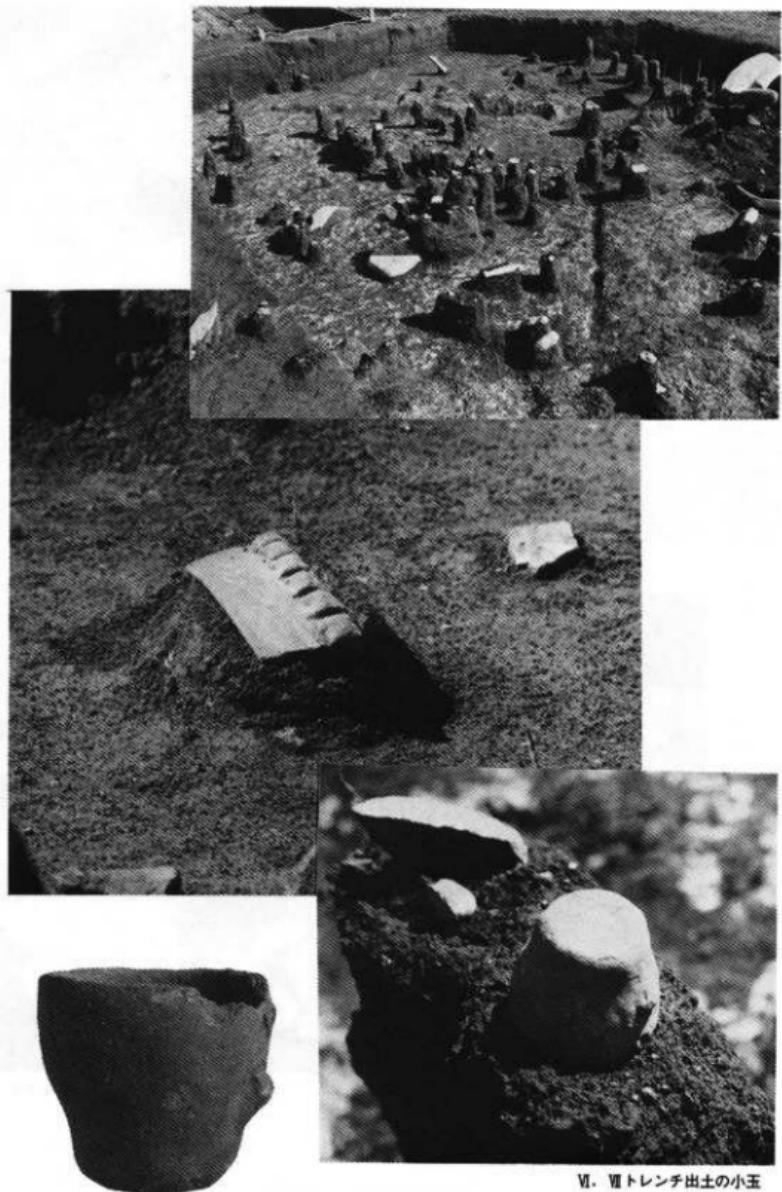
図版二



実測状況

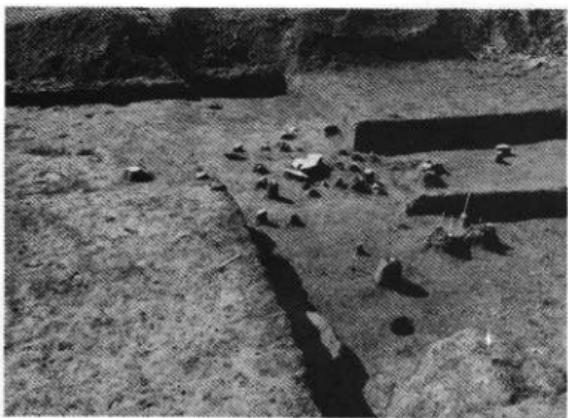


VI. Vトレンチ遺物出土状況



VI. VII トレンチ出土の小玉

図. Ⅳ トレンチ遺物出土状況



VI. トレンチ出土状況

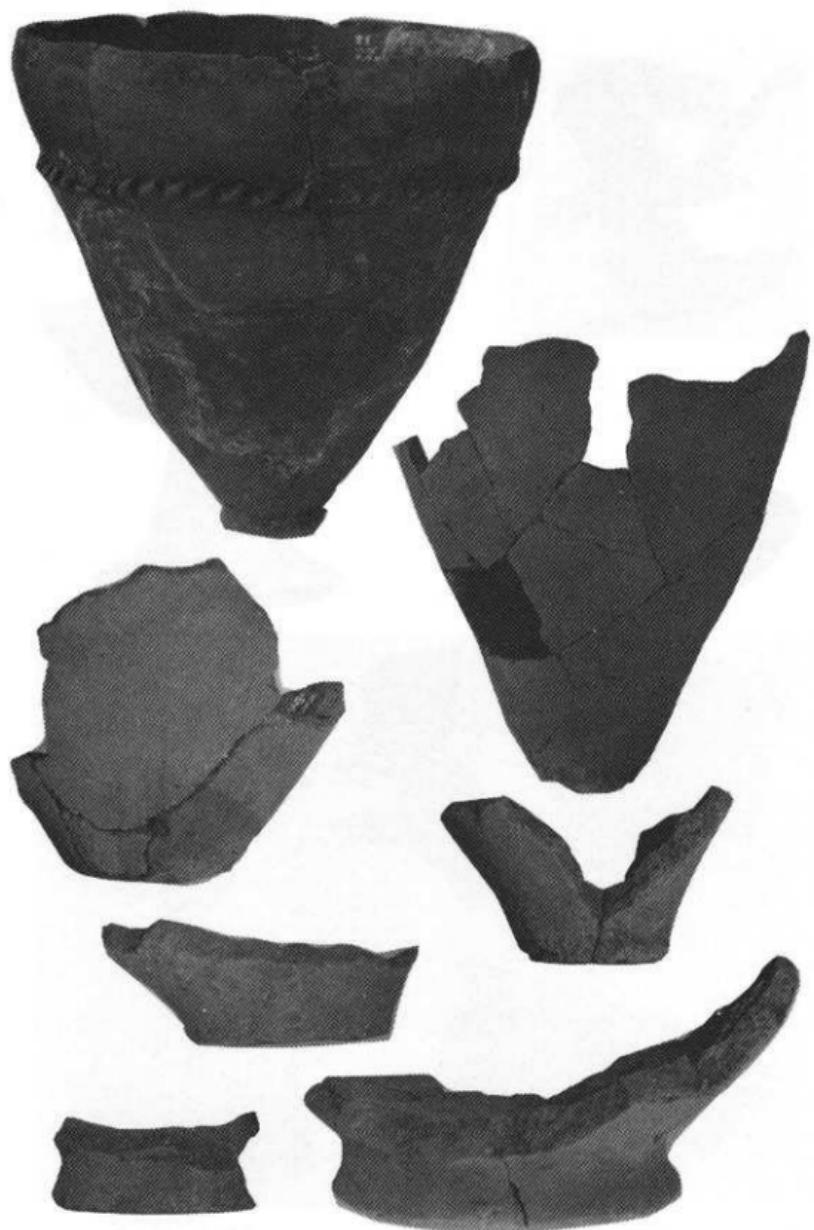


0 1 Cm.

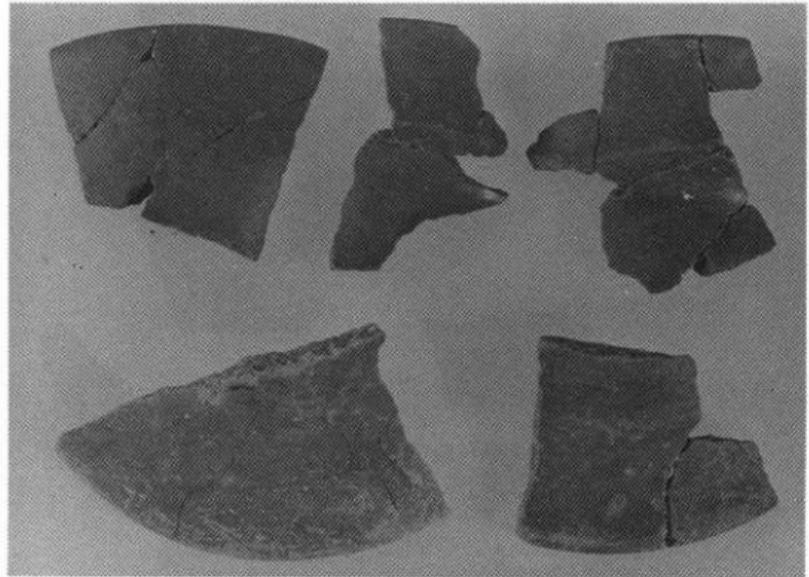
VI. トレンチ出土の小玉



栗巣出土の絞繩突帯土器



栗塚出土の絞綱突帯土器



栗東出土の丹波土器

下原遺跡

北諸県郡高崎町大字東霧島下原

目 次

1. 遺跡の位置.....	59
2. 調査の経過.....	59
3. 層 序.....	61
4. 遺構と遺物.....	63
(1) 遺 構.....	63
(2) 遺 物.....	66
5. 結 語.....	74

挿 図 目 次

第1図 トレンチ壁土層図.....	62
第2図 A地区柱穴群実測図.....	64
第3図 1号掘立柱建物平面図.....	65
第4図 カマド実測図.....	67
第5図 A地区出土遺物実測図.....	70
第6図 B地区出土土器.....	70
第7図 B地区出土土器.....	70
第8図 B地区出土土器拓影.....	71
第9図 B地区出土土器実測図.....	72
第10図 東霧島神社鳥居前出土土師器実測図.....	73

図 版 目 次

図版 1 遺跡全景.....	76
図版 2 A地区柱穴群.....	76
図版 3 1号掘立柱建物跡.....	77
図版 4 A地区出土のカマド.....	78
図版 5 B地区遺物出土状況.....	79
図版 6 A地区出土土師器.....	80
図版 7 B地区出土土器.....	81

1. 遺跡の位置

下原遺跡は、高崎町の南西部を占める大字東霧島字下原にある。高崎町に隣接する山田町と、尾根を分ける長尾山の南東尖端に近い東側には、樹枝状に迫田の入り込む低丘陵地が広がっている。この低丘陵地のうち、高崎川に面して、丸く整った山容をみせる鉢ヶ峰の独立丘地と、東霧島神社の鎮座する長尾山麓との間に、北西から南東へ舌状に伸びた狭長な台地がある。標高160mの台地面は起伏も少なく平坦で、畠地に利用されているが、この南東先端に近い部分が遺跡地になっていた。台地面畠地の中央を、上勢西と東を結ぶ町道から分岐して半札水流・横谷へ通じる町道が貫通しているが、遺跡はこの町道をはさんで、南北に広がりをもっており、調査に際しては、北側をA地点、南側をB地点と区分した。

付近には、東霧島神社の境内にある埴輪遺跡が知られているだけで、ほかには遺跡は確認されていない。本遺跡は、縱貫自動車道路線決定に伴う分布調査の際、地表面に若干の土器細片が存在したことが発見の端緒となったものである。遺跡の規模、時期等については全く未知であったが、遺構等の所在確認の為、迫を隔てて対置する今村遺跡と共に今回の調査対象になったものである。

2. 調査の経過

発掘調査は、51年10月13日から10月30日にかけて、16日間の日程で実施した。調査に際しては、台地中央を東西に走る町道の北側散布地をA地点、南側の山王迫を見下す台地縁に近い散布地をB地点と呼称することにした。以下、経過の概要を記す。

A地点の調査

13日 縦貫道路線の中央線を基準に、東西に $3 \times 20m$ の1号トレンチを設定し、包含層と遺構の存在確認を目的に発掘を開始。発掘が進むにつれて、すでに過去に耕地の基盤整備が行なわれたらしく、上層部は著しく擾乱をうけていることが判明した。トレンチ内からは、若干の土師器破片や焼石等が出土したが、土器片は細屑化しており、再堆積によるもので、1号トレンチ内からは確かな遺物包含層や遺構は確認されなかった。

ついで、町道に沿って東西に $4 \times 20m$ の第Ⅱトレンチを設定した。磨耗した土器小片数点が出土しただけで、第Ⅰトレンチ同様、包含層や遺構は存在しなかった。

16日 第Ⅰトレンチの北端より西方へ向って第Ⅲトレンチ $4 \times 12m$ を設定発掘。地表下35~40cmの焼ボラ混入土層面に幅45~50cm、長さ130~210cmの隅丸長方形の掘り込みが4列ほど検出され一時、土坑ではと色めいたが、いずれも農耕に伴う芋の貯蔵穴であった。トレンチ東端のⅠトレンチとの境に近い部分で、地表下50~60cmで、焼石や土師器細片の散乱が確認された。焼石はⅠトレンチの北端部分にかけて広がりをみた。北端に長さ30cmほどの炭化材1個が検出された。焼石の広がり状態から人為的な様相をうかがうことができたが、まとまりをもつた一つの生活遺構としての確認はできなかった。

18日 Ⅲトレンチの掘り下げ作業を進める。地表下90cmの黒褐色土層面でトレンチ北壁に並行するピット列を検出。ピットは、直径25cm前後のもので、およそ200から220cmの間隔で、東西方向に、ほぼ一直線に並んでいた。

Iトレンチの東側に、路線幅枕に沿って設定したIVトレンチでは、黒褐色土層面で掘り下げ作業を進めたところ、大小のピット群の存在が判明した。

19日 IVトレンチ内に確認されたピットの検出に努めた。その結果、黒褐色土層面に大小のピット群と、ほぼ原形をとどめたカマド1基を検出した。

20日 IIIトレンチとIVトレンチに検出されたピット列やピット群の広がりと関連をみるため、トレンチ間の観察壁を除去し、且つ南側への拡張を行なった。IIIトレンチは5m×10mほど、IVトレンチは南側を幅3mで全長拡幅した。この結果、IIIトレンチでは、先に確認されていたピット列は、拡張区に新たに検出されたピット列と、2間×3間の掘立柱建物遺構になることが判明した。また、IVトレンチでは、120を越えるピットが検出され、1間×2間の掘立柱建物跡とみられるものや、柵列状の配置をとるものなど数例のまとまりが確認できた。

中央に検出されたカマドは、煙出しの一部と上面に若干の破損があるほかに欠損がなく、ほぼ原形をとどめたものであった。カマドをとりまくピットについては、小屋組としてのまとまりを確認することはできなかった。

また、ピット群の南側への広がりをみると南側に若干の拡張区を設定したが、全体としてピット群は、トレンチの北東側に密になっており、南側への広がりはみられず、主体部が北東側にあることが予想された。従って、カマドを含むピット群の性格を明らかにするためには当然北東側への拡張が要求されたが、未買収の路線外地域になり、更に東側には飼料作物が残っていることなどもあり、拡張は断念せざるを得なかった。

B地点調査

A地点からは南へ150mの地点に位置する。発掘にあたっては、ソバや稻などの作物が栽培されていたこともあり、トレンチ設定について制約をうけることになった。そこで、最も土器片の多く散布していた地点を中心にして、東西南北にトレンチを設定し、包含層の確認調査にはいった。発掘は21日に着手し、30日に終了した。

21日 3×30mのトレンチを東西南北十字に設定。人夫を4班に分け、トレンチ両端より発掘にかかり、耕土の剥離につとめた。南北をIトレンチ、東西をIIトレンチとした。

22日 各トレンチとも昨日に引きつき掘り下げ作業を進める。Iトレンチでは耕土下45cmで早くも黄褐色のボラ層に達し、包含層は確認されなかった。IIトレンチでは、西から東に向って地層の傾斜があり、西側は耕土も浅く、地表下45cmでボラ層面に達した。部分的に細片化した土器片が検出されたが、二次堆積によるもので包含層はなかった。しかし、トレンチの東端では耕土も深く、地表下55~60cmで、II層の褐色土層面に達した。この層を掘り下げたところで土器片の包含層にあたり、23・24日にかけて、包含層の状況確認や遺構の検出につとめたが、土器に関連する遺構等は確認できなかった。

25日からは、IIトレンチ内出土遺物の実測・写真撮影を行ない、更に部分的ではあったが、試掘溝を設定したが、いずれも、まとまりをもった包含層や遺構を確認するにはいたらなかった。

地層の傾斜や出土状況からIIトレンチの包含層は再堆積の可能性もあり、当然周辺に遺構の存在も予測されたが、調査範囲内には可能性がないと判断し、30日でB地点の調査を終了した。

3. 層序(第1図)

A地点 過去に一度基盤整備が行なわれた形跡があり、上層部にかなりの擾乱がみられた。第Ⅲトレンチ北壁の土層図によると、

- I層 耕土(赤ボラ、焼ボラ混入黒土層)(18~30cm)
- II層 ボラ混入黒土層(10~20cm)
- III層 砂粒混入黒土層(8~10cm)
- IV層 暗褐色スコリア混入黒土層(12~20cm)
- V層 黑褐色粘質土層(14~20cm)
- VI層 褐色粘土層(55~60cm) (ピット掘り込み)
- VII層 黄褐色ボラ層(御池軽石層)

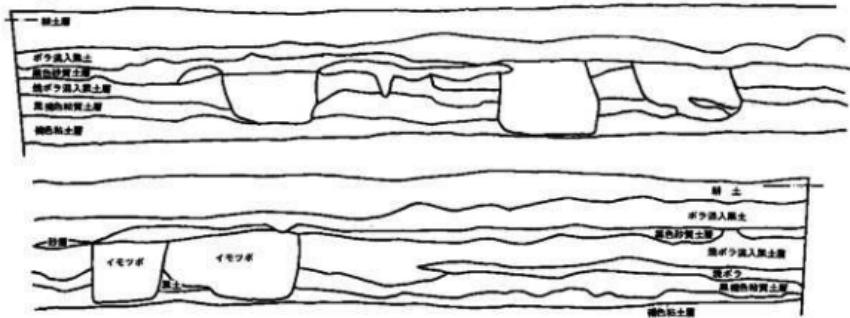
のVII層に分けられ、VI層上面でピットが検出されている。地表面からの深さは90cm前後になる。全体的に、VI層上面までは、かなり層序に乱れが観察され、擾乱を受けたことを示している。部分的に芋貯蔵穴の掘り込みがVI層内にまで達しているところがあり、ピットの掘り込み面にも一部擾乱の形跡がみられた。

B地点 IIトレンチの西側など上層部の流出など土層の削除されたところもあった。Iトレンチ北側の西壁面の観察図によれば、B地点では次の7層が観察された。

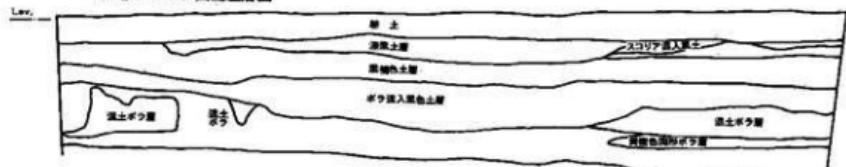
- I層 耕土(25cm)
- II層 漆黒土(18~20cm)部分的にスコリア混入の浮層が挿入される。
- III層 黑褐色土層(16~25cm)包含層
- IV層 黄色ボラ混入黒土層(15~34cm)
- V層 混土ボラ層(18~23cm)部分的に擾乱あり
- VI層 固形黄褐色ボラ層(御池軽石層)(250cm)色・粒子の違いで6~7層に細分される。
- VII層 漆黒土層

遺物は、第III層の黒褐色土層から出土している。III層は、A地点のV~VI層に相当する。

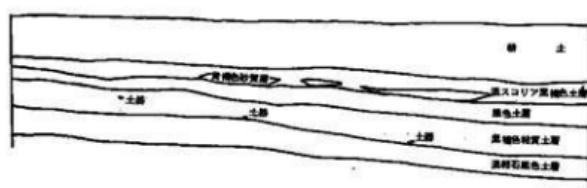
下原A地点
Ⅲ トレンチ北壁



下原B地点
1) I トレンチ西壁土層図



2) II トレンチ北壁土層図



右側は北壁
左側は西壁

第1図 トレンチ壁土層図

4. 遺構と遺物

(1) 遺構

① 柱穴群（第2・3図）

A地点のⅢトレンチからⅣトレンチにかけて検出されたピット数は140であった。等間隔で排列状の配置のたどれるものは数ヶ所あったが、掘立柱建物跡として確認できるピットのまとまりとしては、Ⅲトレンチに検出された1号と、あとは、簡単な小屋組の2例があるだけであった。

各ピットの大きさは、中央のカマドの北側に半円状に発見された小穴をのぞき、いずれも直径20cm前後のものが多く、深さは、60cm以上に達するものもあったが、平均した深さは36cmであった。

1号掘立柱建物跡

Ⅲトレンチに最初に確認された建物跡である。柱間数でいえば、2間×3間の建物跡になる。桁行の方位は、N26°Wに置かれていた。桁行柱間は210cm、桁行6.4m、梁行は5mを測る。東側妻入部分には幅1mほどの張り出し部分があり、中2本のピットが検出されている。

桁行柱間	(cm)			
1-2	210		5-6	210
2-3	210	630	6-7	220
3-4	210		7-8	210
				640

梁行柱間	(cm)			
1-9	220	530	4
9-5	310		8

張出し部分の梁間	(cm)	
10-11	190	
11-12	200	490
12-13	100	

2号掘立柱建物

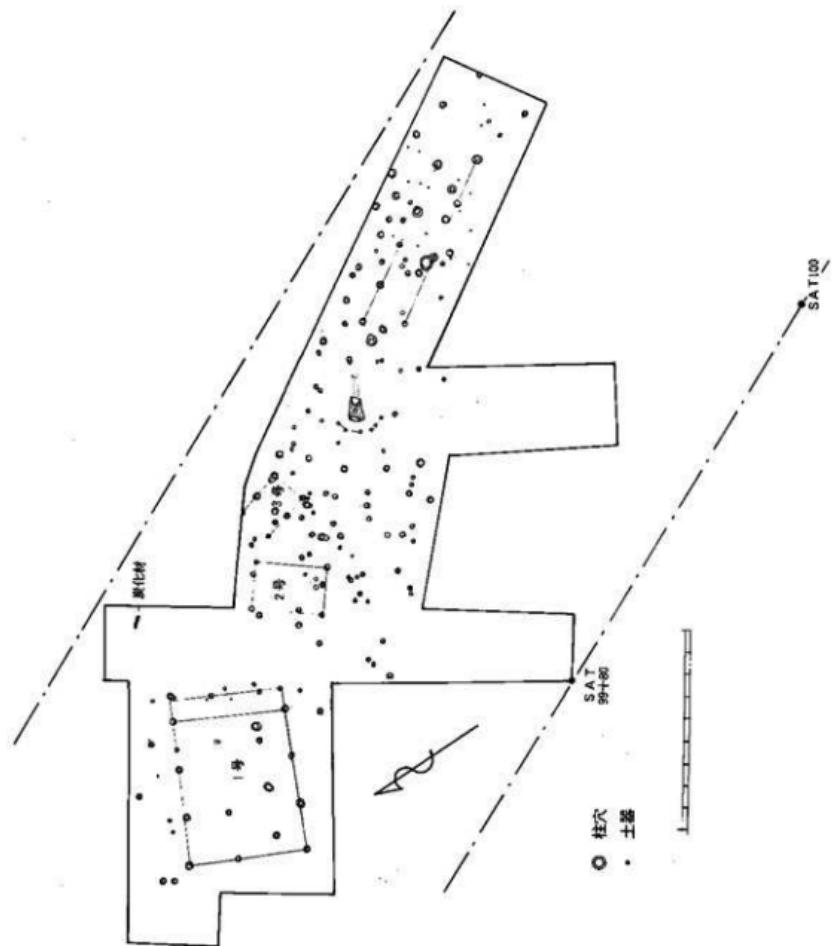
桁行方向をN40°Eとする1間×1間の小形の建物跡である。梁行間210cm、桁行間320cmを測る。柱穴の掘方は残存する上端縁で径25cm及至30cmあり、柱の径は18~20cm程度である。この梁・桁行の距離は、1号建物跡の西側梁行間(9-5)と、南側の桁行間(5-6)を結んだ広さに相当する柱間隔の小屋となる。

3号掘立柱建物

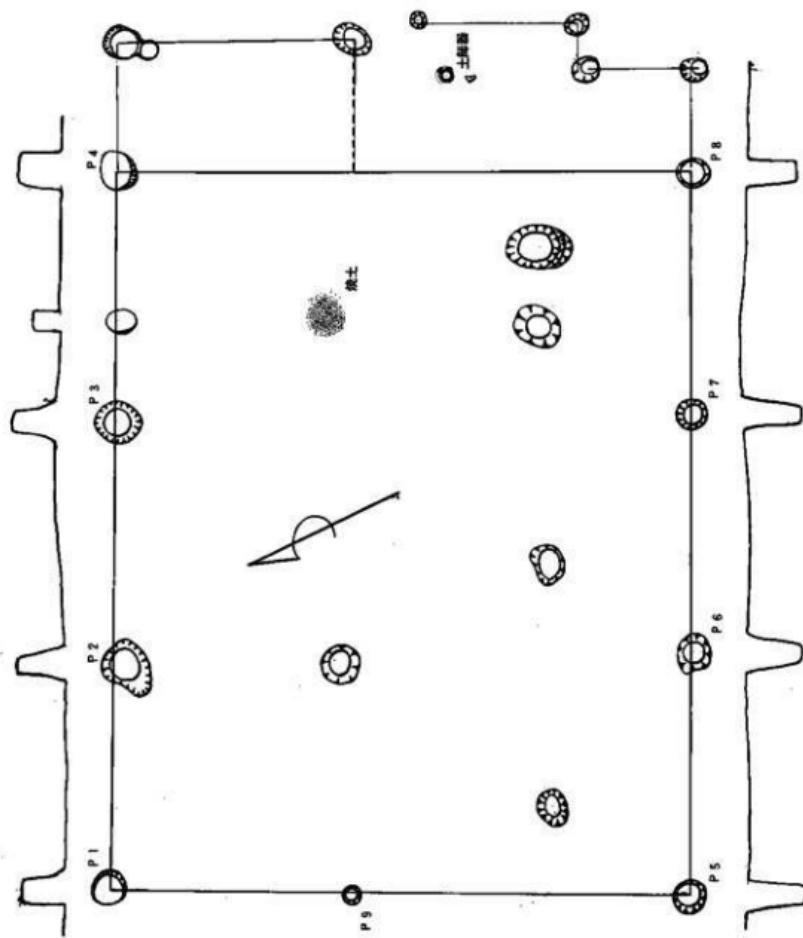
2号の東側にある1間×2間の小屋跡である。桁行方向はN13°Wを示し、1号とはやや方位を異にする。桁行は230cm、桁行柱間は120cmと100cmになっており等間隔ではない。梁行は160cmを測る。

その他の構造

小屋組としては把握できなかった一直線に並ぶ柱穴は、カマドより東側の柱穴群の中に2列が



第2図 柱群実測図



第3図 1号据立柱建物平面図

図上で確認できた。N30°W方向に並行するもので、180乃至200cmの間隔をとる。北側へ向って広がりをみせる掘立柱建物の南側平行となるのではないかと推定される。

② 窯（第4図）

IVトレンチ柱穴群の中央付近に検出されたものである。土圧で押し潰されることもなくほぼ完形に近い姿で検出され、しかも、竪穴住居跡の周壁に作り付けのカマドと異なり、土間に設置された平カマドとして認められた県内では初めての出土例であった。

カマドの平面規格は、N54°Wを主軸方向に全長110cm、中央幅60cm、焚口幅30cm、高さ25cm、東南側を焚口に、北西側に煙出しを設けた楕円形状の平面形をもつカマドであった。本体は軽石と礫を芯にして粘土でつき固めた堅牢なものであった。角状の軽石を両側に立てた焚口開口部は、幅23cm、高さ15cmの長方形を呈し、前面には幅5cm、高さ6cmの袖が約20cmの長さに粘土でつけられていた。カマドの内底は奥へ向ってゆるい傾斜をなしていた。火袋は焚口から奥へ次第にふくらみ円形状の広がりを有する。側壁は湾曲して立ち上がり、平坦な天井に接続する。煙り出しは、上部が破損していたが、奥壁の底より7~8cm上方に半円状に開口していた。円壁高は15cmで、袋内には灰と木炭が残っていた。天井部のはば中央に直径10cmの円孔があり火口になっており、孔の周囲には厚さ5cmほどの軽石が置かれ、煮炊用の器底と火口との間隙調整の役目を果すよう配慮されていた。この軽石によって、器底と火口の間隙を大きくすれば、火焰は勢よく火口より吹き出し、密着すれば、焰は煙出しの方へ引き込まれるわけで、煮炊を目的とするカマドとしては、火力を器底に集中できる煮沸効率の高いものといえる。焚口から東側へ向って、幅30cm、長さ1mの範囲には、カマドから掻き出された木灰の堆積がみられ、カマドの使用期間が長かつた事を示している。

カマドを囲む小屋跡

カマドの周囲には何等かの屋根がかけがなされ、カマド小屋が存在していたものと考えられたが、等間隔でまとまりのある柱穴を確認することはできなかった。しかしながら、カマドの北西側には、カマドの煙出し口の約50cm外周を、径8~10cmほどの小穴が半円状に3mの範囲に並んでおり、この小穴を結んで簡単な外壁が構作されていたことが考えられる。この小穴の両側にある不規則な配置のピットが或はカマド小屋の掘立柱の跡だったかもしれないが断定できなかった。

主屋とみなされる柱穴の組合せが不明なだけに憶測にすぎるかもしれないが、土間に築かれたカマドの発見は、少なくとも、カマドを中心に独立したカマド小屋の存在を考えさせる遺構として貴重であった。

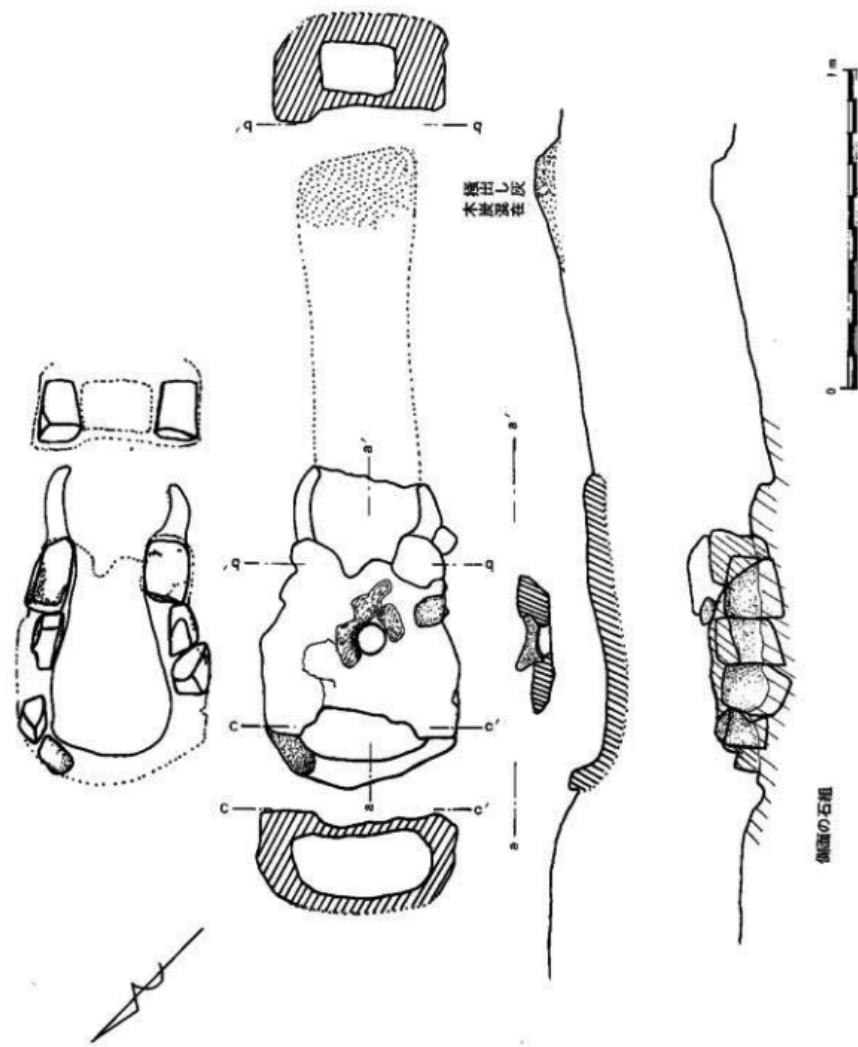
(2) 遺 物

A地点から土師器、布目压痕土器のほか青磁片や近世陶器片が、B地点には縄文土器、絡繩突帯文土器、土師器それに磁器片が出土している。

① A地点の遺物

土師器（第5図）

1. 第Iトレンチからの出土品。手捏の粗製楕形土器である。口唇は薄く部分的に波状を呈する。



第4図 カマド実測図

胎土は石英粒を混入するが、比較的細やかである。焼成度はあまり高い方ではない。器壁は吸水性に富みもろい。色は淡い灰黄色を呈する。口縁径は9cm、器高7cmを測る。

2. 同じく第Ⅰトレンチ上層部からの出土品である。浅い壺で、推定口径12cm、器高は3cmとなる。底面は糸切底になっている。

3. 第Ⅰトレンチ上層の出土品。胎土、焼成から同一個体の破片と考えられる。底部は糸切底をなす。

4. 内面黒色を呈する、いわゆる内黒土器の破片である。完形は明らかでない。胎土もきめ細かく焼成良好である。外面は灰黄色を呈する。

5. 第1号建物跡の東側張り出し部分で検出されたものである。壺部が欠損しているために完形は明らかでないが、据開きの高台が付く楕形土器の高台になるものと考えられる。窓切り底に付け高台されたものである。高台底の径は11.3cm、現存高は3cmを測る。外面には、ロクロ引きの成形段が残る。胎土はきめこまかく、焼成も良好である。全体的に浅い黄褐色を呈する。

八の字に聞く高台の形態から平安期に比定される土器器であろう。

6～8 Ⅳトレンチ柱穴群の掘り込み面から出土したものである。斐形土器の口縁部破片であり、いずれも器面に粗い刷毛目痕を見る。外面は斜走、内面には横走する刷毛目痕である。断片で全体形が明らかでないが、口縁の外反状態から若干胴張りで、9のような丸底状の底部をもつ斐形の器形が予想されるが断定できない。

胎土は粗く多量の砂粒を混える。黄褐色を呈する。

10・11 Ⅳトレンチ東側の北壁寄りの地点から出土している。器の内面に平織の布目压痕のある土器片である。10は口縁部、11は底部に近い部分の破片である。10の推定口径は8～9cmになり、丁度1の楕形土器の口径に近い。従来の出土例からすれば器高は、口径に近いものが多い。胎土は粒子も細かく水窓されたものと考えられる。色調は赤褐色を呈する。器壁が吸水性に富むのは、布目压痕土器の一般的な特徴であるが、本例も高い吸水性を示す。内面に残る布目痕はかなりゆがみがあり、経緯については確実に計測できなかった。

布目压痕土器は、先に小林市竹山遺跡で多量に出土した例があり、これまで県内では10ヶ所の出土地が知られている。最近、西都市調査でも採集されているが、ここでは高台付土器と共に併存している。

14 Ⅳトレンチ南壁寄りの上層より出土した陶器片である。灰青色の地肌に白色の流し釉のかかったもので、近世陶器とみなされる。

青磁片

Ⅲトレンチの上層から1片、Ⅳトレンチ上層から2片、計3点が出土している。Ⅲトレンチ出土のものは、淡い灰緑色を呈した口縁部の小片である。釉に多くの粒子が混入しているために器肌にザラつきがある。口縁はわずかに外反し、丸みのある口唇を有する。

Ⅳトレンチからの出土品は、胴下腹部に相当する破片と、底部に近い腰の部分に相当する細片である。前者は、灰緑色を呈し、表面釉に細かい亀裂が走る。器表面にV字状を呈する凹凸があり、浅いが鏽を有する蓮弁文を削出していったことを示している。後者は深い灰緑色を呈する滑らかな

器肌の青磁細片である。

② B 地点の遺物

縄文式土器（第6図）

Ⅲトレンチの上層から1片出土している。幅5mmほどの沈線文様のはいった破片で、器面には条痕がみえる。色調は褐色、胎土は比較的こまやかである。焼成度は低い。文様の沈線は、線の末端を押え止めにしている為に一種の押点文をなしている。このような施文は、東諸県郡綾町尾立遺跡の沈線文を特徴とする綾A式土器の中に類例を求める事ができる。

断片的な出土状況や、土器破損面の著しい磨耗度からみて後日の混入とみられる。従って、本例をもって直にB地点周辺に縄文期の包含層や造構が存在するとは考えられないものである。

土師器（第7図）

IトレンチとⅢトレンチの上層部から各2点計4点が採取されている。いずれも底面に偏形の同心円状糸切痕をとどめる盃状の土師器片である。

1・2は、Iトレンチから出土したものである。1は、推定口径11cm、器高2.5cmの壺になる。胎土は水簸され緻密である。器面には内外共に成形時の輪轍筋がみえる。色調は淡い灰褐色を呈し、質的には瓦器に近い。2も胎土、焼成等1と差はない。底部が1より明瞭に区切られている。

3は、Ⅲトレンチ上層から出土している。口縁部を欠くが4と同形の浅い壺が予想される。底径は、3.7cm、右旋回の糸切底になっている。

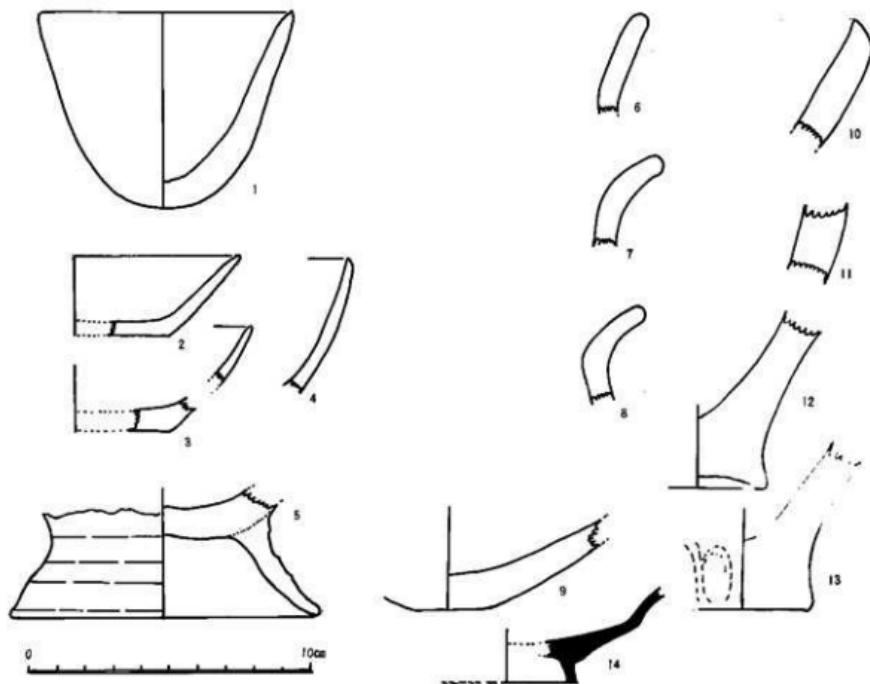
4、色調灰白色、焼度はあまり高くない。内外に輪轍びきの筋痕がみえる。底面は磨耗しているが糸切の痕がかすかにのこる。推定口径6.5cm、器高1.7cmを測る。

以上の土師器については、直接時期決定の資料に欠けるが、鎌倉以降のものと考えられる。

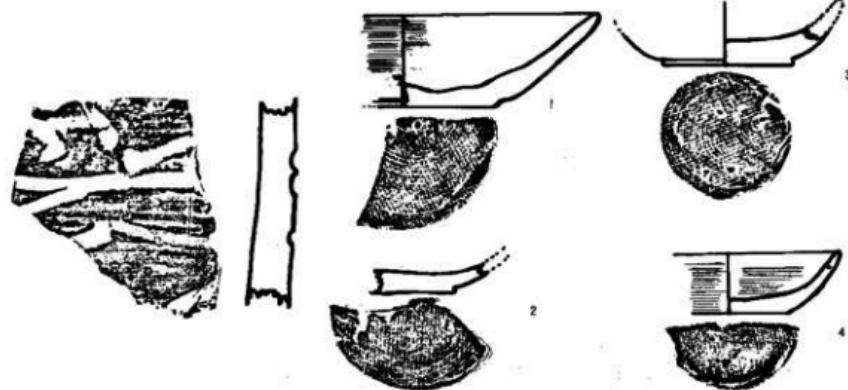
弥生式土器（第8・9図）

IIトレンチ東側の第Ⅲ層から出土した土器である。全体の出土量も少なく、細かに破碎したものが多かったこともあり器体を復原できるものはなかったが、ほとんどが變形土器の破片と見なされるものであった。これらの土器は、絡繩突帯をめぐらすものと、無文粗製土器とに分けられるが、両者に大きな形態差は見られず、形式的にもほぼ同一時期の所産と考えられるものであった。

1~13 口縁部の直下に断面三角形の貼付突帯をめぐらし、籠状工具で斜に刻目を施した變形土器の破片である。刻目は右上から左下へ施文されたものが主であるが、中には、左から右へ刻んだもの（B）や、竈や指頭で押圧施文したもの（3、6、7、10）もみられる。いずれも色調は黒褐色乃至灰褐色を呈し、胎土は一般に粗く、多量の石英粒を混在する。器壁内面にヨコナデのみえるものもある（2・4）。口縁はやや内湾するが、器形としては外傾しながら大きく開口し、比較的胴張りの小さい變形土器になることは、栗巣上原遺跡や示野原遺跡出土の類例から十分に推定されるところである。ただ、示野原遺跡や栗巣の土器にくらべて絡繩突帯が細目で低く、7~12にみると垂れ下った断面形をもつものなど若干の相違が指摘できる。ことに11のように小刻みに整然と刻目を押圧施文したものは、いわゆる諸県地方に分布する絡繩突帯文土器の中では類例の少ないものである。

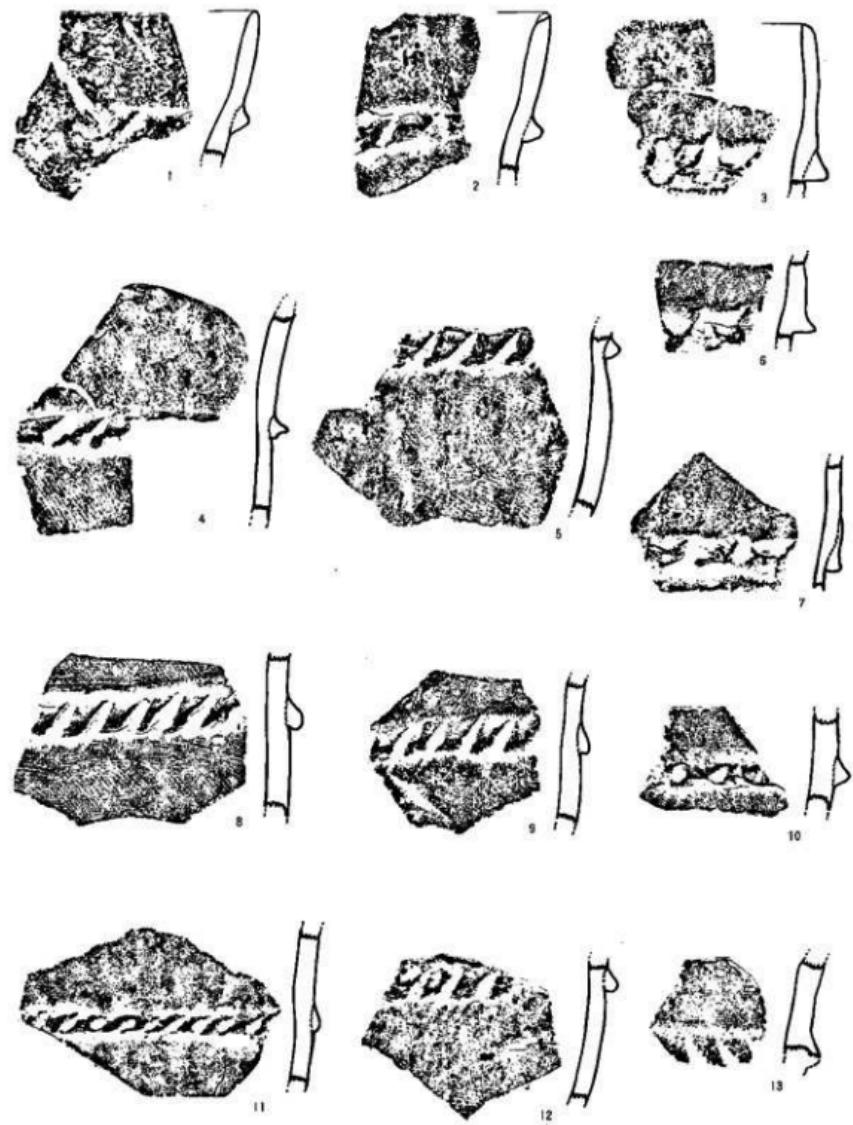


第5図 A地点出土遺物

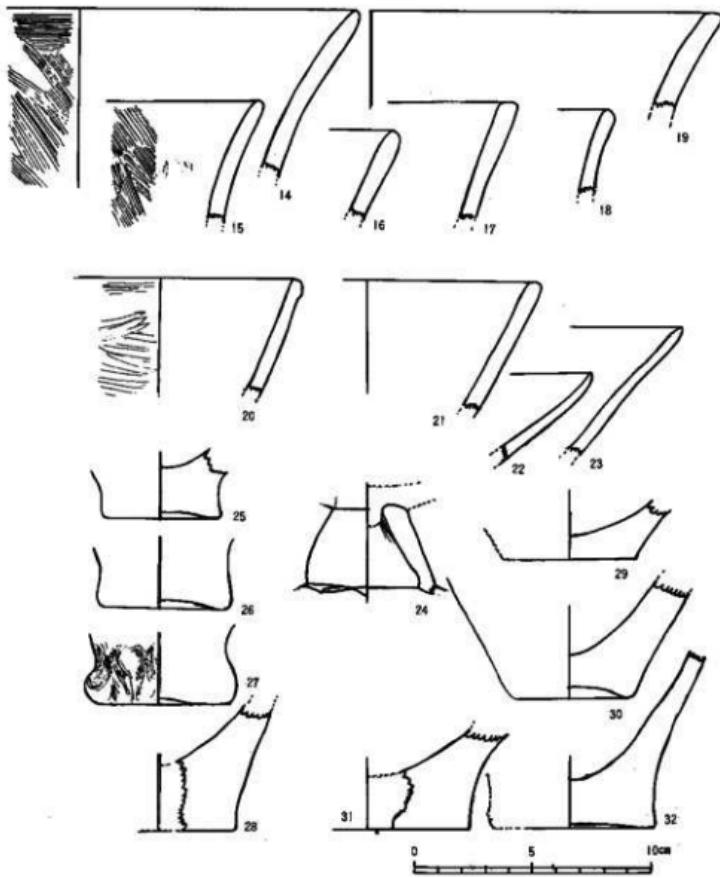


第6図 B地区出土土器

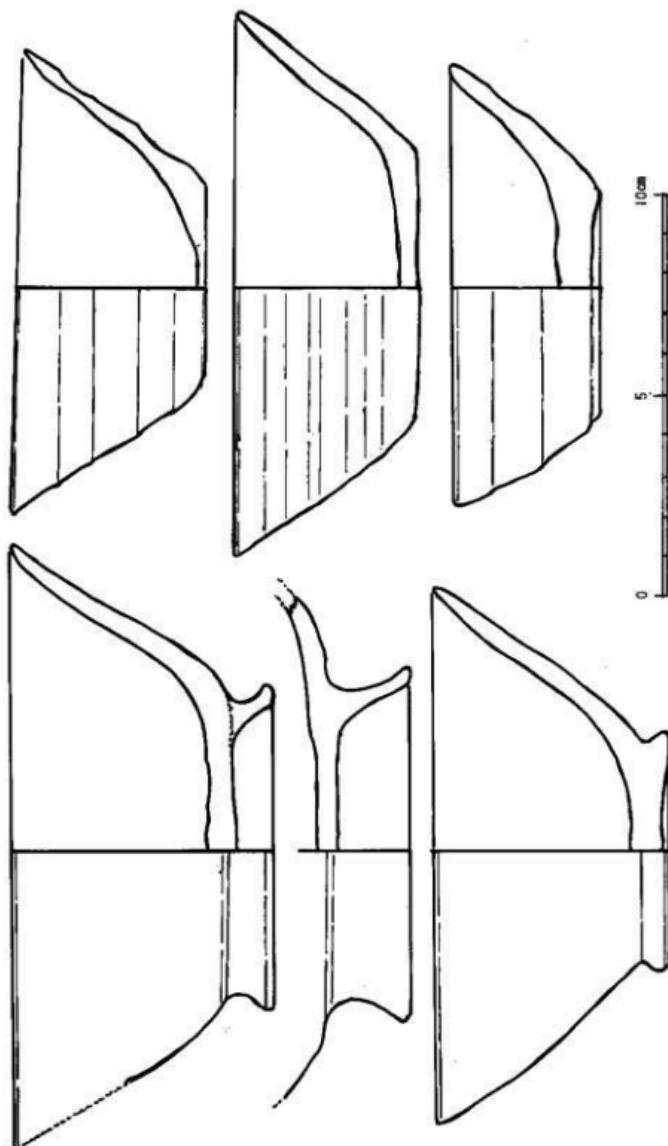
第7図 B地区出土土器



第8図 B地区出土土器拓影



第9図 B地区出土土器実測図



第10図 東霧島神社鳥居前出土土師器実測図

14~19 口縁の外反する粗製土器である。外面に粗い刷毛目痕のあるもの（14・15）と、ナデ調整されたものとがある。口唇がやや角張る点、前記の絡繩突帯文土器と異なる。24~27の底部をもつ變形土器になるものとおもうが、胴部分の破片が少ないだけに完形は明らかでない。

20・21 壺形土器の口縁部と考えられるものである。20は、推定口径11cm、21は14乃至15cmの口径となる。どちらも灰褐色を呈す。胎土は多量の石英粒や輝石粒を混入しており粗いが、焼成度は高い。

内面にナデ調整のあとがみえる。

22・23は、土師器高坏の坏部破片とみなされるものである。薄手で焼成度も高く、比較的堅緻である。胎土はこまやかである。色は黄褐色を呈する。

24 土師器高坏の脚台部である。短い脚台と外開きの裾部がつくことが推想される。坏とは柄合せになっている。焼成も良好、黄褐色を呈する。

5. 結 論

以上の調査結果の通り、下原遺跡はA・B二つの地区に分けられ、それぞれに若干の遺物と遺溝が検出されたが、遺跡全体の性格を完全に解明するにはいたらなかった。

A地区については、多数の柱穴が検出され掘立柱建物の存在したことが判明したが、確実に建物構造を示した柱穴のまとまりは3例を認めたにすぎなかった。しかも、いずれも小型の小屋組にすぎず、建物相互の関係や、全体の建物の配置をとらえることはできなかった。過去に小林市竹山遺跡や平木場遺跡で同様な柱穴群が発見されているが、それにくらべるとはるかに柱穴群としての規模が大きかっただけに、下原遺跡柱穴群の建物配置や構成の確認ができなかつた事は残念であった。ただ、柱穴群の分布状況からは、建物の主体部は路線外の北側の区域に拡がりをもつ可能性が予想されるだけに、解明の手懸を今後に残したことになった。

ところで、この柱穴群の中央に発見されたカマドは、県内では初めての発見であり、しかも破損が少なく、ほぼ原形に近い姿を保っていたことは、カマドの変遷史上からも貴重な資料を得たことになる。一般にわが国では、カマドが確認されるのは古墳後期のことと、それも竪穴住居の側壁に付設される例の多いことは周知のことである。これに対し、下原遺跡のカマドは、竪穴をともなわない平地の掘立柱建物に付属した平カマドとして類例の少ない資料である。本例のように数個の軽石や礫石を芯として粘土で固め築いたカマドは、古墳期にもあるが、比較的少なく、古墳期でも後出例の多いことは、福岡県裏ノ田遺跡例などで確認されている。本例は、まさに石芯型の伝統を受けた築造と考えられよう。竪穴側壁に造りつけのカマドとは、支脚の有無など構造上に若干の相違はあるが、橢円形状に築かれたカマドとしての基本的な構造や、カマド自体の規模には大差なく、本例は、あらゆる点で、造りつけカマドからの移行形式と考えられる。今回の調査では、柱穴のまとまりを確認できなかつたが、カマドを中心としたカマド小屋の存在も十分に予想され、いわゆるカマド屋の習慣との関連も暗示させるものであった。

柱穴群とカマドの年代については、推定の指標ともなる遺物としては土師器、布目压痕土器、磁器などが出土しているものの、いずれも断片的で、時期比定の決め手とするには資料不足である。ただ、I

号建物跡の東側張り出し部分に出土した土師器は、高台付椀形土器の底部と推定されるもので、八の字に外開きとなる付高台や、糸切り底の土師器を伴っていることから、少なくとも平安後期以降に属するものと考えられる。まだ編年でのできていない県内の土師器から糸切底の出現を明らかにできないが、大宰府出土例に従えば12世紀をさかのぼることはなく、平安末から鎌倉初期に位置づけられるものであろう。^(注4)確実な遺物が少ないだけに速断はさるべきであるが、東霧島神社の境内に類似した糸切底の土師器が出土している（第10図）ことは、距離的にも近い両者の位置関係から何等かの関連性があったのかかもしれない。確証のないまでは憶測にすぎるとある。

B地区では、第Ⅱトレンチ東端部を除いてまとまった遺構や包含層は検出されなかった。東端部からは、いわゆる縦縄突帯文が出土したが遺構を伴うものではなかった。地層の傾斜や土器の破碎状態からは二次堆積とも考えられるものであった。縦縄突帯文土器はや、内湾する口縁部をもつものであったが、外反する口縁部をもつ粗製土器を伴っている点、小林市平木場遺跡での出土例に似ており、二重口縁の増形土器を伴った栗巣上原遺跡や、今村遺跡の組みあわせとするとやや様相を異にするものであった。

（茂山謙）

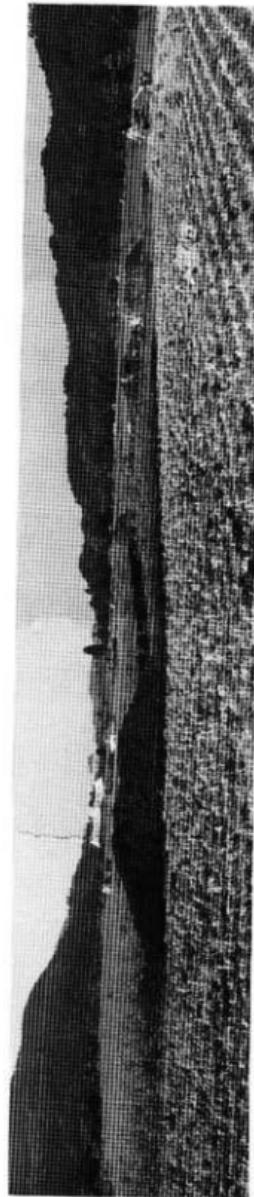
注1 九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1) 宮崎県教育委員会1972

2 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一 XVII — 福岡県教育委員会1977

3 柳田国男『御庵とへっひ』柳田国男全集2巻

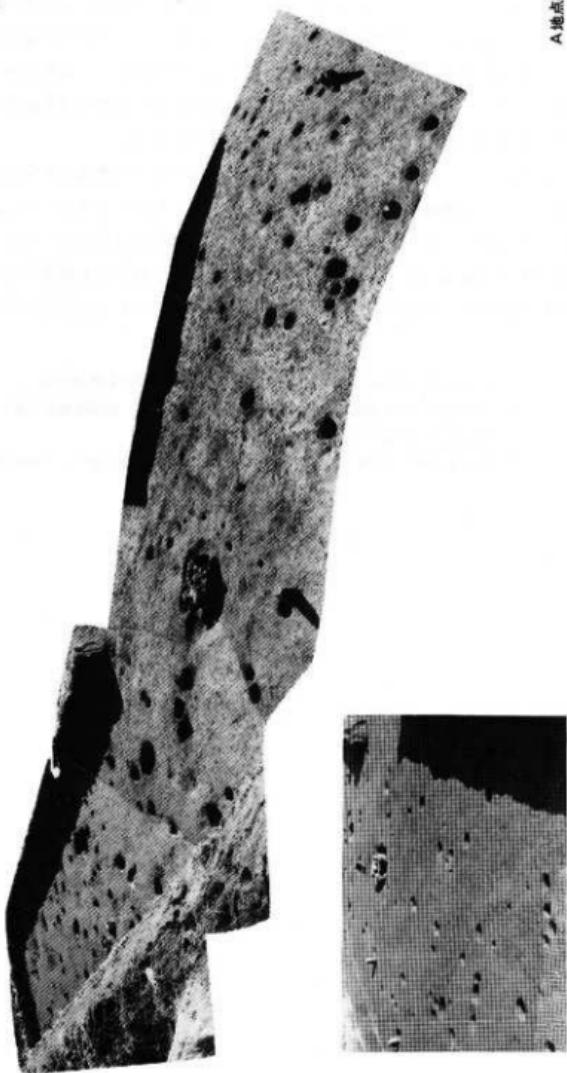
4 横田賛次郎・森田勉『大宰府出土の土師器に関する覚え書き』九州歴史資料館論集2 1976

圖版 1

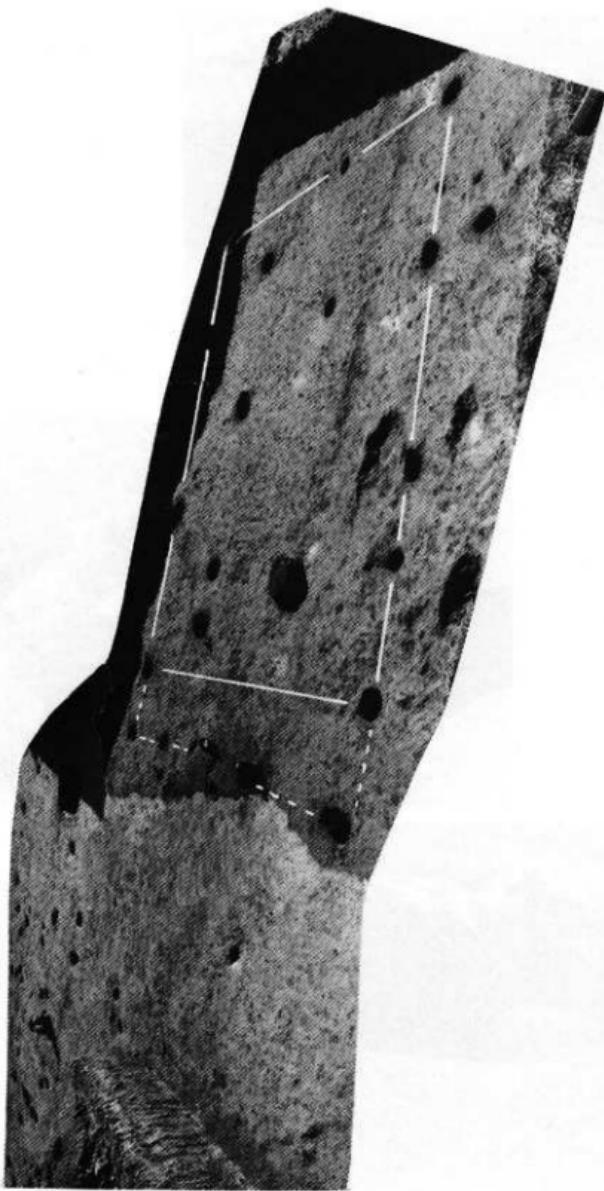


通斷全貌

圖版 2



A 地點柱狀岩



1号掘立柱建物跡



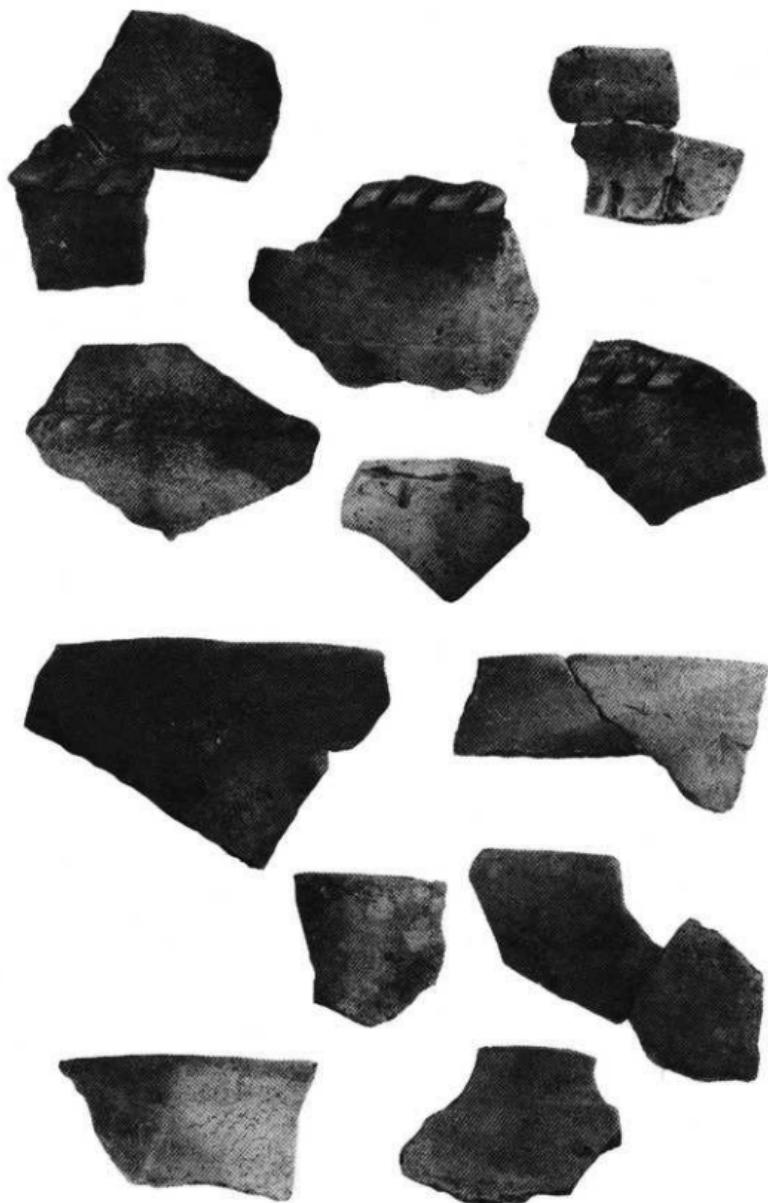
A地点出土の竪



B 地区遺物出土状況



A地区出土土器



今 村 遺 跡

北諸県郡高崎町大字東霧島今村

目 次

1. 調査の経過.....	85
2. 調査区の概要.....	87
3. 遺構と遺物.....	92
(1) 第Ⅰ区の出土遺物.....	92
(2) 第Ⅲ区の遺構と遺物.....	94
4. 結 語.....	97

挿 図 目 次

第1図 トレンチ配置図.....	86
第2図 Ⅲ区の出土状況.....	88
第3図 Ⅲ区の遺物出土状況.....	89
第4図 Ⅰ区D、C-9、10トレンチの土器出土状況.....	90
第5図 土層図.....	91
第6図 Ⅰ区の出土土器拓影.....	93
第7図 Ⅲ区出土器実測図.....	95

図 版 目 次

図版1 Ⅰ区出土の弥生土器.....	98
図版2 Ⅲ区出土の土器.....	99

1. 調査の経過

今村遺跡は、下原遺跡とは、山王迫を隔てて南東に対立する丘陵地にあり、行政上は、高峰町 大字東霧島 字今村に属している。

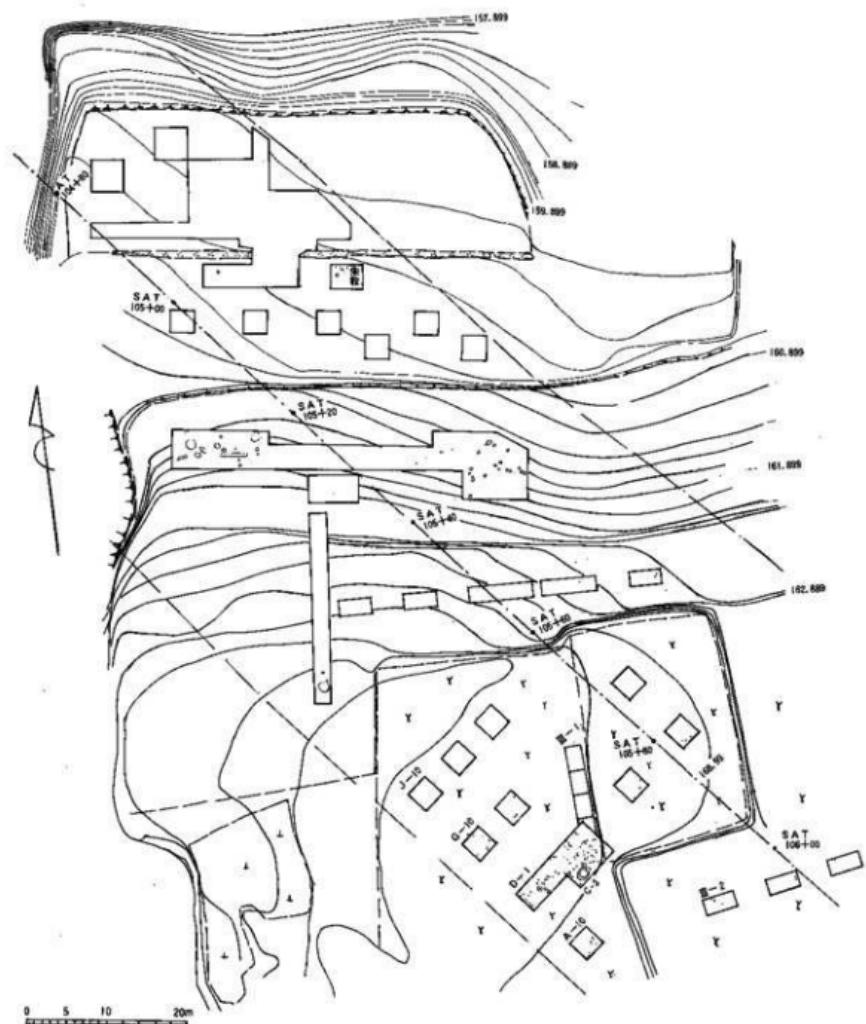
調査は、51年10月6日から12月4日にかけ21日間実施した。調査対象地は、山王迫に向って突出した丘陵の北西斜面に位置している。傾斜面は、上下三段に造成された畑地になっており、この三段の畑地を北西から南東に向って斜断する形で縦貫道予定路線が設定されていた。調査にあたっては、上段の細地から下段の畑地へ向ってⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区に三区分し、中段の第Ⅱ区の畑地から発掘に着手した。

Ⅱ区は、三段の畑地の中では最も傾斜が大きく、東西に細長い畑地は更に二段に造成されていた。従って、Ⅱ区は、すでに畑地造成の際に上層の掘削を受けており、遺物包含の可能性は低いものと予想されたが、細片ながら数点の土器片が表採されたこともあり、一応確認の為に試掘することにした。

発掘は6日から着手し、Ⅱ区の細地に合せて東西方向に3m×20mのトレンチを2ヶ所に設定し、西側から発掘した。発掘の結果、下方のトレンチの東西両端で若干の土器片が出土したが、いずれも断片的で、且つ磨耗度が大きく、流下再堆積された土器片と考えられた。土器片の出土した周辺には、長方形や楕円、或は円形の掘り込みが検出されたが、西側のものは、農耕に伴う芋の貯蔵穴であったり、踏み消し炭の焼きがまの跡であった。また東端部において検出された10余のピットも無秩序で、生活遺構として確認できるようなまとまりのあるものではなかった。また、地層の傾斜角度も大きく、トレンチ内に安定した地層面を見出しえなかつた。

次いで14日から調査地点を最下段の畑地であるⅢ区に移し、畑地境界に植栽されていた茶園に沿って東西方向に2m×20mの試掘溝を設定した。その結果、トレンチ中央より東寄りの部分で、第Ⅲ層の黄褐色土層中に土器片の集積散乱するのが確認された。そこで、この集積地を中心にして、トレンチを南北に拡張して包含層の広がりと、それに伴う遺構の検出につとめた。拡張に際しては、試掘溝を基準に南北両側に4mのグリッドを組み、南北をA～C、東西を1～8に区分し、A-4、B-5の呼称で発掘を行なった。境界茶園など拡張に制約を受け区域全面の発掘はできなかつたが、試掘溝の土器集積地点を中心にA-2～3にかけて炭化した木の実の散布するのが検出された。また、A-5、B-4～5に、それぞれ1ヶ所、楕円形の土塊様の掘り込みのあるのが見出された。B-5からは平根斧矢式の鉄歛1点を検出した。これらは、いずれも同一土層面で発見されている。このほかには特別な遺構や包含層は確認できなかつた。

23日からは、丘地最上段のⅠ区へ調査溝を設定した。Ⅰ区は、全面桑畑になつておらず、深耕による地層の搅乱が予想された。最初、桑細の畦を軸に2×15mの試掘溝を南北方向に設定したところ、トレンチの両側において、口縁部に刻目突帯をめぐらした弥生式土器が発見された。予想に反してしかもも北諸県地方ではこれまで出土例のない比較的古い時期の弥生式土器の出土だった。そこで、桑園全域を調査することにし、路線センターを基準に新たに3mのグリッドを組み発掘を試みた。グリッド調査は12月2日まで継続実施した。結果的にはD-8からD-10を中心に弥生式土器の出土をみたが、土層の搅乱が著しく、原位置での出土と断定できるものが少なく、今回の調査区域内では、遺構を伴う包含層を確認するに至らなかつた。当然、南側への拡張が考えられたが、栽培作物や未買収地であるなどの制約



第1図 トレンチ配置図

があり、今回は調査を断念せざるを得なかった。且つ調査予定日限に達した事もあり、今村遺跡の調査は12月3日で終了した。4日に調査資材等の撤収を行った。

2. 調査区の概要

今回の調査では、Ⅲ区とⅠ区において小規模ながら土器集積層や包含層を見出した。

Ⅲ区では、第1トレーナーのⅣ区Ⅲ層に最初の土器集積を確認し、拡張の結果A-2・3グリットにかけて炭化した木の実の散乱をみたのであった。検出した土器は、集積点を中心に約3cmの範囲に散乱していたが、いずれも小破片となっていた。その散乱状態は、錫歯による破損によるものではなく、なにか意図的に破碎投棄された感じを与えるものであった。ことに丹塗土器がことごとく細片化していることが一層その感を強めるものであった。破碎散乱の土器片を、胎土焼成等から同一個体分ごとに整理した結果、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高環形土器に分類され、それに、器体の復原できない丹塗土器の細片がかなりあった。

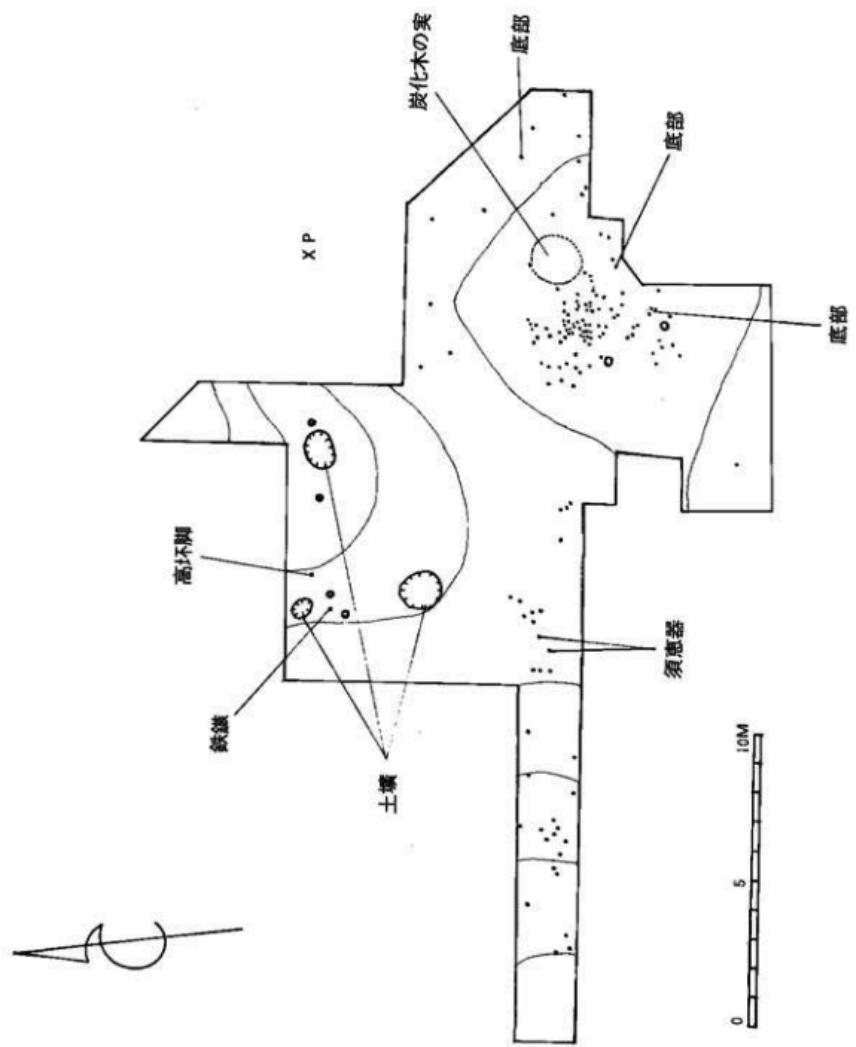
Ⅲ区における土器の集積散乱のあり方は、野尻町大荻遺跡の土塙周辺における破碎土器の散乱状態に類似するところがあった。

この土器集積散乱地点から北西へおよそ6~8m離れたA-5、B-4・5区に、長径140m、短径90cmと、長径120cmに短径90cmのいずれも楕円形の掘り穴が検出されている。周辺から径20cmのビット3個と平根斧矢式の鉄鎌も同時に検出されている。これらは、ほぼ同一層序にあり、上層部の土層に擾乱の跡を認めなかっただけに同時期か、きわめて近い時期のものと考えられる。掘り穴は、いずれも深さ30cm前後の浅いもので、内部埋土の中に若干の炭化物が堆積していた。

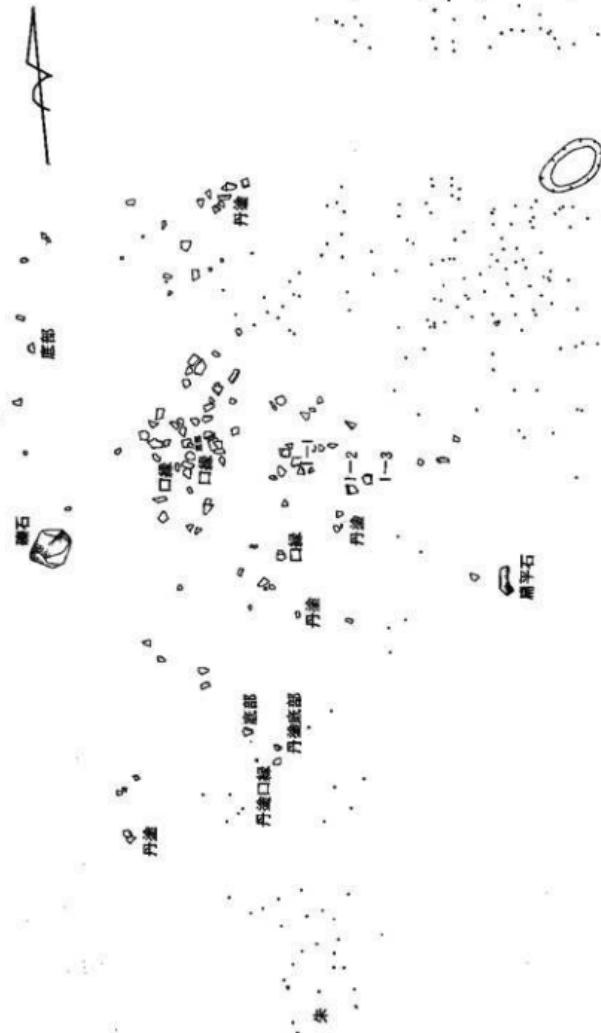
掘り穴の性格については、破碎土器の集積と関連づけ埋葬遺構としての土塙とも考えられなくはないが、直に断定できるだけの確証は得られなかった。

A-2・3に発見された炭化木の実は、およそ200粒を数えた。これらの木の実は、土器の散乱地点より、やや東北寄りの地点を中心に約3m四方に散乱していたものである。出土状況からみて特に貯蔵されたものではなく、樹木から熟して落下した実が、たまたま炭化遺存したものと考えられる。炭化木の実は土器包含層の上面から下層の混ボラ黄褐色土層内にかけて採取されている。

丘地最上段のⅠ区では、D-1~4、C-3・4に弥生式土器の包含層が認められた。包含層は、地表下1mの第Ⅲ層漆黒土層内であった。Ⅰ区は全城桑園として利用されていただけに、桑の植付や肥培管理のためにかなり深耕されていることは、当初に予想されていたことであったが、発掘の結果は、やはり表土層が薄く、その上、貯蔵用芋穴の掘り込みなどもあり随所に土層の擾乱がみられ、遺物はかならずしも原位置での出土とは考えられない状況にあった。しかし、出土した土器片に破屑磨耗したものが比較的少なかったことは、周辺に確かな包含層の存在を予想させるものであったが、今回の調査ではそれを確認するにはいたらなかった。



第2図 Ⅲ区の出土状況



第3図 III区遺物出土状況



第4図 I地区 D.C-9-10トレンチの土器出土状況

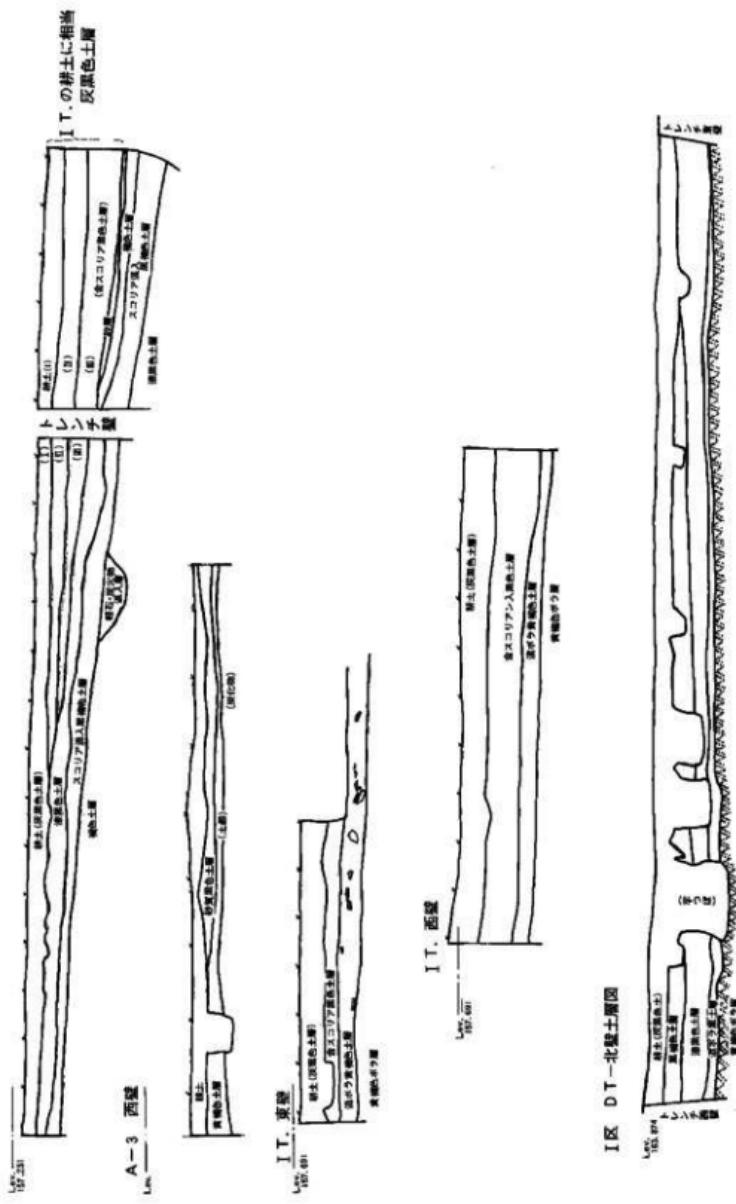
層序（第5図）

I区は、西北に高く南東へ向って次第に近くなる地形を呈する。西北側は、耕土下すぐにボラ層になつておき包含層を認めることはできなかつた。南東側には上層部が残されており若干の遺物包含層を認めた。Dトレンチ北壁の上層部によると、耕土下（灰黒色土）、第II層に黒褐色土層、III層漆黒色土層、IV層混ボラ黒土層、V層黄褐色ボラ層になつており、III層からV層上面までが包含層になつてゐた。現耕土面からV層上面までの深さは80～90cmを測つた。

II区は、上層部の削平が著しく、I区で観察されたIII層の漆黒色土層を欠いていた。浅い表土層をなす耕土の下層には黄褐色砂質土層があり直にボラ層に続いていた。土層には、西側から東へ向つて傾斜があり、トレンチ東端では、黄褐色土層の上層に薄い黑色土層が残つてゐた。耕土から黄褐色土層までの厚さは約80cmであった。

III区は傾斜地最下段に位置し、畠地上面は、他の2区には層序に若干の相違が見られたが、著しく層序を異にするものではなかつた。

耕土下II層に漆黒土層、III層にスユリア混入黒色土層、IV層渴ボラ黄褐色砂質層、V層が黄褐色軽石層になつてゐた。IV層は、II区のII層に相当する層である。遺物は第IV層より発見されている。耕土面よりIV層までの深さは50～60cmであつた。



第5図 土層図

3. 造構と遺物

(1) 第Ⅰ区の出土遺物 (第6図)

D-1~4、C-3・4の限定された範囲に出土した遺物は、すべて弥生式土器であり、変形土器と壺形土器がある。変形土器は、文様や形態から4類に分けられる。碎屑化したものは少なかつたとはいへ器形を復元できたものは皆無であった。

変形土器

1類(1~3) 貼付による肥厚した口縁をつくり、口縁直下に一条の突帯をめぐらした断面図がF字形を呈する。やや外傾する口唇外縁と突帯には、箆工具による刻目が整然と施されている。器面には刷毛目調整痕が残る。胎土は比較的こまやかで雲母片を含む、焼成良好、色調は褐色を呈する。

2類(4) 肥厚した外傾する口唇縁に刻目を施したものである。1類と異なり口縁直下の突帯を欠く。口縁下には調整時の押し引きで凹面を形成している。色調は褐色を呈する。この1点だけが採取されている。

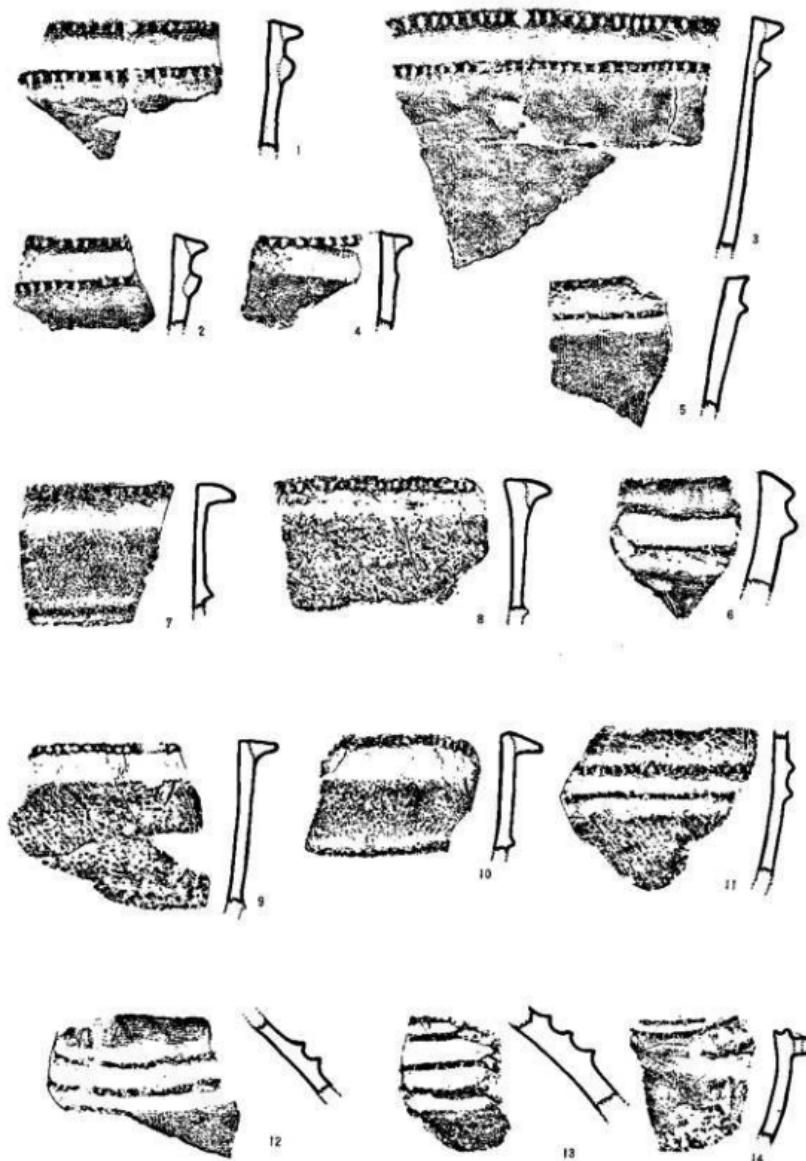
3類(5・5) 平坦な口唇外縁と直下の突帯に刻目を施したものである。1・2類のように口唇部に肥厚がみられない。器面には刷毛目痕が縱走する。胎土はこまかく、焼成良好なり。色調は褐色を呈する。(6)は、口唇外傾し刻目を施さない。

4類(7~11) 口縁外側に粘土貼付によって肥厚した口縁は、逆「L」字状に近く、口唇平坦面はやや外傾している。胴上位に1条乃至2条の低い三角突帯をめぐらす。口唇外縁と突帯には、1類と同様に刻目を施している。器面には粗い刷毛目痕が部分的にのこる。胎土に多量の砂粒を混在するために化粧土のおちた器面にはザラつきがある。焼度は高いほうではない。黄褐色乃至赤褐色を呈する。

壺形土器(12~14)

頸部に低い突帯を2~3条めぐらす壺形土器の破片とみなされるものである。突帯には浅い刻目が施されている。胎土は比較的こまかく、焼成度も高い。色調は褐色乃至赤褐色を呈する。部分的な破片だけに完形については明確でないが、宮崎市の石神遺跡や佐土原町中溝遺跡の壺形土器にみる突帯に類するところがある。

Ⅰ区の弥生式土器は、出土量も少なく断片的で、完形を知り得るものはなかったが、変形土器は特徴的であった。1・2類出土器北九州の龜の甲式や、南九州の高橋Ⅱ式に類例が求められ、3類はいわゆる下城式の系統に属するものであり、4類は、鹿児島の入来式に近い形式である。個々には、口縁の湾曲度が小さく直口に近いことや、逆「L」字状口縁の外傾度が小さいことなど若干の相違点が指摘できる。1類にみる直口する口縁と、口縁に近接した突帯の位置形態からは、むしろ下城式との関連を考えるべきかもしれない。いずれにしろ、前期の伝統をもつ形式として注目される土器である。県内ではこれまで出土例が少なく共伴関係など明らかでないが、一応中期前半に比定されるものと考える。



第6図 I区出土土器拓影

(2) 第Ⅲ区の遺構と遺物

① 遺構(第2図)

長軸を南北に置いた長径1.4m、短径1.2mの椭円形の掘り込み(D1)と、東西を長軸とする長径1.2m、短径0.9mの掘り込み(D2)が検出されている。どちらも掘り込みは浅く、中心部の深さ30cm前後の周縁を浅く椀底状に掘り込んだものである。埋土に若干の炭化物が混在した以外に遺物等は何等検出されなかった。一種の土塹とも考えられたが確証はない。

また、D2の周囲に、その西側にかけてピット4個が検出されている。ピットは、いずれも径20cmほどのもので深さは25~28cmを測った。D2周囲の2個は、丁度D2の長軸線上に位置しており、あたかも穴を覆う庇をとりつけた支柱の柱穴とも憶測させるものであったが、両者を直接関連づけるだけの積極的な確証は得られなかった。なお、西側の2個のピットの間から鉄鏃1個が検出されている。

② 遺物

Ⅲ地区から出土した遺物は、土器と鉄鏃であった。土器はいずれも原形を留めないまで破碎されていたが、胎土・焼成等から同一個体分とおもわれる破片ごとに整理した結果、壺形土器、夔形土器、高壺形土器、鉢形土器が復原できたが、丹塗土器片だけは、あまりにも細片碎屑化しておりどうしても原形を確かめることはできなかった。そのほかに、須恵器片が1点出土している。自然遺物として炭化した木の実が採取されている。

土器(第7図)

壺形土器(1)

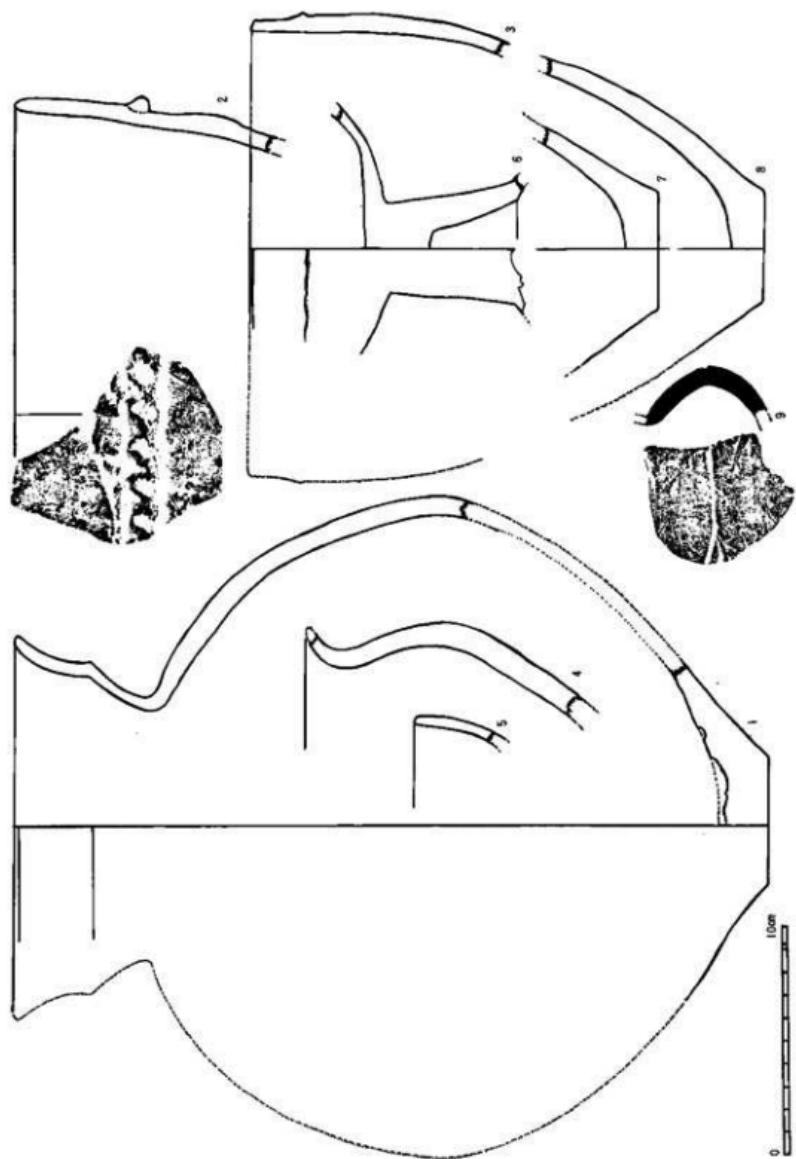
胴張りで二重口縁をもつ壺形土器である。推定復原口径17~18cm、頸部径は13~14cm、器高33cm前後になる。胴は球状に張り、最大径はほぼ胴中央にあり、器高に近似した29~30cmの数値を示す。底部は平底になる。焼成度はあまり高い方ではない。全体に保存状態も悪く、内壁の剥離が甚だしい。全体的に灰褐色を呈する。

夔形土器(2・3)

口縁部下方に絡繆状突帯をめぐらしたものと、突帯のないものとがある。前者は、や、内溝する口縁部の下方に幅1cm、高さ0.7cm断面三角状の突帯をめぐらせ、これに筆様施文具で斜めに押圧気味に絡繆状の刻目を施した土器である。胎土は比較的きめ細かである。焼成度は低い。器壁表面の風化が著しく、土器の保存状態は良い方ではない。推定口径27cmとなる。後者は、推定口径20cm、胴部の張りの少ない夔形土器で、口縁部に微隆起帯がある。焼成度は低く、全体的に粗製である。色調は灰褐色を呈する。底部は平底になるものとおもわれる。

鉢形土器(4・5)

口縁部が外反し、外方へ張り出した胴部をもつ鉢形土器である。器壁の断面形はS字状を呈する。5は椭円形土器の破片と考えられる。胎土はわりに細かいが、器面にはザラつきがある。焼成度は低い。灰褐色を呈する。外壁面に煤の付着がみえる。



第7図 Ⅲ区出土土器実測図

高环形土器（6）

脚柱部の破片である。完形は明らかでないが、脚底が裾開きになる高环形土器が予想される。器面は箝磨きされているが、風化によるザラつきがある。胎土はわりにきめこまかく焼成も良好である。黄褐色を呈する。

須恵器（9）

第1トレンチの北側傾斜面で発見されている。前記の土器とは出土地点を異にするが、層序の上では同じ第Ⅲ層黄褐色沙質土層面に出土している。

断片で全体形を復原できないが、軸球体の断面形や、球状曲面に施文された沈線文や櫛描波状文から縫の胴部断片と推定される。色調は青灰色、上部肩部にあたる面には自然釉がかかり灰黄色を呈する。器形や文様からみて、陶邑TK23あたりに相当する縫ではないかと考えられる。

鉄 錬

B-5地点から出土したものである。全長約10cm、幅約3cmほどの平根斧矢式の鉄錬であったが、保存状態が悪く、すでに採取の時点で半壊していたが、その後に粉失し、実測図を掲示することができなかつたのは疎漏であった。

自然遺物

炭化木の実

土器散乱地点を中心に約200粒余りが採取されている。この炭化した木の実は、一ヶ所に集積していたものではなく、およそ9m²の範囲に一面に散乱状態で発見されたものである。木の実には大小あって、大粒のものでは、長径1.3cm、短径1.0cm前後の大ささで、橢円形ながら丸形に近い顆粒が多く、果実には縦に通る筋がみえる。小粒の方は長楕円形で、一端がやや尖り氣味になつたものが多い。長径1.0cm、短径0.7cm大のものが主である。

果実の形態から檻乃至は椎の堅果が炭化したものと考えられるが断定できない。出土状況からして、これらの木の実が採集貯蔵されていたものでないことは明らかで、樹枝より落下したものか、たまたま自然炭化したものと考えられる。

以上、Ⅲ区の遺物は直接遺構に伴うものではなかつたが、土器については、壺・壺・鉢・高環を一つの組あわせとして把握されるものであった。これらは、變形土器にみられる縦縄突帯文土器と同類であり、南九州終末期に位置づけられるいわゆる成川式土器に包括されるものである。變形土器は、内湾氣味の直行する口縁形態から、縦縄突帯文土器としては後出の形式と考えられる。また、胴張りが著しく球体状の器体に複合口縁をつけた壺形土器は、いわゆる五領式に代表される初期土師器に共通する様相がうかがわれ、県内では今まで出土例の少ない古式土師器への移行形式として位置づけられるものであろう。高崎町示野原遺跡に類例があるが、縫をなす口縁屈折部に刻目を施している点に相違がみられる。

従来、成川式として包括されていた縦縄突帯文の變形土器は、出土例の増加にともない次第に細分化され、その変遷過程が明らかにされつつあるが、變形土器と壺形土器の組あわせについては、いまひとつ明確さを欠いている。それだけに、今村Ⅲ区の出土土器は、壺形土器と變形土器

の組あわせ例として貴重であり、しかも初期土師器に近い壺形土器であることなど、諸県地方に分布する絡繩突帯文土器の編年の上でも注目される資料である。

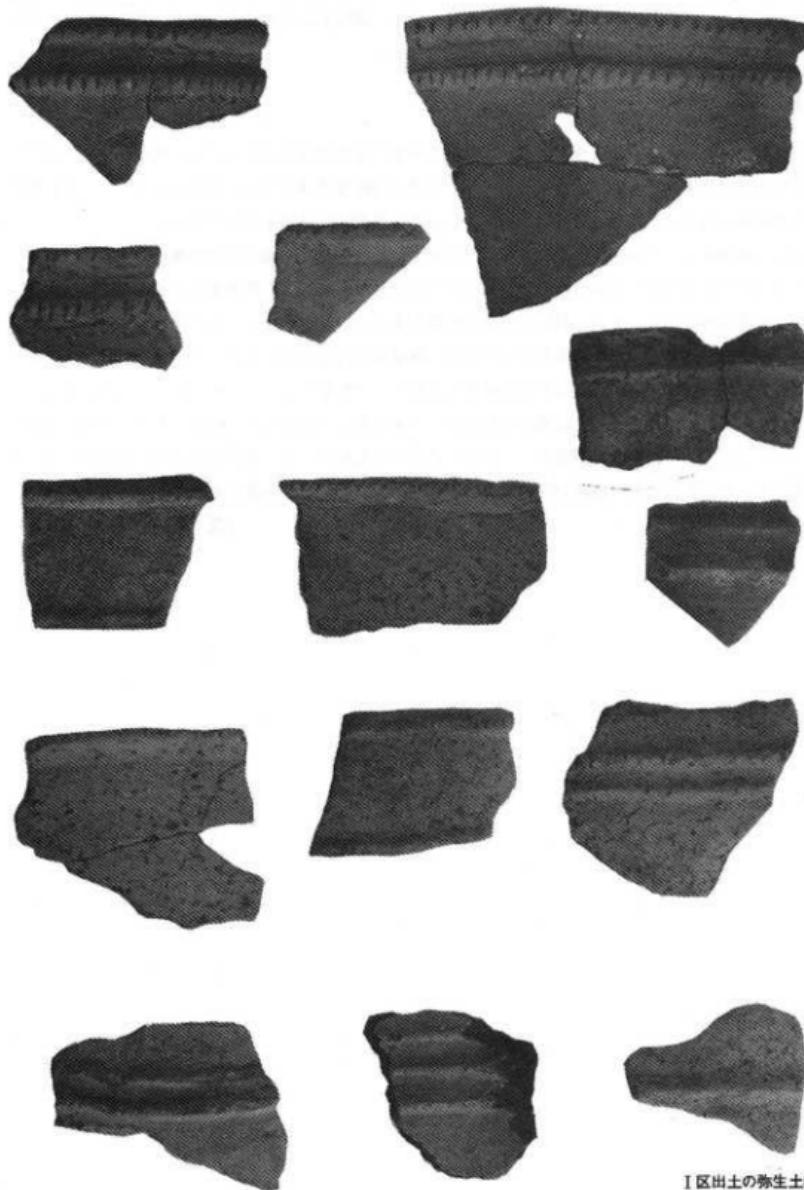
4. 結語

以上の調査結果にみる通り、今村遺跡は、弥生の中期と後期の遺跡であることが判明したが、各時期に属する土器の出土量は少なく、かつ断片的で、性格の明瞭な遺構を伴うものではなかった。それだけに型式や編年を論するには資料不足であるが、いずれも特徴的な土器を出土している。

I区の口縁部を上下に刻目突帯で飾った壺形土器は、龜の甲式や下城式との接触を示すものであり、中期初頭における東九州の土器伝播や、南九州の入来式や山ノ口式との関連を考えるうえで、今後大いに注目される資料である。また、III区における絡繩突帯文の壺形土器は、古式土師器ともうけとれる二重口縁の球形の器体をもつ壺形土器を伴っており、薩摩式或は成川式土器として包括されてきた絡繩突帯文土器の分類と編年上に、組みあわせの明確な資料として貴重である。絡繩突帯をもつ壺形土器については、丸底壠との共伴関係や、本遺跡でも混在した須恵器との関係など、詳細な追究が必要である。

いずれにしても、今村遺跡の調査が、シラスを基盤とした起伏の多い東霧島地区の丘陵台地一帯にも小規模ながらも弥生前中期の遺跡が存在する可能性を示唆したことは収穫であった。

(茂 山 譲)



I区出土の弥生土器



III区出土の土器

III. 山田町の歴史的概観

北諸県郡山田町は都城市の北、同郡高峰町の南に位置する町で、土地はいわゆる霧島盆地の一部で、大淀川の支流である木ノ川内・麓川内・是位川内の3流が西から東に流れている。考古学的調査は未だ充分行なわれていないが、中霧島のロンデン(字名)で縄文時代の後期初頭とされる指宿式土器や石臼が発見されており、その他花舞では敲石、下椎屋では磨製石斧などが出土しているから縄文時代に遡る文化が見られ、弥生式土器の散布も知られている。概観としては都市の文化圏に入るものと考えられる。宇古江の薩摩追は磨製石斧や土鍤などを出土しているが、都城の城主となつた北郷資忠ほんじょう しちゆうがその子義久とともに住居した所で、古江の館と呼ばれたが天授元年(1375)にここを出で都島に都城を築いて移り都城地方の領主となつた。

(石川恒太郎)

牛 谷 遺 跡

北諸県郡山田町大字山田

遺跡の位置と調査の概要

所在地 北諸県郡 山田町 牛谷

高崎町東と都城市岩溝の境界に近く、国鉄吉部線高崎新田駅と万ヶ塚駅とのほぼ中間地点の東側の台地上に位置する。都城市岩溝で、国道221号線から分れて山田町への町道を西進し、牛谷公民館のところから農道へ南折し、迫田を通りぬけ登りつめた台地上の畠地が、土器の散布する遺跡地となっており入り谷に面した台地の東辺が調査の対象地であった。丸谷第Ⅱ遺跡とは、丘陵と谷を隔てて南北に対立する約1kmの地点にあり、高崎町の今村遺跡と丸谷第Ⅱ遺跡とのほぼ中間に位置している。

牛谷遺跡は、先の路線内埋蔵文化財分布調査では、地下式横穴群の所在地として予想されていたところで、路線確定に伴ない調査対象地になったところである。

従来、山田町内で所在の確認された遺跡は少なく、西脇、茅原、薩摩追、樫田、合戦場、論田、長谷瀬之口等10ヶ所余りが数えられるだけで、北諸県郡内では最も遺跡の少ない地域となっている。これらの遺跡は、いずれも昭和46年度に県教委が実施した九州縦貫自動車道関係遺跡分布調査の際確認されたものである。従って、43年に発行された文化財保護委員会編の全国遺跡地図には、一ヶ所の遺跡も記入されていなかった。これは、10mにも達するような御池軽石層に覆われた起伏の多い地形的な制約によることも考えられるが、積極的な遺跡調査が実行されなかつた事に最大の理由があるのかもしれない。

調査に先立って行なった対象地域の表面採集では、ほとんど土器片を見なかつた。ただ、道路建設予定路線外の畠地では數個の土器細片も表探され、わずかに包含層存在の可能性を予想させた。とにかく路線内の且つ調査可能の畠地に関する限り表探資料もなく、包含層存在の可否については連断できなかつた。まして地下式横穴については、過去に一度の発見例もない所だけに、果して、地下式横穴が包蔵されているかどうか疑わしかつたのである。

調査は、11月1日から5日にかけて、路線内数ヶ所に試掘溝を設定して発掘した。調査の結果、遺物としては、碎屑磨耗した数片の土器片を採取したにすぎなかつた。土器細片は、地表下60cmの漆黒土層下、黒褐色土層上層面であった。この黒褐色上層は第Ⅲ層にあたり、高崎町の各遺跡での観察地層と同様、弥生期の包含層に一致する土層であった。各トレンチ内の土層図によると、現地表から黄色ボラ層（御池軽石層）までの深さにかなり深浅の差が観察され、地層に著しく起伏のあることを示していた。これは、現地表の平坦面は、後世の畠地造成によって形成されていることの証しであつた。

碎屑磨耗した土器片からは、周辺に包含層等の存在を予想させるものではなく、試掘地点に関する限り、遺物包含層はもとより、造構の存在の可能性を見い出すことはできなかつた。

以上のような試掘結果から、牛谷遺跡の調査は5日をもって打ち切ることにした。

（茂山 譲）

IV. 都城市的歴史的概観

都城市は古くは島津と呼ばれ、霧島火山と南那珂山地との間に展開している霧島盆地の中心に位置し市内はほぼ大淀川の上流によって灌漑されている。従って古くから人類が住居して多くの遺跡を残しているが、それらの遺物の示す文化を歴史的に概観すれば、都城市五十町で発見された縄文前期の鉢形土器が先ず注目されるもので、この土器は五十町の道路工事の際に縄文前期の土器とされている前平式土器（鹿児島市吉野町前平出土）と混じて出土したもので、全縄文の深鉢形（円筒形）で口の部分に刺突文を並べており、九州に於ける縄文土器の系列を知る上に重要な位置を占めるものであることが注目されている。さらに早くから発見されている同市尾平野の洞窟は縄文時代後期の住居跡であるとともに遺物の包含地があるので、洞穴遺跡として新たな調査が必要とされている。^(註1)

弥生時代の遺跡としては、県教委で昭和39年に調査した年見川の遺跡などがあり、この遺跡からは住居址や鉄製の鐵などが出ており、特に方形周溝墓が出た。しかもこれは宮崎県では最初の発見であった。もっとも当時は方形周溝墓は九州地方では知られていなかったので、われわれは方形の住居址として報告したが、後にこれが方形の周溝墓であることを知ったわけで、当時一緒に発掘調査された鏡山猛氏（九州歴史資料館長）も今年5月の西日本新聞に、「年見遺跡は（中略）昭和三十九年に調べています（中略）方形周溝墓というのは、当時ようやく、そういうものがある、ということが関東の方でわかった頃でして、年見遺跡も、住居跡とは違うし、土器の年代やミソの造り方から考えて方形周溝墓の資料に一致したわけです」と語っている。^(註2)

古墳は鷲尾町や沖水、志和池、庄内などに前方後円墳1基、円墳16基、方墳1基、地下式古墳6基が県指定となっているが、その後に市内牧の原で地下式古墳26基、下水流町で地下式古墳2基が発見された。これらによてもこの地方が古墳時代にも引き続き文化が栄えたことが知られるのである。

その後奈良時代に律令制が実施されると島津には駅が置かれて島津駅は日向国府（西都市）から宮崎を経て山之口から島津駅に出て大隅国国府（国分）から薩摩に出る交通の要路となり、さらに平安時代には万寿年間（1024—1027）に太宰府の大監であった平季基がこの地に来て島津荘を開いて、これを関白家の近衛氏に寄付してから、この荘園は日向、大隅、薩摩の三国に跨がる日本一大荘園となったが、元暦二年（1185）に惟宗忠久は源頼朝から島津荘の下司職に任せられて建久7年（1196）薩摩に来た後島津に来て、荘名によって姓を島津と改めて祝吉御所に居り、後また薩摩に帰った。この時忠久から久木崎藏人國房は土地をもらってここに住み、その子孫の宮丸藏人道時が都城に城を築いたが、北郷氏初代の資忠（忠久四代の孫忠宗の6男）は宮丸の娘を娶って嗣子義久をもうけていたので道時は外孫義久の成長を待ってこの城を義久に譲った。これから北郷氏が都城の城主となり、一時伊集院氏が城主となつたが、慶長4年（1599）後また北郷氏が代って城主となり明治に至った。

（石川恒太郎）

注1 賀川光夫氏「九州東南部」日本の考古学、縄文時代、1967、河出書房。

注2 鏡山猛氏、西日本新聞「聞き書きシリーズ」タイムトンネルの旅23。

丸 谷 第 2 遺 跡

都 城 市 丸 谷 町

目 次

1. 遺跡の位置.....	107
2. 調査の経過.....	107
3. 調査区の概要.....	108
4. 出土遺物.....	110
5. 結 語.....	115

挿 図 目 次

第1図 遺跡付近.....	107
第2図 A地点発掘区.....	109
第3図 A地点の土層図.....	110
第4図 J-12・13区土器出土状況.....	111
第5図 A地点E-1~5トレンチ内遺物出土地点.....	112
第6図 A地点出土土器拓影.....	113
第7図 出土土器拓影.....	114

図 版 目 次

図 版 出土の土器.....	116
----------------	-----

1. 遺跡の位置

丸谷第Ⅱ遺跡は、都城市丸谷町にあり、丸谷町の中でも隣接する山田町との行政境界に最も近い北西部に位置している。丸谷第Ⅰ遺跡からは北へ約1km、国鉄吉都線万ヶ塚駅の東方1.3kmの地点にあたる。付近はシラスを基盤とする起伏の多い台地になっており、丸谷地区でも一等の畑地帯になっている。台地は随所に樹枝状に浸蝕された追田が入りこんでいる。これらの浸蝕谷のうち、最も広い追田を形成しているのが万ヶ塚から荒ヶ田にかかるものである。この浸蝕谷の中央付近に南北両岸より舌状に突出対置する台地がある。その台地の縁辺が、それぞれ遺跡となっている。縦貫自動車道は、対置する台地の中央を南北に縱断する形で通るよう設定されており、今回の調査となったものである。

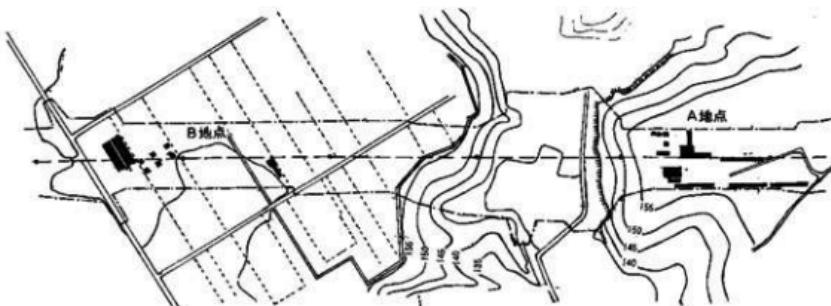
調査に際しては、南面する北側突出部の縁辺にある散布地をA地点に、これに対向する南側台地上に所在する散布地をB地点と区分し、両地点を合せて丸谷第Ⅱ遺跡と呼称することとした。

丸谷町にはこれまで遺跡としては丸谷古墳1基が確認されているだけ、ほかには遺跡の報告はなく遺跡分布図の上でも白紙に近い地域であった。しかし、周辺の志和地から高崎町横谷にかけては、下水流古墳群をはじめとして、志和地13塚、平原地下式横穴群、高崎町の横谷古墳群、共和地下式横穴群など古墳時代の遺跡が数多く点在している。従って、丸谷川の沖積地を前面にする丸谷地区の台地縁辺にも集落跡など遺跡存在の可能性は十分に予想されるところではあった。

2. 調査の経過

調査は、52年9月19日から21日の3日間、予備調査を行なった。予備調査では、A・B両地点共、試掘溝より若干の遺物の出土をみることができた。しかし、両地点ともに出土範囲が局地的であり、大規模な包含層や集落跡等の存在についてはあまり期待はもてなかつたが、確認のために本調査を実施することになった。

本調査は、10月4日から10月19日にかけて15日間実施することになり、4日から14日までをA地点の調査にあて、B地点は、15日から19日までの4日間にわたって発掘調査した。



第1図 遺跡付近図

3. 調査区の概要

A 地点

予備調査で、縄文後期の土器片が採取されたこともあり、後期縄文土器の包含層とそれに伴う遺構の存在に若干の期待が寄せられていたのであったが、発掘の結果は、期待に反し、縄文土器はほとんど出土せず、少量の弥生式土器片が、しかも断片的に検出されたにすぎず、何らの遺構も確認されなかった。

現地の地形は、北側の桑畑が一段高くなっているだけで、全体的には平坦な地面の畠地になっていた。発掘の結果、見かけの地面とは異なり意外と地層の起伏は著しく、過去に畠地造成に際して地表面のならしが行なわれていることが判明した。全体として北西側に高く、南東へ向ってかなり傾斜をもった地形であったようだ。また台地の南縁辺では、西から東への傾斜が観察され、東南の突出部へ向って急激な傾斜をもっていたことを示すものであった。

A 地点の層序は、E-1～3 トレンチ東壁断面図によれば、I 層の耕土 (20～25cm) 下、II 層に黒褐色土層 (24～30cm)、III 層に漆黒土層 (15～18cm) があり、IV 層内には部分的に黄色のボラの混在がみられた。IV 層は泥質の黒色土層 (10～12cm)、V 層が黄色のボラ層と呼ばれる即池軽石層の厚い層になっていた。この軽石層は、およそ 3 m に近い層をなしていることが E-8 トレンチの掘り下げ面で観察された。

以上の 5 層の中で、III 層から IV 層にかけて土器の出土がみられ包含層になっていた。しかし、各トレンチにおける土器の出土量は少なく、且つ断片的であり、遺構を伴う包含層ではなかった。

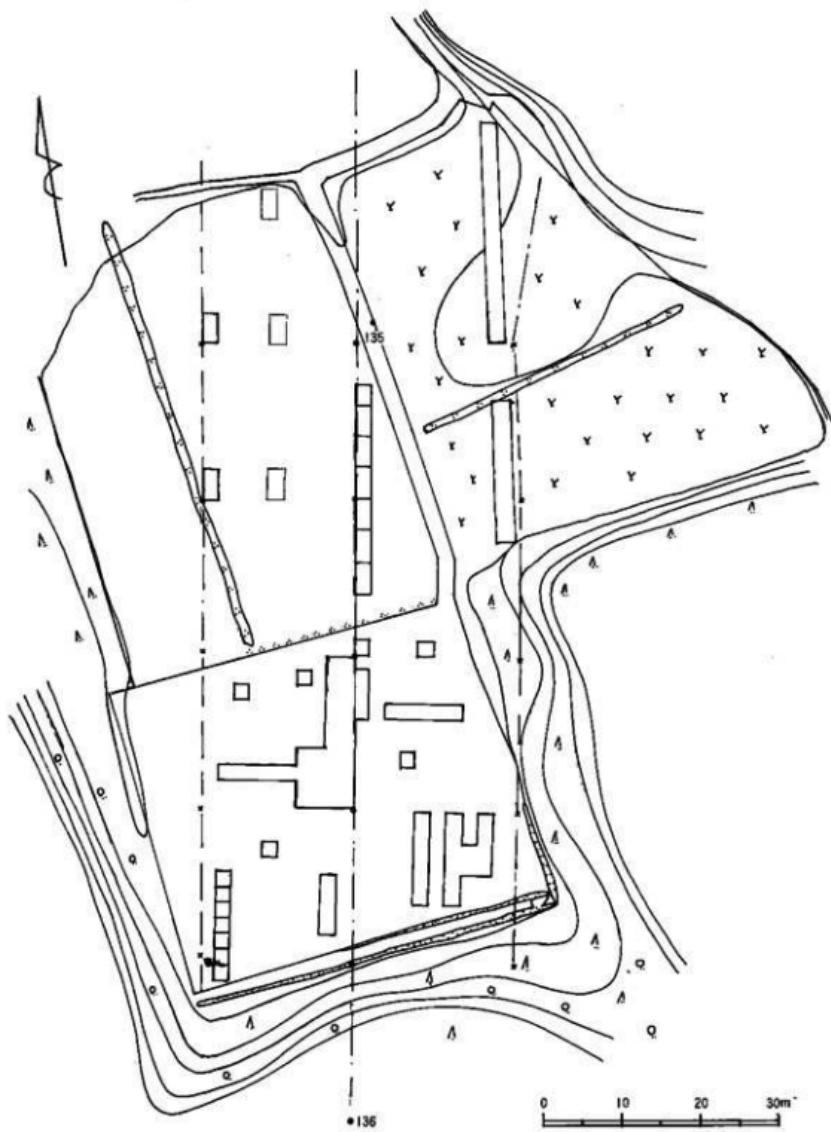
A 地点の中で比較的土器片の出土量が多かったのは J-13 トレンチであった。台地の東縁に近いこの地点では、耕土を I 層として、II 層にスコリア混入黒土層 (10～15cm)、III 層 黒褐色土層 (30～38cm)、IV 層 漆黒土層 (15～20cm)、V 層 混ボラ黒土層 (10～15cm)、VI 層 混土ボラ層 (12～20cm)、VII 層 即池軽石層となっており、VII 層から IV 層上層にかけてが土器の包含層になっていた。地層全体としては、北西から東南へ大きく傾斜していることが観察された。他のトレンチより若干多くの土器片が包含されてはいたが、これとても 1 個体としてまとまりをもつものではなかった。

以上、A 地点では、いずれも地表下 50～60cm の第 III 層から IV 層上層にかけて土器片が包含されていたがきわめて断片的であった。また包含層が、いずれも東乃至東南への傾斜を示しており、土器片の磨耗状態からみて周辺からの流入とみられるものであった。従って、調査区周辺に包含層の存在の可能性を予測させるものではあったが、今回の調査範囲内には、生活遺構の存在を確証づけるだけの有力な手懸りは得られなかった。

B 地点

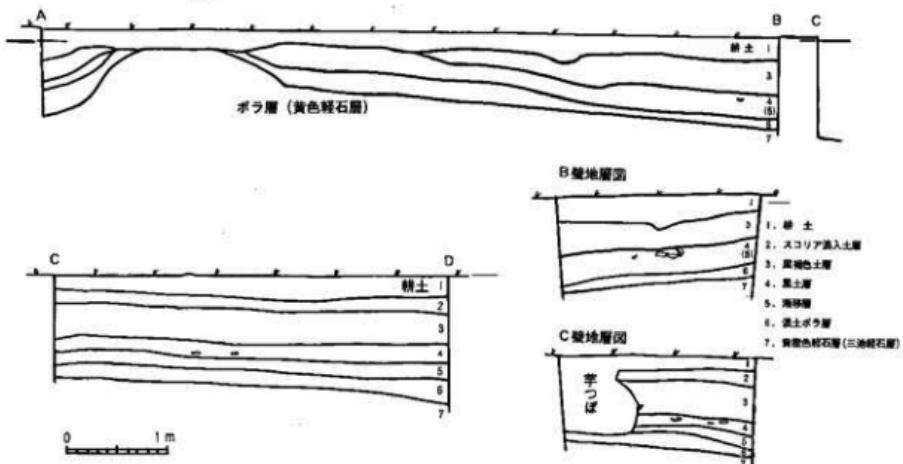
B 地点においては、路線 S-T-A 138+40 の東側に設定したトレンチで、土器片の集積が確認されたが局地的な包含で遺構を伴うものではなかった。なおトレンチ東側で石庵丁 1 点が検出された。

土地の買収が完了していない事や、栽培作物の収穫が終っていないなど調査上の制約があり、B 地点が調査はきわめて部分的な試掘に終始する結果になった。



第2図 A地点発掘区

J-11~13区トレント東壁地層図



第3図 A地点の土層図

4. 出土遺物

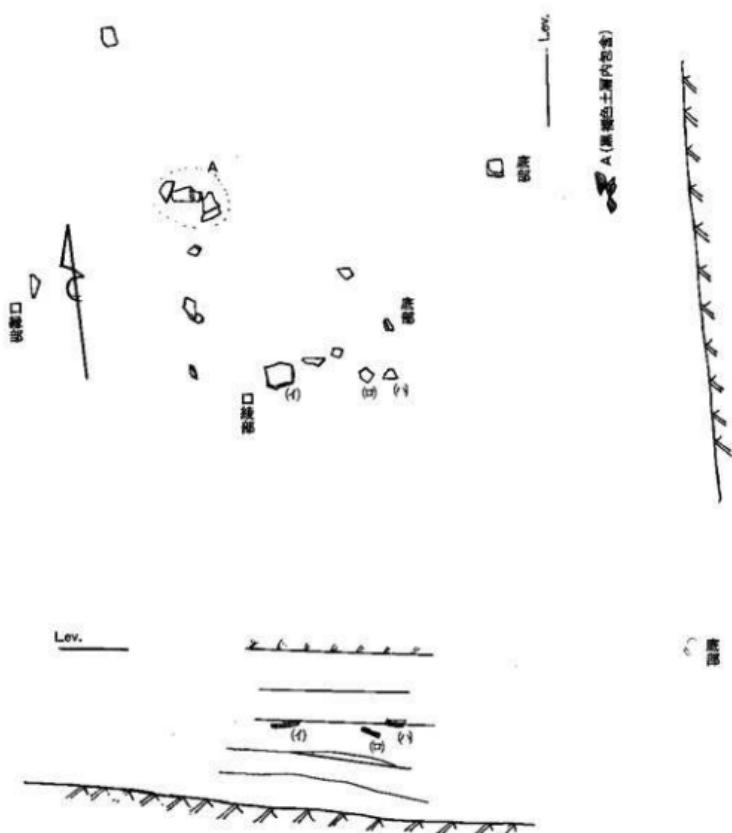
(1) A地点出土の遺物

A地点からは、縄文土器と弥生土器が出土しているが、いずれも断片的で、出土量も少なく完形を知り得るものは出土していない。

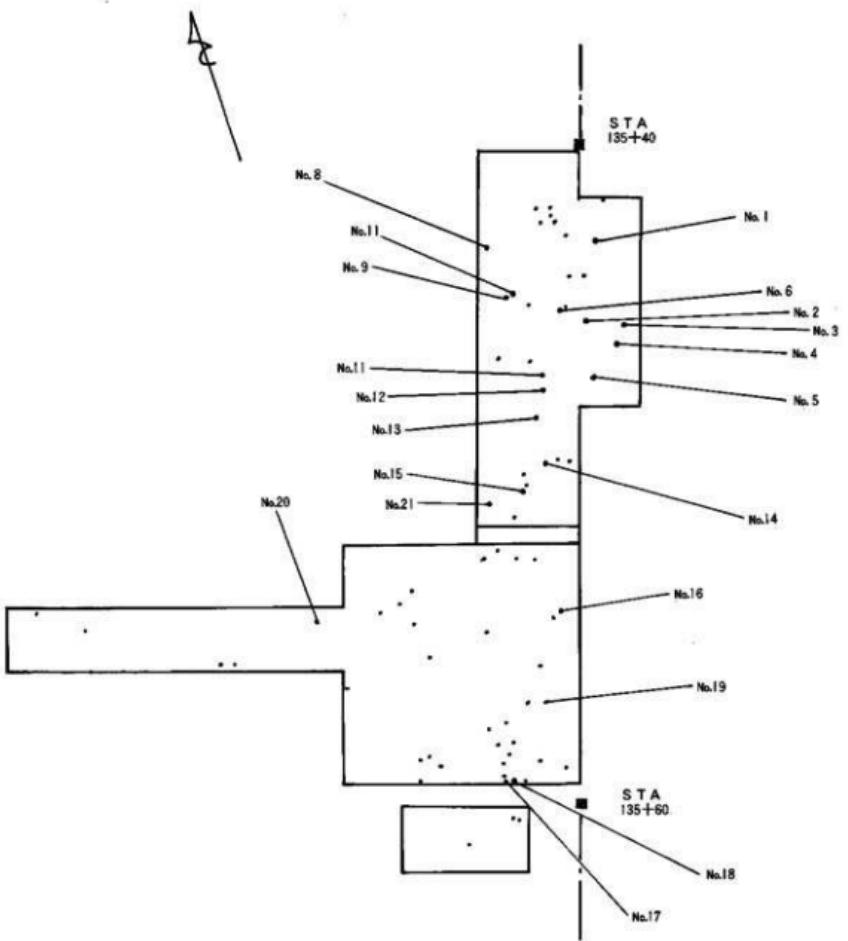
縄文土器 (第6図)

沈線文と貝殻腹縁押圧文を文様要素とする土器片数点と、押圧列点文を施文した口縁部破片1点が出土している。施文の状態から4類に分けられるが、時期差は認められず、いずれも縄文後期に比定される。

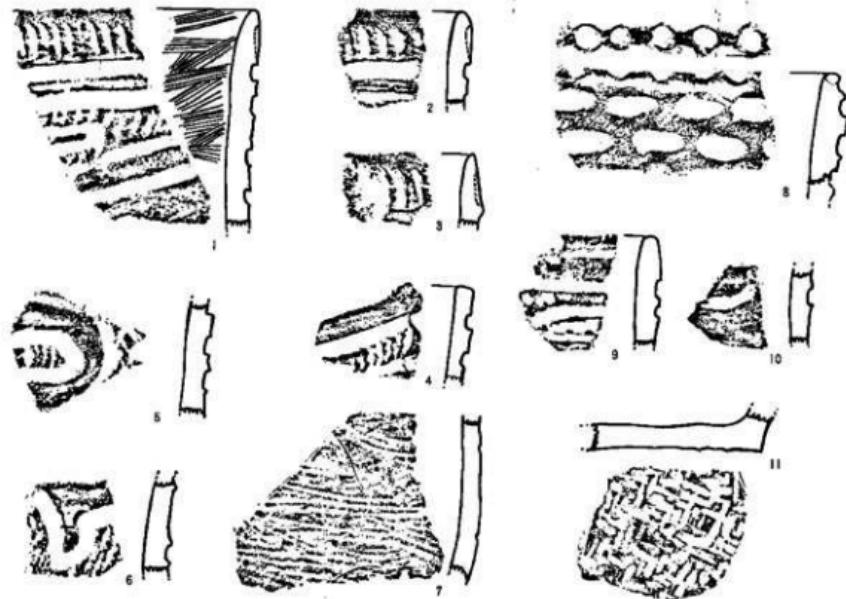
- (I) 貝殻腹縁押圧文を口縁部に施文し、頸腹部にかけては竹管乃至は棒状工具で直線と曲線を組合せた0.6cm幅の沈線文を施文し、沈線文間に貝殻腹縁による刺突文を施文したものである(1、2、3、5、6)。器内面や、文様帶の下腹部には、調整条痕がのこる。胎土に多量の石英粒を混入する。焼成は比較的良好く、色は黄褐色乃至赤褐色を呈する。
- (II) 口縁直下に二条の沈線文をめぐらし、その間に貝殻腹縁による刺突文を施文したものである。口唇は平坦であるが、山形口縁をなす。色調は赤褐色を呈する。胎土は細やかで、焼成良好(4)。
- (III) 沈線文だけを施文したものであり、貝殻腹縁による刺突文や押圧文が施文されていない。器壁断面形には(I)の土器との著しい相違は認められない。色調は灰褐色を呈する。胎土は比較的きめ



第4図 土器出土状況



第5図 A地点の遺物出土地点



第6図 A地点出土土器拓影

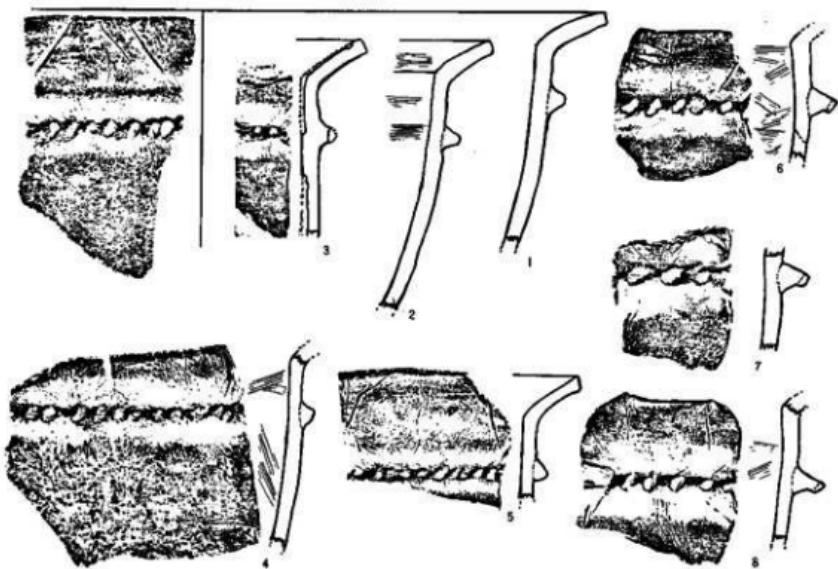
細かい。焼成度はあまり高くなく、軟質である（9、10）。

④ 口縁部に押圧列点文を施し、列点文帯の下方には沈線文が施文されるものである。口唇にも押圧文が施されるため小波状口縁を呈するものがある（8）。

網代底 平底の底面に、土器製作時に敷物に使用された葛か竹の繊物痕をこしたものである。底面からの立ち上り部分には周囲をめぐる条痕がみえる。褐色を呈す。焼成度も高く堅緻である（11）。以上の中土器は、いずれも綾町尾立遺跡出土の土器に類例が求められる。沈線文と只殻腹縁による圧痕文や刺突文を組み合せた文様構成は、小林久雄氏のいわゆる綾A式土器の範疇に属するものである。8の押点文土器は、押点文部分が肥厚し、一種の縁帯を形成している点、佐賀町坂の下遺跡の土器に類例が求められる。ただ、坂の下でも尾立でも押圧文は縦位に施文される例が多く、横に施文された本例はやや趣を異にしている。口唇に押点を施し凹凸のある口縁を形成する例は、尾立出土の土器の中に多く見かけるところである。沈線の文様構成に直線化の傾向がみられることや、渦文が萎縮していることなど綾式土器の中でも後出の型式と考えられる。

弥生式土器（第7図）

出土した土器は磨耗細片化したものが多く、完形品はもとより器形を復原できるものはほとんど



第7図 出土土器拓影

なかつた。その中で、J-12・13トレンチからは、比較的まとまつた破片が出土しているのが注目される。

變形土器

J-12・13トレンチから出土した土器は、口縁がくの字に外反して開口する口縁を有し、口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付けた變形土器である。三角突帯には範状工具で斜行する刻目を施している。刻目は、一般に1~1.5cmの間隔でもって浅く斜めに押圧氣味に施文している。このため、中には結繩状を呈するものもみられる。破片が小さいために断定できないが、胴張りは小さく、突帯からゆるやかな傾斜で底部へ細まる器形をもつものと考えられる。口唇はナデ調整されているため平坦で断面形は角形を呈する。器壁は内外面ともに化粧土の剝離が著しく、胎土に含まれる砂粒のザラつきがある。内面にナデ調整あり。個々の土器片には突帯の高さや刻目間隔に若干の相違が認められるが同型式の土器と解される。器面に刷毛目痕のみられるものもある。色調は褐色乃至赤褐色。焼成は良好である。

以上の變形土器は、県内では、佐土原町中溝遺跡出土の土器に類例を求めることができる。中溝遺跡の土器にくらべて、口縁屈折部の内面稜線がゆるやかになっているが、器面調整にみる口縁部のヨコナデ、下腹部の刷毛目調整痕や、胴張りが小さくゆるやかに底部へ細まるところとみられる器形などは、中溝出土の土器に共通するところであり、両者の類似性が指摘できる。

口縁がくの字形に屈折外反し、頸部直下に刻目突帯をめぐらす土器は、高千穂町三田井、宮崎市

加納、宮崎市曾井、宮崎市浮ノ城などに出土例がある。そのほか鹿児島県山口遺跡や、成川遺跡の菱形土器の中にも類例をみることができる。いずれも中期後半に比定されている。これらの類例から、丸谷の菱形土器もきわめて近い時期が予想される。断片ながら、菱形土器の破片が共伴していることはそれを裏付けるものではあるが、底部の中に擦の張り出した平底乃至揚げ底部が出土していることや、环の受部に屈折し稜角のみられる高塔形土器破片を伴っていることからすれば、むしろ時期的には後出に属するものであろう。

注1 石川恒太郎“佐土原町中溝遺跡調査報告”宮崎県道路公社 47年

田中 茂 宮崎県出土の丹彩袋状口縁菱形土器について”宮崎県総合建物館研究紀要No 3 49年

5. 結語

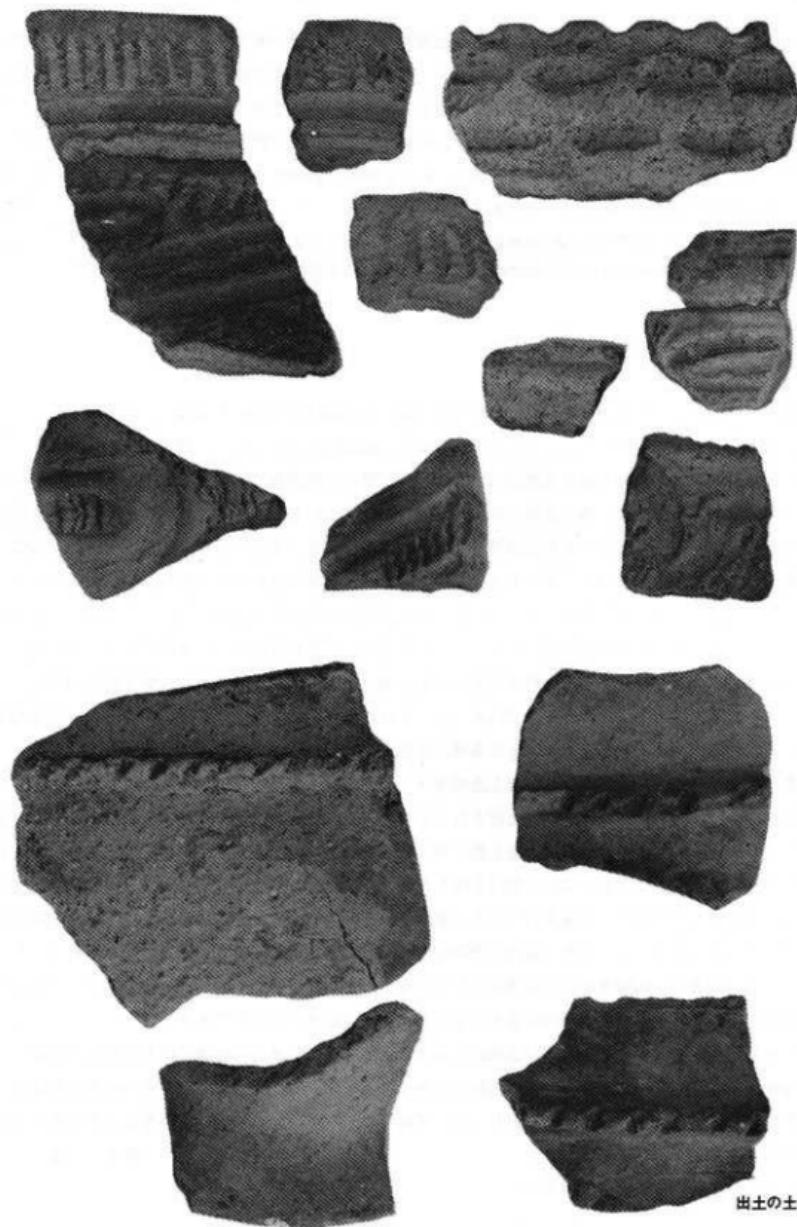
都城地区における弥生文化については、昭和39年度に第3次日向遺跡総合調査による都城市早水の年見川遺跡の発掘調査が行なわれているだけで、組織的な調査例はほかになく、地域的に変遷をたどるにはいたっていない。本遺跡も縦貫道建設に伴う埋蔵文化財の分布調査で初めて遺跡としてとりあげられたところで、それも当初は、地下式横穴の包蔵地と考えられていたようだ、遺跡の性格は今回の調査まで明らかではなかった。近くに志和池古墳群や下水流古墳群をひかえているだけに、或は、地下式横穴が埋蔵されているのではないかと期待もなくなつたが、前記の遺跡はいずれも丸谷川の東岸台地上にあって、西岸に広がる丸谷地区には、これまで地下式横穴の発見例がなかったところだけに、地下式横穴存在の可能性はないものと予想された。しかしながら、旧志和池地区から高崎町横谷に至る丸谷川流域の古墳群の分布を見ると、その対岸に広がる丸谷地区には、それらに関連した集落跡等の存在については若干の可能性の予想される地域ではあった。それだけに、今回の調査は、この地域における古墳期や、それに先行する時期の集落跡等生活遺構の存在を明らかにする意味でも重要であった。

調査の結果は、先述の通り、特に顕著な遺構を伴うものではなかつたが、縄文式土器と弥生土器の包含層が検出された。縄文土器は後期に比定されるものであるが、出土状況が局地的で、二次的堆積による包含と見なされるものであった。弥生土器の方は、くの字形に外反する口縁に特徴があり、口縁直下に一束の三角突帯をめぐらし、これに刻目を施したものであった。形態から宮崎郡佐土原町中溝遺跡の土器に後出するものであり、下城式にはじまる東九州の刻目突帯文土器の伝統をうけた中期の土器形式と考えられるものであった。従来、県内の中期弥生土器は、宮崎平野を中心に分布が求められていただけに、今回の調査で、内陸部まで分布圏の広がりが確認できたことは、南九州の山口式や一ノ宮式との関係も含め、東九州の中期土器の伝播を追求するうえで注目される資料である。

丸谷第II遺跡は、遺構を伴なわない局地的な包含層であったが、丸谷川流域に広がる段丘台地に、縄文後期から、弥生中・後期にかけて断続的ではあったかもしれないが生活遺構存在の可能性を確証づけたわけで、今後、この地域の開発に際しては、埋蔵文化財への十分な配慮が必要なことを示唆したものであった。

(茂山 譲)

注1 石川恒太郎“宮崎県の考古学”1968



出土の土器

丸 谷 第 1 遺 跡

都 城 市 丸 谷 町

目 次

1. 位置と環境	119
2. 調査の経過	119
3. 調査の概要	120
4. 遺構と出土遺物	124
(1) 1号住居跡	124
遺 物	126
(2) 2号住居跡	132
遺 物	132
5. 住居木材炭化物の樹種	140
(宮崎大学農学部講師 大塚 誠)	
6. 結 語	142

挿 図 目 次

第1図 地形図及びトレンチ配置図	121
第2図 B-5区西壁E-2区北壁土層図	122
第3図 1号住居跡実測図	125
第4図 1号住居跡出土土器実測図1)	127
第5図 1号住居跡出土土器実測図2)	129
第6図 1号住居跡出土土器実測図3)	130
第7図 1号住居跡出土遺物実測図	131
第8図 2号住居跡実測図	133
第9図 2号住居跡出土土器実測図1)	134
第10図 2号住居跡出土土器実測図2)	135
第11図 2号住居跡出土土器実測図3)	136
第12図 2号住居跡出土土器実測図4)	138
第13図 2号住居跡出土遺物実測図	139

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景	144
図版2 (1) 1号住居跡	145
(2) 2号住居跡	145
図版3 (1) 1号住居跡南東隅	146
(2) 1号住居跡	146
図版4 (1) 2号住居跡	147
(2) 2号住居跡南西隅	147
図版5 (1) 2号住居跡北東隅	148
(2) 2号住居跡南西隅	148
図版6 1号住居跡出土遺物	149
図版7 1号住居跡出土遺物	150
図版8 1号住居跡出土遺物	151
図版9 2号住居跡出土遺物	152
図版10 2号住居跡出土遺物	153
図版11 2号住居跡出土遺物	154

1. 位置と環境

遺跡の所在する都城盆地は、西は霧島連山、東は南那珂山地などに囲まれた盆地である。盆地中央を南北に貫流する大淀川は、霧島山系に源を発する高崎川、木ノ川内川、丸谷川、庄内川、南那珂山地に源を発する東岳川、花木川、沖水川、年見川など支流と合流しながら北上している。この大淀川を境として東、南那珂山地の西側の一帯は低位段丘疊層があり、西の霧島連山の東麓の一帯、および盆地南一帯は姶良火山碎屑流（シラスおよび灰石）の台地がある。これらは、大淀川およびその支流に開析され、その細長く延びた台地は、それぞれ大淀川に向う状況を示している。そのため、盆地一帯は、その周辺は細長く延びる台地群があり、中央部の大淀川流域や、支流域一帯が沖積地となっている。

2. 調査の経過

丸谷第1遺跡は、都城市丸谷町に所在する。遺跡は、国道221号線沿い志和地より万ヶ塚へ向う中ほどで、南面して緩かな傾斜地をもち、台地端附近では標高146mになる平坦地に位置する。この地点は、経済種豚増殖センター敷地および畠地となっている。調査対象地は、自動車道路線となる平坦地の東端である。

発掘調査は、昭和52年9月19日から同月21日の3日間予備調査を行ない、本調査は同年9月26日から10月22日までの4週間行なう予定であったが、住居址2基が検出され、期間延長を行なう。本調査は9月26日から10月31日の計31日間実施した。

以下発掘調査経過は次の通りである。

予備調査（9月19日～9月21日）

調査は、分布調査の際土器片が採集されていた標高156mの台地土から行なう。2m×2mの試掘坑を10ヶ所近く設定し調査したが、包含層など見出せなかった。台地土の層位は、表土、漆黒土層、御池軽石層となっている。御池軽石層は70cm程度で始まっている。この層は数mの層をなしてて、この層は、(注1)一般に無遺物層である。

21日、台地端の平坦地へ移動する。2m×2mの試掘坑を2ヶ所で調査した結果、深さ100cm前後、第Ⅳ層ボラ混黒色土層にて土器片が出土し、この層が包含層と考えられた。細片のため詳細については不明であったが、時期は弥生あるいは古墳期のものと推定された。本調査はこの周辺を行なうこととした。

本調査（9月26日～10月31日）

本調査は、9月26日から実施した。まず、自動車道中央線より東を行なうこととし、幅4mのトレーニングA・Bを設定した。土器片が、深さ100cm前後、第Ⅳ層ボラ混黒色土層よりまばらに出土するが、遺構等は検出されなかった。

29日より、中央線より西、種豚増殖センター敷地内にも東より幅4mのトレーニングC・D・Eを設定し南より4m間隔で1・2……区と区分して、まず、E-1・2・4・7、D-8区より調査を進める。30日、A・Bトレーニングの調査は一時中断する。出土遺物は、平板で出土地点を30分の1でとり、特徴ある遺物はレベルも記録する。E-1・2・4・7、D-8区ではそれぞれ遺物の出土をみる。E-7で

は、190cm×50cmの長方形プラン土壌を検出するが、この土壌は、サツマイモなどの後世の貯蔵穴であった。10月1日、E-7の出土遺物を10分の1で図面をとり遺物をとり上げる。4日、E-1・2の遺物を取り上げ、出土地点は平板で50分の1で記録する。包含層は深さ50cm前後、第IV層ボラ混黒色土層であるE-8の南東隅に、御池軽石層直上において、直角をなすプランの一部が検出される。5日、Bトレンチのみ10cm下げるが遺物出土せず。A・Bトレンチ調査打ち切る。E-1・2においても掘り下げるが遺物は出土をみないので、6日終了し、7日より層位図を記録する。8日、D-9西壁層位図を10分の1である。第IV層ボラ混黒色土層上に、厚さ10cmくらいのボラ混入度の密な層が確認される。

10月8日までの調査は、遺物の遺構の検出に努めた。遺物については、E-1・2・4区C・D・E-7・8・10区において多くの遺物の出土をみ、随時、10分の1ないし20分の1、50分の1で出土地点を、層位図については10分の1で記録してきた。遺物の分布は、特にC、D、E-7・8・10区予想され、その包含層、周辺土器出土層が落ち込んでいたので、下部に遺構が存在すると考えられた。以後、調査区を拡張し遺構の検出に重点をおくる。

11日より調査区拡張を行なう。14日、D-7にて炭化材が集中して検出される。15日、C・D-10・11区にて遺構の輪郭を第VI層黒色土混御池ボラ層直土において検出する。長さ9m近くに達する。この遺構内において遺物は出土する。6・7・8区においては、明確な輪郭は検出しえないが、遺物出土地内のみ掘り下げる。18日、10・11区、7・8区における遺構の全体の輪郭は検出しないが、住居跡と考え、7・8区の遺構を1号、10・11区を2号と仮称し記録する。19日、1号遺構内にて朱の小片出土する。D-8、E-7・8にて、東西および南北に走向する輪郭を検出。20日より、日高正晴・茂山謙・田ノ上哲調査員参加する。21日、2号遺構は、1辺9mほどの隅丸方形堅穴住居であることが確認される。22日、1号遺構、1辺約7mの方形プランの堅穴住居であることが確認される。1号遺構北東隅北100cmの位置に径80cmの大ピットを検出、遺物は出土せず。2号遺構の北東輪郭の確認は床面追求することにより行なうこととする。線刻のある壺が直立、横位の甕が出土する。北東輪郭同日確認する。

24日より、遺物の実測と遺構・遺物検出を併行して進める。26日まで、遺構のプランをほぼ確認する。27日より、遺物、遺構および層位図の実測を集中的に行なう。30日、2号実測終了、31日1号実測終了し、全ての調査を終了する。同日、器材等を撤収する。

注1 御池軽石層は、通称御池ボラ層、単にボラ層と呼ばれる。故和島誠一氏によると鹿児島県末吉町大塚で、縄文後に比定されている岩崎上層式土器が御池ボラ層上部より出土したことである。

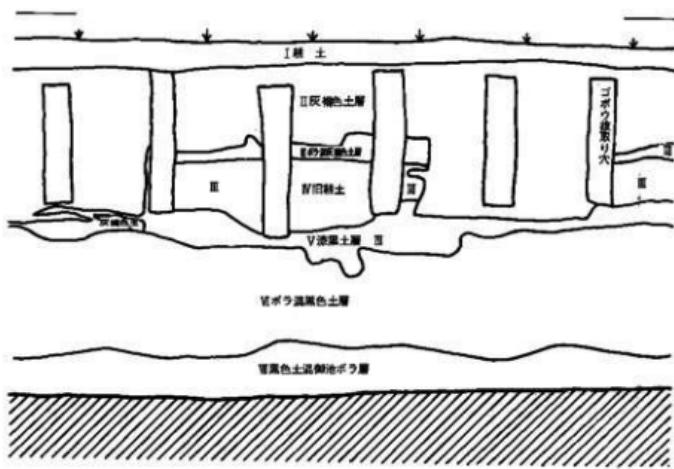
3. 調査の概要

発掘調査は、自動車中央線を境として東に幅4mのA・Bトレンチ、西にC・D・Eトレンチを設定し、南より4mごとに1・2……区とした。A・Bトレンチ1・2・3区、B-5・7区を調査したが、土器片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。A・Bトレンチの基本層序は第2図のとおりであった。遺物が出土するのは、第VI層ボラ混黒色土層で、深さ100cm前後であった。A・Bトレンチの設定地は畑地であったが、60cm前後盛土されており、耕作により遺物包含層に全く影響を与えていない。

出土遺物は、すべて細片であり、また出土状況もまばらであることから、A・Bトレンチの地点は、遺跡の周辺部にあたると考えた。遺物では、複合口縁、外反する口縁、口縁端外側に微隆起をもつ土器



第1図 地形図及びトレンチ配置図



第2図 B-5区西壁(上)E-2区北壁(下)土層図

などが出土している。

自動車道中央線西、つまり種豚増殖センター敷地内には東より幅4mのC・D・Eトレーナーを設定し南より4mごとに1・2・3…区とした。調査区は、C-5~7、9~11、D-5~11、E-1・2・4・5~7、10であり、その他一部拡張した部分もある。本調査の成果の1つである住居2基が検出されたのは、C・D・E-5~8、C・D・E-9~11の2区である。5~8区は1号住居跡、9~11区は2号住居跡として記録した。E-1・2・4においては、遺構は検出されず、出土遺物も少なかったが、包含層を確認できた。

E-1・2区の層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層灰褐色土、第Ⅲ層漆黒土層、第Ⅳ層ボラ混黒色土層、第Ⅴ層ボラ混黒色土層（やや褐色味おびる）、第Ⅵ層黒色土混御池ボラ層（硬質）、第Ⅶ層御池ボラ層となっていて、この層が遺跡の基本層序である。遺物包含層は、第Ⅳ層ボラ混黒色土層で、後世の影響を受けていはず、遺物の出土状態は良好で、ある程度まとまりを示している。しかし、復原できる資料は出土していない。

E-1・2・4の出土遺物は、土器片のみで、單口縁壺、複合口縁壺の口縁部、變形土器などが出土が出土しているが、器種・器形は住居跡内で出土した遺物にすべて含まれているもので、住居址と同一時期のものばかりであった。

I号住居跡は、台地端より北へ29mの位置にあり、平面プランは1辺約7mの略方形である。北辺は東-西の線上にある。三ヶ所に細長い入り込み部のある特異な竪穴住居で、周囲にベット状遺構をもっていた。平面プランの確認は、竪穴内の埋土とほぼ同色なため、第Ⅵ層黒色土混御池ボラ層の直土でしか行ない得なかった。住居跡は、土層が盛土されていたことと、敷地内が耕作地でなかったため、竪穴住居のプランはもちろん、竪穴内の埋土までよく残存していた。

II号住居跡は、I号住居跡の北6.5mの位置にあり、平面プランは1辺約8mの隅丸方形である。北辺は、西南西-東北東の線上にある。2ヶ所に1号住居跡と類似した入り込み部をもつ竪穴住居であった。2号住居跡の平面プランの確認は、まず西辺を第Ⅵ層直土上で行なった後、北・東辺は床面より追う方法をとり、ある程度、当時の壁面を検出し得た。残存度は、南西隅を後世の貯蔵穴で一部カットされた以外は1号と同じであった。

出土遺物は、土器、石器、鐵鏃、管王、小玉などであるが、1号住居跡においては、鐵鏃、小玉出土した他、朱なども検出され、2号住居跡では、ほぼ完形となるものが6個体、ほぼ床面上から出土している。出土土器は、弥生終末期に属し、東九州系・南九州系の土器が混在している。石器では、石庵丁、砥石が出土している。

また、1号住居跡北方130cmの位置に径90cm、深さ60cmの略円形土壙、2号住居跡南西隅より80cmの位置に70cm×130cm、深さ30cmほどの長方形土壙を検出する。この両土壙は、後世の貯蔵穴とは異なり第Ⅵ層あたりより掘り込まれている。出土遺物がなく、時期不明である。両土壙は、平面プランは異なるが、床面に1ピットをもつ共通性がある。あるいは、各住居跡に伴なうものかもしれない。

4. 遺構と出土遺物

(1) 1号住居跡（第3図：図版2・3）

1号住居跡は、台地端より北へ約29mの位置にある。住居跡の平面プランは略方形であるが、三ヶ所に細長い入り込みのある特異な竪穴住居であり、また、四周にベッド状遺構をもっていた。

住居の東辺、北辺はほぼ直線で7.05mを計測できる。西辺、南辺は中央部で80cm膨みながら弧を描き、南西隅はカーブを描いている。三ヶ所の細長い入り込みは、東辺、北辺、西辺にあり、それぞれ南東隅より約200cm、北東隅より165cm、北西隅より205cmの一方に偏った位置にある。入り込み部は幅30cm、長さ105cm～115cmある。四周を巡っているベッド状遺構は、幅150cm前後あり、南および北の二ヶ所で切断されていて、「L」字状のベッド状遺構が2ヶ所にあると見ることができる。ベッド状遺構と床面との比高差は、南において約30cmあるが、北へ行くに従い小さくなり、約10cmとなり、ベッド状遺構の端はあまくなる。先の細長い入り込み部の先端は、ベッド状遺構端までは延びていない。

南東隅に、幅10cm、深さ10cmほどの小溝が壁および入り込み部に沿って巡っていた。幅、深さは若干異なるが、同様の小溝が北東隅、北西隅および南壁の一部にもあり、あるいは、ベッド状遺構上の全て壁に沿って巡っていた可能性がある。

平面プランを確認できたのは、第VI層黒色土混御池ボラ層であったが、層の観察より壁高は、ベッド状遺構より40cmはあったものと推定される。周壁は、80度前後の角度をもち立ち上がっていた。

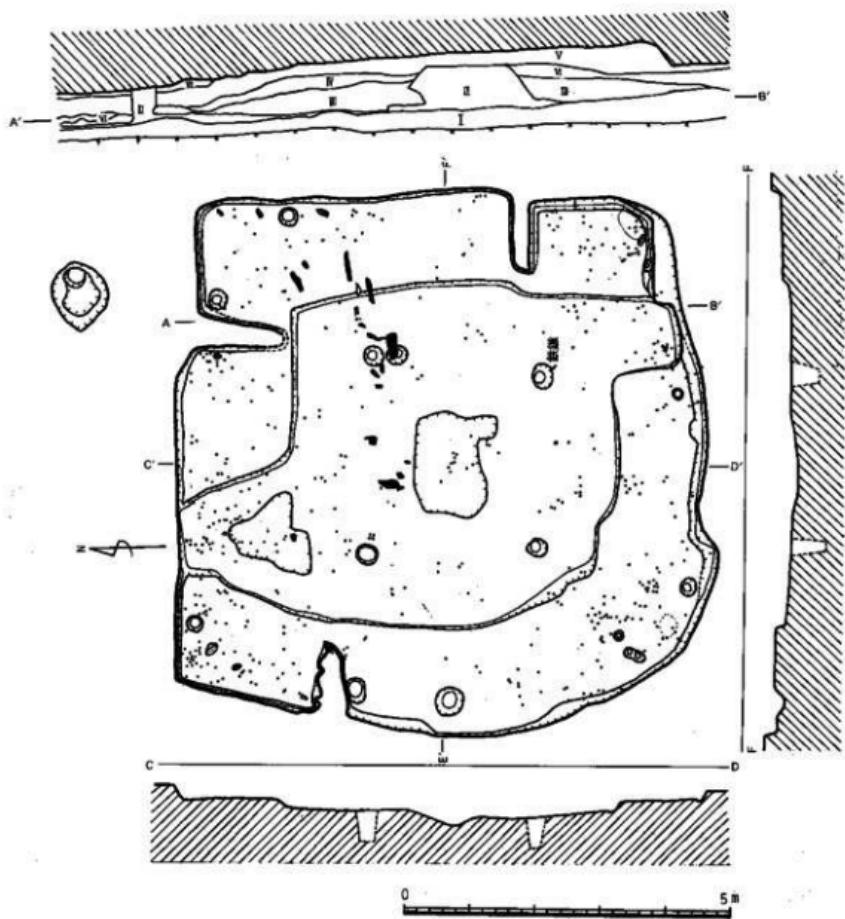
主柱穴と考えられるピットは、5個（うち2個は近接している）が壁より2.5m程内に方形に配置され、ピット間は、2.7m～3.1mある。また、ピットは、細長い入り込みのほぼ延長線上にある。ベッド状遺構が切断している南東部には、切断部をはさみ、壁に沿った小ピット2個があり、径15cm、深さ東16cm、西30cmで、2小ピット間は200cmである。この位置が入口かと思われる。その他、周壁に沿った径35cm前後、深さ10cmの浅い掘り込みが7ヶ所で見い出された。

炉跡としての明確な遺構は検出されなかったが、住居跡中央部に100cm×148cmの略隅丸長方形、深さ20cmの深い掘り込みがあり、中よりわずかの焼土があった。この掘り込みが炉の機能をもっていたと考えてよいかもしれない。竪穴西部においては、朱片が出土している。

住居跡北半に、ピット方向などに向った炭化材がほぼ床面上で検出された。この炭化材は、竪穴住居家屋に使用されていたと考えられ、樹種はクリ、コナラ、シャシャンボとの鑑定がなされた。この竪穴住居の屋根組みは入母屋造りだったと思われる。

遺物は、竪穴住居周辺部、特にベッド状遺構上に集中しており、中央部床面をより東西のベッド状遺構上は少ない。東南隅のベッド状遺構上において、管玉、ガラス製小玉、入口付近の床面で鉄鎌が出土している。住居跡内外出土遺物は、ほとんど竪穴埋土下層、ボラ混（混度やや密）黑色土層中より出土し、竪穴廃棄後およびほぼ同一時期の遺物で、弥生終末期のものであった。

I. 土	V. ボラ洞窟地表層(瓦礫層)
II. 洞窟内壁	VI. ボラ洞窟地表層(瓦礫層)
III. 洞窟底面	VII. 黒色土質洞窟内壁層



第3図 1号住居跡実測図

遺物

1号住居跡から出土した遺物は、壺、鉢、甕、高杯、手捏土器などの土器類の他、石庖丁、砥石などの石器、鐵鏃、管玉、ガラス製小玉などが出土している。

壺形土器（第4図-101～109 図6）

101・102は、頸部が屈曲し、口縁部がラッパ状ないし直線的に開き、先細りとなっている。胴部は、おそらく球形に張る胴部と推定される。胎土に砂粒含み、焼成は良い。器面には荒い刷毛目がみられる。104～107は、複合口縁である。104～106は、稜をもち、直線気味に反転する。104は特に明確な稜をもち、反転部に4単位の櫛描波状文をもつ。107は、やや内傾ぎみに反転している。口縁端は丸く仕上げられている。胎土に砂粒を含み、焼成はあまり良いとはいえない。103は口縁部が欠損しているが、胴部が球形に張り、口縁部が屈曲して外反するものと思われる。肩部に櫛描波状文がみられる。胎土に砂粒を含み、焼成はあまり良くない。108・109は、球形に胴の張る壺形土器の底部で平底をなす。

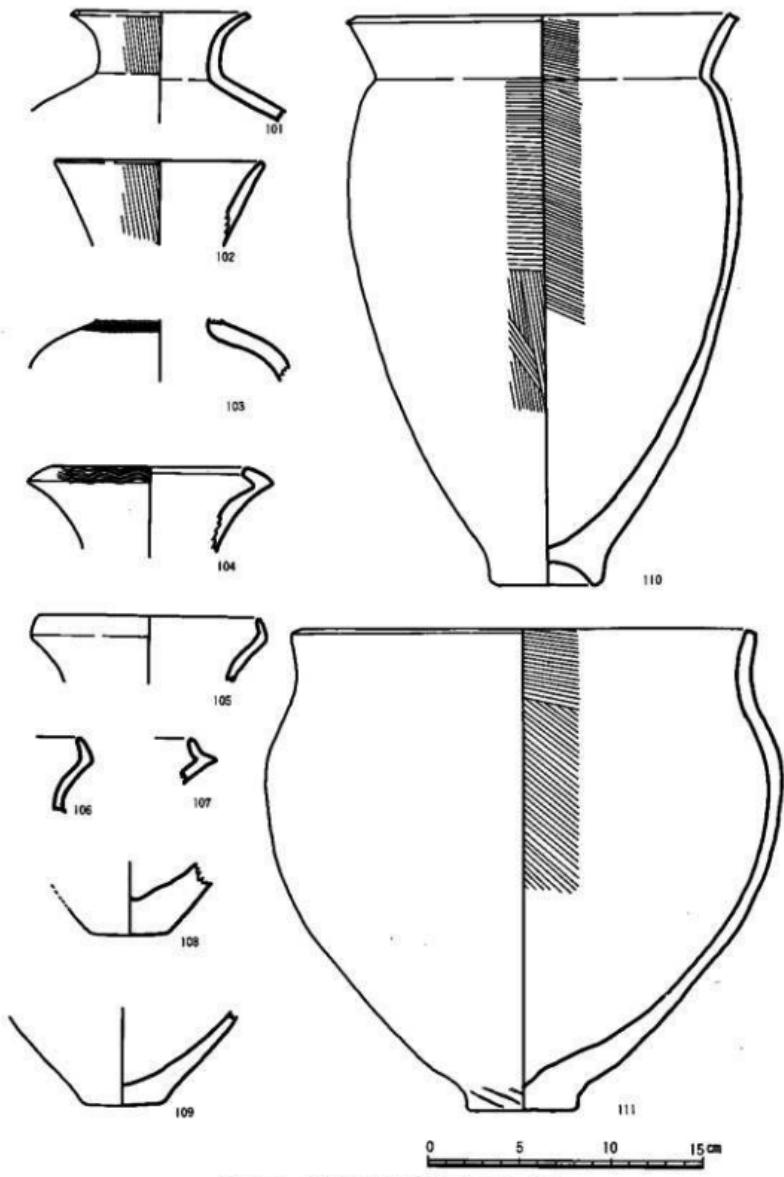
甕形土器（第4-6図-110～127 図版6・7）

110は完形甕形土器である。口縁部が直線気味に「く」の字形に外反し、肩部がやや張り、底部はあげ底である。器高は31.5cm、口縁部、胴部の径はほぼ同じで21.3cmである。口縁部の器厚は一定し、口縁端外に微隆起がみられる。底部は指頭押圧による成形である。器面は荒い刷毛目がみられる。胴部上位にはススが付着し、下位は二次加熱により赤褐色に変色している。111は口縁部が直口ぎみに外反し、胴部は球形に張り、平底である。最大径は胴部上位にあり28cmである。胴部はヘラナデ、下位にはカキナデないしヘラ削りが認められ、内面には刷毛目が見られる。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良く、内外面とも黄褐色を呈する。色調胎土は他土器と若干異なるようである。胴部上位にススが付着している。底部に一条の燃糸の圧痕が見られる。

112は、住居跡入口附近の床面にて出土している完形土器である。口縁部が外反し、肩部が若干張り、底部へ直線的に下向し、底部はあげ底となっている。器高は27.8cm、最大径は口縁部にあり24.2cmである。器壁には刷毛目がみられるが、口縁部整形が特徴的である。幅12mmの刷毛を肩部で押圧し、そのまま、上方へ移動し、文様的効果が認められ、また、刷毛押圧により、肩部に段がついている。底部端は、粘土を貼り付け、あげ底としているが、成形時の指頭痕が残っている。胴部上位にはススが付着し、下位は二次加熱により赤褐色に変色している。113～115は胴部があまり張らず、最大径が口縁部にあり、116は最大径が胴部にあり、114・116は口縁端が肥厚している。器面には内外面とも荒い刷毛目がみられる。

117～121・125・126甕形土器の底部で、平底、あげ底、脚台がある。117は底部付近にカキナデにより造り出している。胴部の張りからみると、あるいは壺形土器の底部かもしれない。

122は、口縁部が大きく「く」の字形に外反し、胴部はほとんど張らない。内面はヘラケズリされ、外面はヘラナデされ、口縁はヨコナデである。胎土に砂粒を含み、焼成は良く、赤褐色を呈す



第4図 1号住居跡出土器実測図(1)

る。この土器は、東辺東 100 cm ボラ混黒色土層にて出土し、1 号住居跡に伴なうものと思われる。

123・124は、「く」の字形の外反部に刻目凸帯をもつ土器であるが、細片のため器形は不明である。刻目凸帯をもつ土器は計 3 点出土しているが、ベッド状造構北東部において出土している。

鉢形土器（第 6 図-128・129 図版-7）

128・129は、浅い鉢に口縁部が内に稜をつくり大きく外反している。128は、口縁端に微隆起があり、底部は、丸底で若干摩滅している。内外面に炭化物が付着している。129は口縁端が肥厚している。128・129はともに胎土に細石粒を若干含み、焼成に良く、淡灰褐色を呈する。136・137は、直口半球形で平底である。内面は荒い刷毛目、口縁部はヨコナデがみられる。胎土に砂粒を含み、焼成はあまり良くない。

高環形土器（第 6 図-130～135、図版-7）

高環形土器は、直線的に聞く浅い环部に、外反しながら棱をもって立ち上がっている。器面はよくヘラ磨きされている。134は环部と脚部の接合部で、环中央には粘土を充填している。135は脚部やや下位より大きく外傾気味に聞く裾をもち、脚のやや下位に 4ヶ所に穿孔がみられる。胎土に多量の砂粒を含み焼成はあまり良くない。

沈線文土器（第 7 図-138・139 図版-7）

一部を肥厚させ、縦位の沈線が施文されている。黄褐色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。

手捏土器（第 7 図-140～142 図版-8）

丸底の鉢形土器である。140は口縁部の一部が注ぎ口様になっている。

石 器（第 7 図-147～150 図版-8）

石器は、石庵丁、砥石が出土している。砥石はいずれも床面にて出土した。

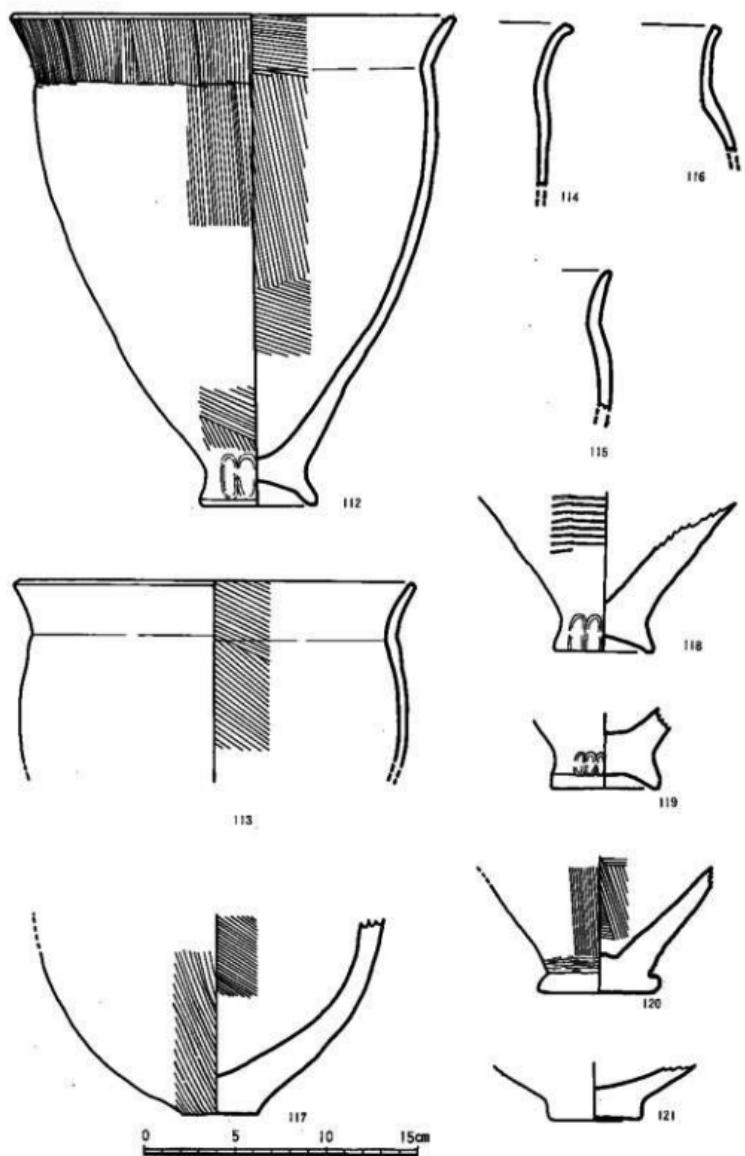
143は、外弯刃半月形石庵丁で、刃部は両刃で、穿孔は表裏から行なわれている。頁岩製である。

144・145も両刃の外弯半月形石庵丁であるが、144は片側より穿孔されている。いずれも頁岩製である。146は片面によく研磨され、一方は剥離面の一部のみ研磨している。石器の欠損品の再利用を意図していたのかもしれない。

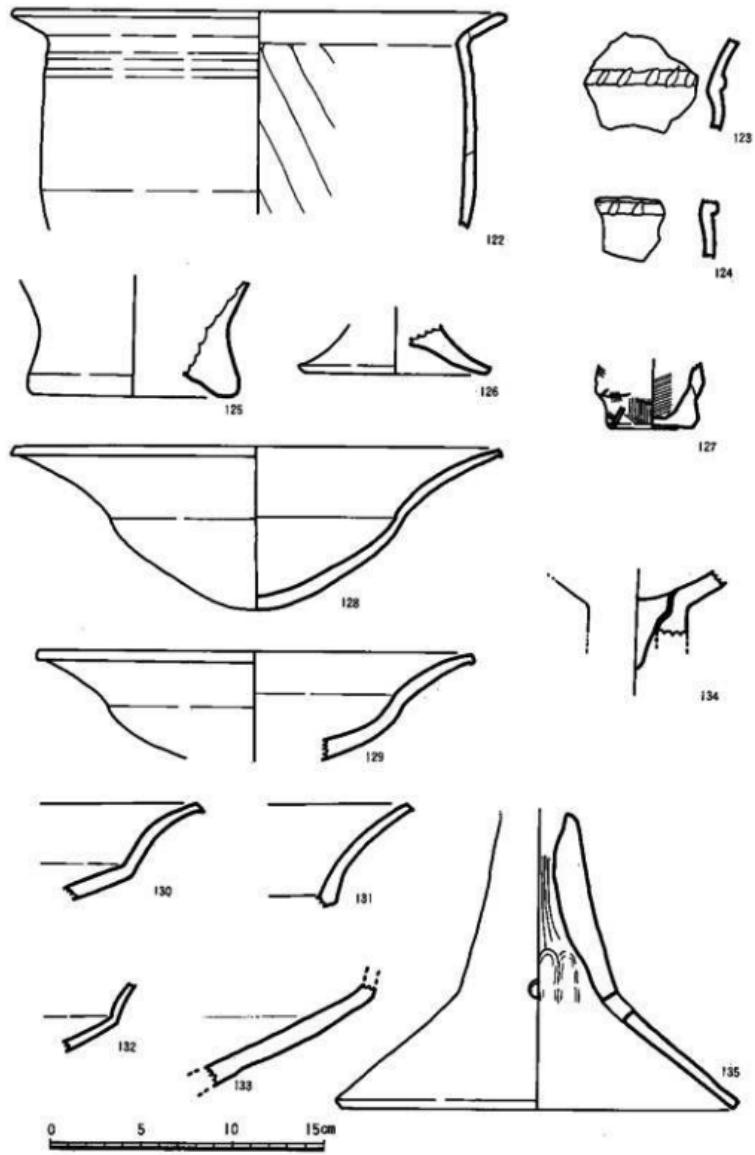
147～150は砥石で、粒子が細かく仕上げ用の砥石である。自然面は、一面ないし一部を残すのみでよく利用されている。砥石はいずれも小型であり、手持ち使用であろう。

鉄 錬（第 7 図-151 図版-8）

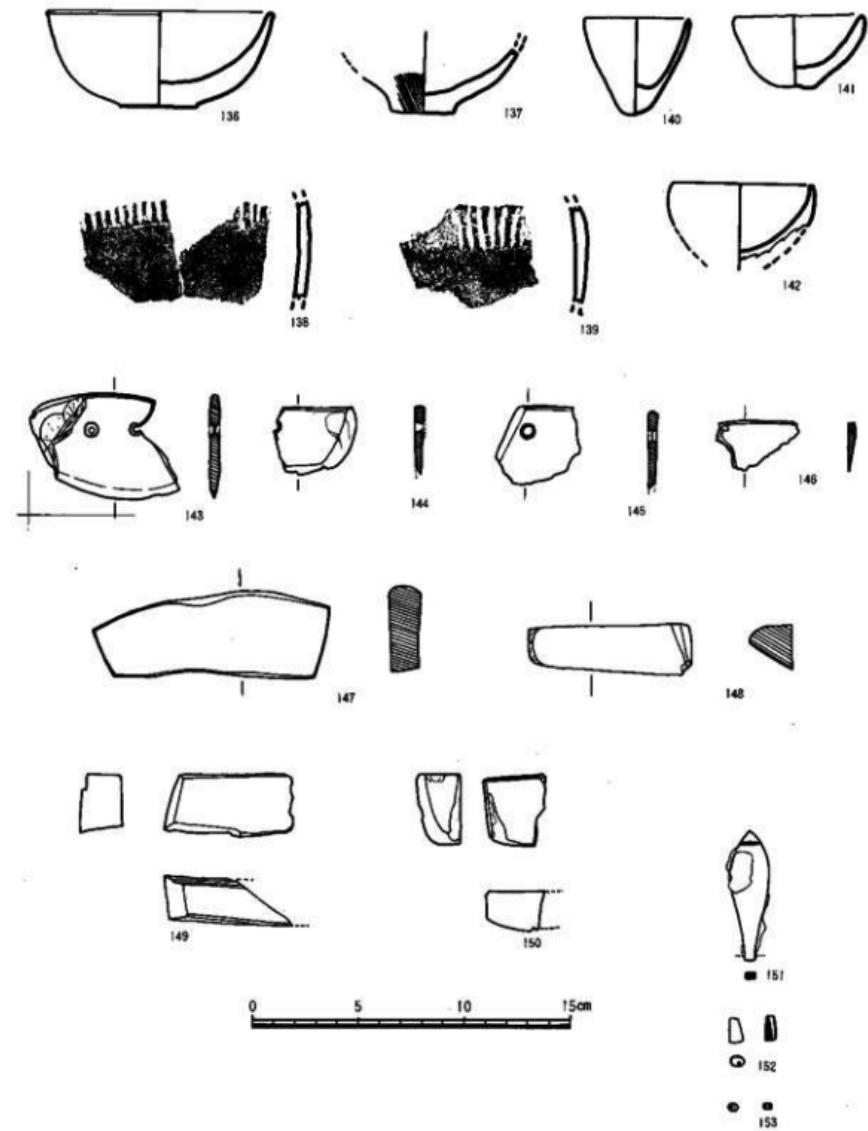
住居跡入口附近の床面で出土している。身幅 1.9 cm、身長 5.7 cm の柳葉式の鉄錬である。



第5図 1号住居跡出土土器実測図(2)



第6図 1号住居跡出土土器実測図(3)



第7図 1号住居跡出土遺物実測図

五 (第7図-152・153 図版-8)

152は石質不明で、白いまばら文様のある緑色を呈する管玉である。形はいびつであり穿孔は片側から一方に偏っている。長さ1.2cm、幅0.6cm、0.4cmである。153は青色ガラス製の小玉で径4.9mm、厚さ3mmである。

(2) 2号住居跡 (第8図 図版-2・4・5)

2号住居跡は、1号住居跡北6.5mの位置にある。住居跡の平面プランは、隅丸方形堅穴住居である。1号住居跡と類した入り込み部が2ヶ所ある。

計測値は、東辺、北辺で約8.25m、南辺で約8.16m、西辺では約7.2mで、大旨1辺8mの隅丸方形プランと見取れる。中軸線では東西98.7m、南北9.2mである。2ヶ所の入り込み部は、北辺、西辺にあり、それぞれ西、南と一方に偏った位置にある。北壁に沿って、幅10cm、深さ10cmの小溝があり、同様のものが、南壁においても検出された。

ピットは、周壁に沿って8個、中央に7個がある。周辺部のピットは、径が大きく深さは15~40cmで、中央部は、周辺部に比して径は小さく、深さは40~60cmと深い傾向が認められる。

	径	深		径	深		径	深
P 1	47	27	P 7	40×57	28	P 13	33×40	58
2	30×41	16	8	30×38	30	14	27×32	44
3	39×42	19	9	60×75	44	15	38	51
4	50	39	10	35×47	15	16	36	60
5	99×108	37	11	45	43	17	37×42	40
6	32	27	12	37	49			

表1. ピットの径と深さ(深さは床面よりの深さ。単位cm)

堅穴のほぼ中央に250cm×180cm、深さ20cm略長方形の堀り込みがある。この掘り込みの東に河原石6個の配石があったが、その性格については不明。堅穴南部には、2ヶ所の焼灰の集積部がみられた。

床面は、御池軽石層中にあり、堅穴は、1号と同じく第IV層ボラ混黑色土層より掘り込まれ、推定壁高55cm、壁傾斜角度約80度である。

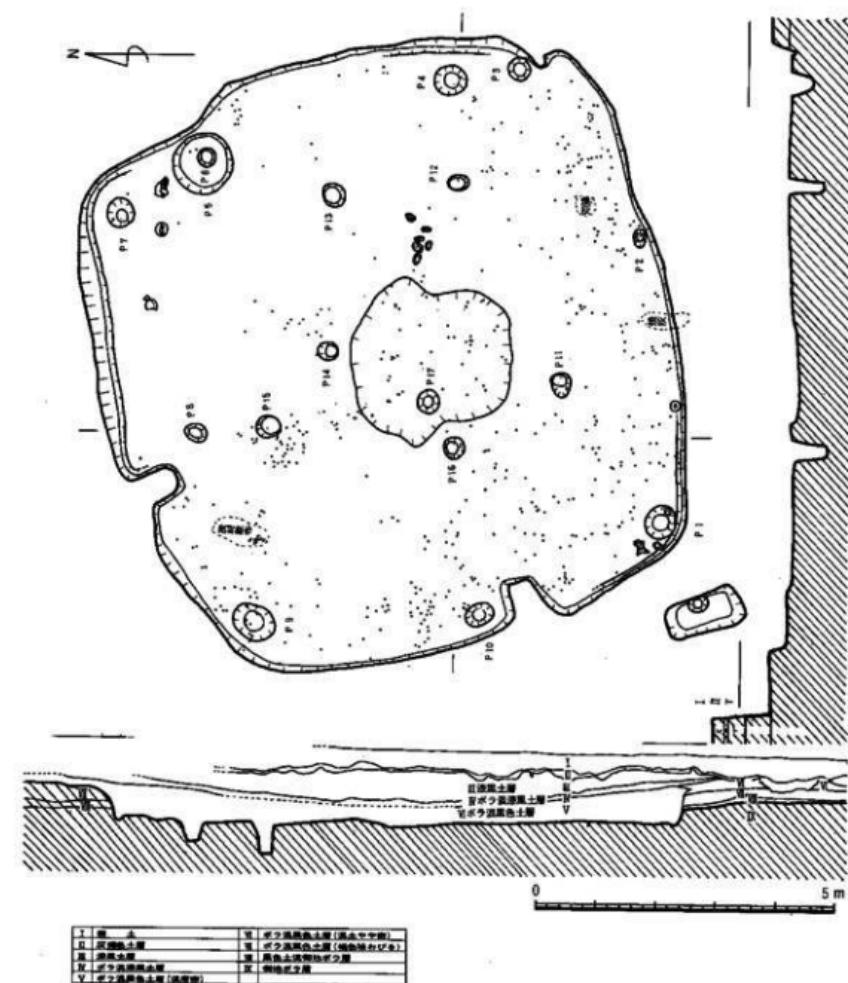
遺物は、堅穴西、南に集中しており、北東隅付近ではあまり出土していない。この住居跡からは、ほぼ完形品の壺、甕、器台等が床面に直立しない横位の状態で出土している。東北部において、壺(第9図-202)が直立、甕(第10図-216)が横位で、南西隅では壺(第9図-201)器台(第13図-247)が横位、壺(第9図-203)が南壁中ほどに沿って出土している。その他遺物の中には床面より浮いたものもあるが、ほぼ同一時期のものである。

遺物

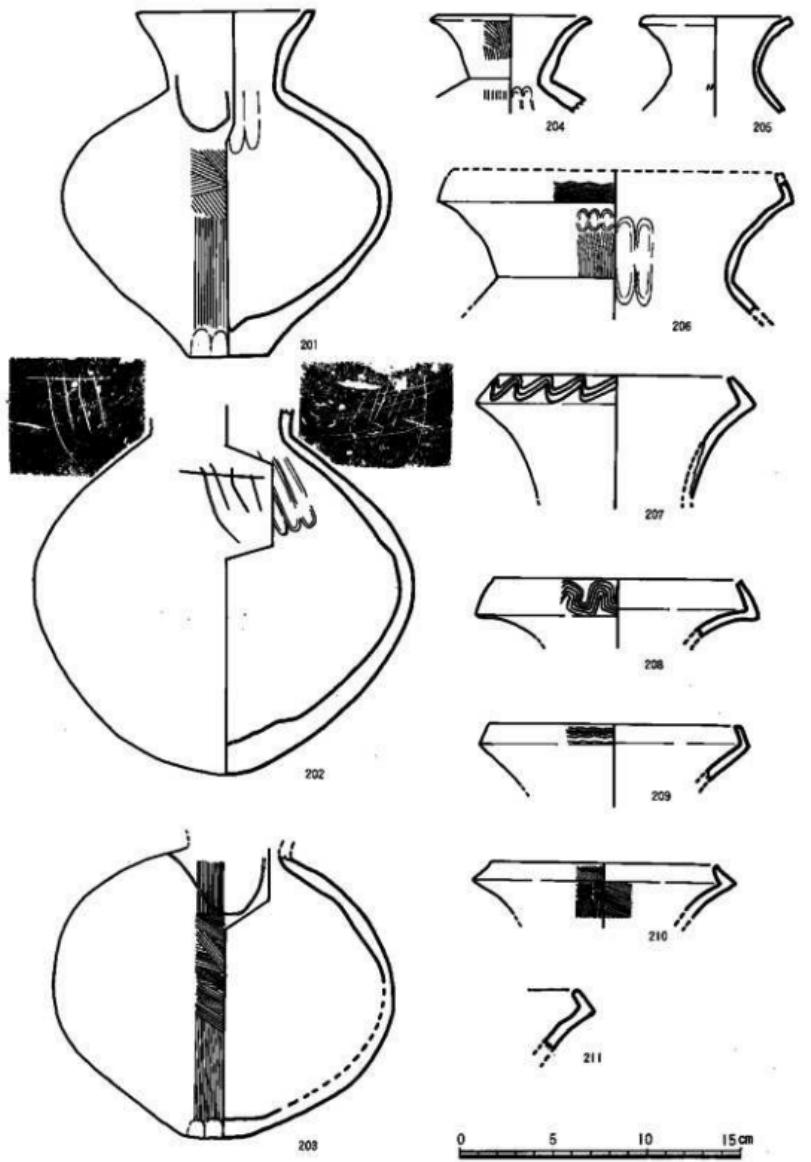
2号住居跡出土遺物は、壺、鉢、甕、高杯、手捏土器などの他、石庵丁が出土している。

壺形土器 (第9図-201~211 第10図-212・215 図版-9・11)

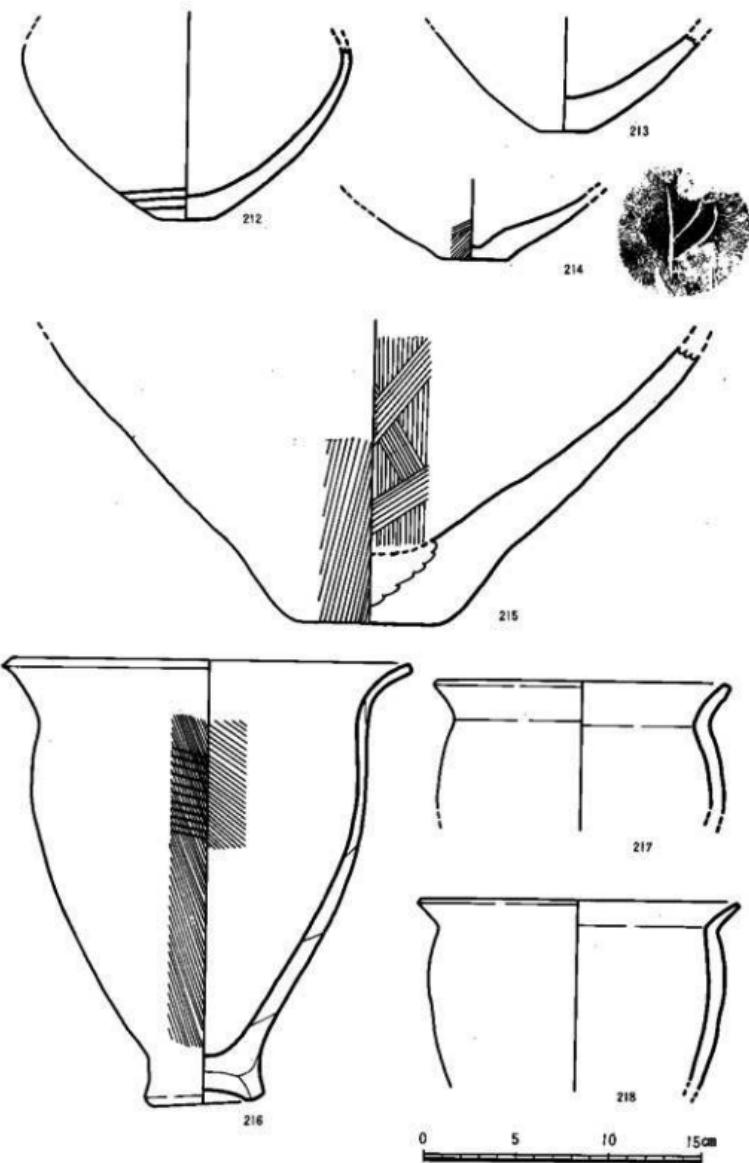
201は器高18.4cm、口径9.5cm、胴径27.5cmである口縁部は、頸部で屈曲し外反するが、途中よりやや内傾気味となる。口唇部は平坦である。胴部は強くはり、直線的に底部へ下向する。底部は、



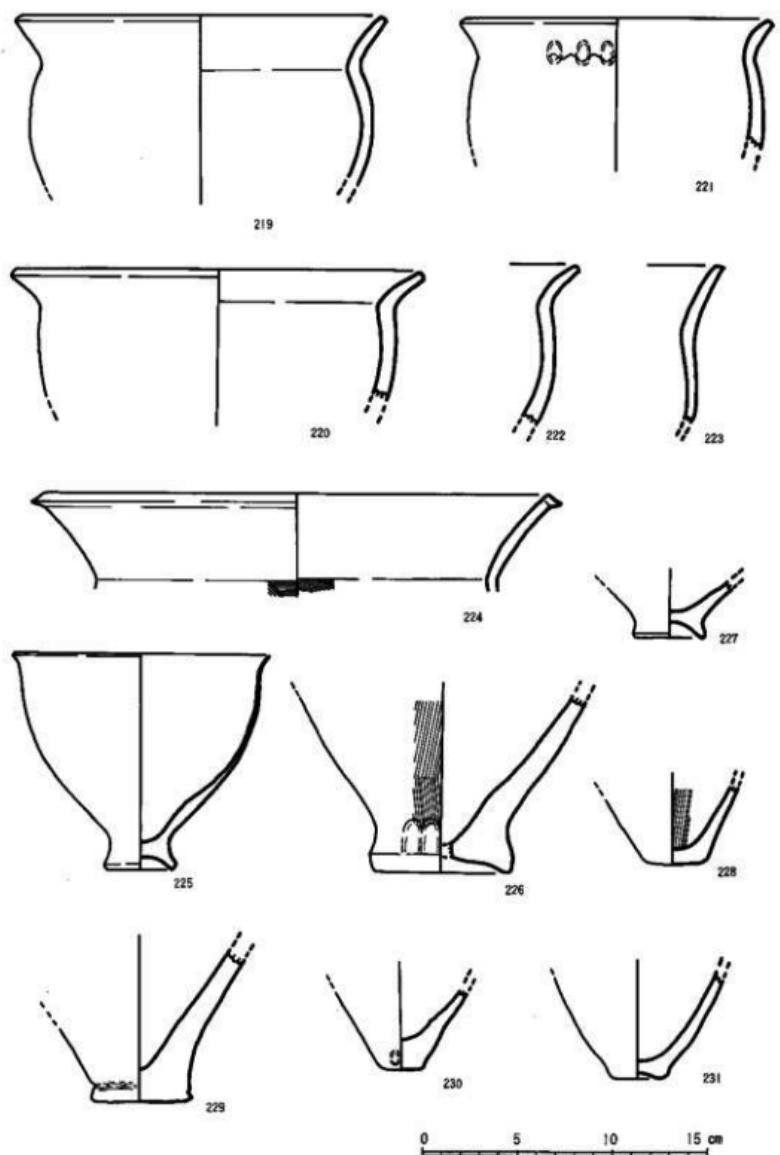
第8図 2号住居跡実測図



第9図 2号住居跡出土土器実測図(1)



第10図 2号住居跡出土土器実測図(2)



第11図 2号住居跡出土土器実測図(3)

半底であるが円ではなく、ナデカキしたあと磨り消されているが、一部棱が残っている。器面外面には刷毛目がある。肩部内面には、指頭、胴部内面には刷毛目、底のほぼ中心凹んでいる。なお、肩部に、U字形のヘラ描きがみられる。203は口縁部が欠損しているが、頸部で屈曲し外反する口縁をもつと思われる。胴部は、胴径18.2cmの球形に膨んだ胴をなし、丸底気味の不安定な平底である。底部附近はカキナデにより棱を造り出している。器面には、刷毛目がみられ、肩部にヘラ描きがある。202は胴径20.2cmの肩部ははらない球形の胴部で丸底である。口縁部は頸部で屈曲し外反している。外面には刷毛目があり、内面では、肩部に指頭痕、底部は肥厚し数ヶ所の押圧痕がみられる。線刻画が肩部に三ヶ所ある。204は球形には胴部をもつ壺形土器の口縁部で、口縁端がわずかに肥厚している。肩部内面に指頭痕がある。205は、「く」の字形に外反し、胴部は長胴形をなすと推定される。口縁端附近は肥厚し波打っている。肩部には列点文がある。

206～211は複合口縁で、口縁反転部で棱をもっている。内傾ぎみに反転している210以外は直線的に反転し、また、反転部に横描波状文がある。206は頸部のつけねでもっともしまっていて、頸部に指捺痕がある。胴部は長胴と思われるが、復原推定できる資料がない。

212～215は壺形土器の底部で、平底、丸底様平底がある。底部周辺に同心円線刻、214は底にヘラ描きがあり、内面には凹みがある。213は、内外面とも黒褐色を呈し、内面は時によく研磨されている。215は大型壺の底部である。

甕形土器（第10・11図—216～231 図版—10）

216は、口径22.1cm、器高24cmの完形土器である。口縁部は外反し、胴部はあまりはらない。口縁端には一部微隆起がみられる。底部は、粘土貼りで、成形時の指頭痕がみられる。胴部上位には、4mmの間隔の深く細い条線が斜行し、その上に刷毛目がみられる。この条線は下位にも一部みられる。下位には、カキナデ風の刷毛目もみられる。内面は、刷毛目の上をよく研磨している。外面には胴部中位上にススが付着し、下位は赤褐色に変色している。内面には炭化物が斜めに付着している。

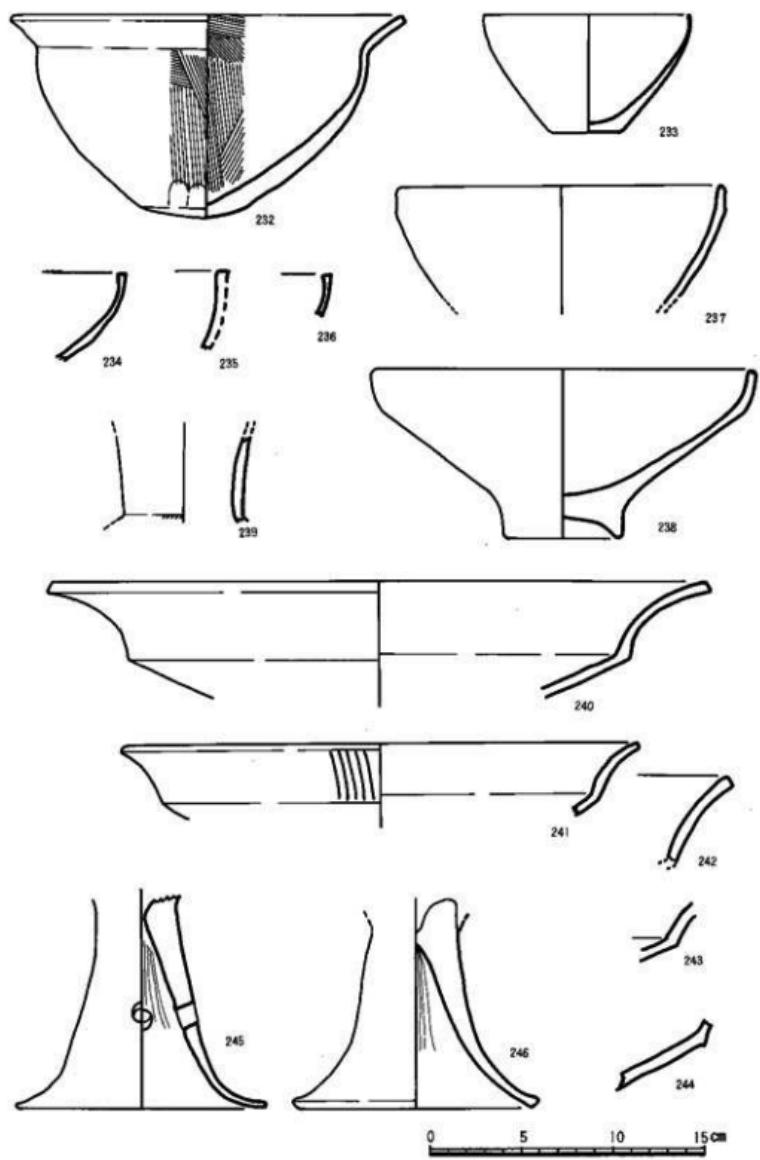
217～222は、胴部はあまりはらず、口縁部は「く」の字形に外反しているが、先細りになり、口縁端は方形に仕上げられている。221は口縁中位に粘土を貼りつけている。220は内外面ともよく研磨され焼成も良い。223・224は、口縁が直線的に外反し、口縁端に微隆起がある。全てススが付着している。

225は、口径13.6cm、器高11.4cmの小形土器で、薄く仕上げられている。口縁部は短く外反し、底部はあげ底となっている。器面はヘラ研磨され、黄褐色を呈し、焼成のよい土器である。

226～231は、壺形土器の底部で、あげ底、平底がある。

鉢形土器（第12図—232～237 図版—10）

232は、口縁部が大きく直線的に外反し、胴部は肩部に最大径をもつ。底部は、丸底様の平底で、底部付近をカキナデし、棱をついている。233～237は、内傾あるいは直口氣味の口縁をもつ小型の鉢形土器である。237以外は口唇部は平坦に仕上げられている。器面は、刷毛、ヘラ等によりよく調



第12図 2号住居跡出土土器実測図(4)

整されている。

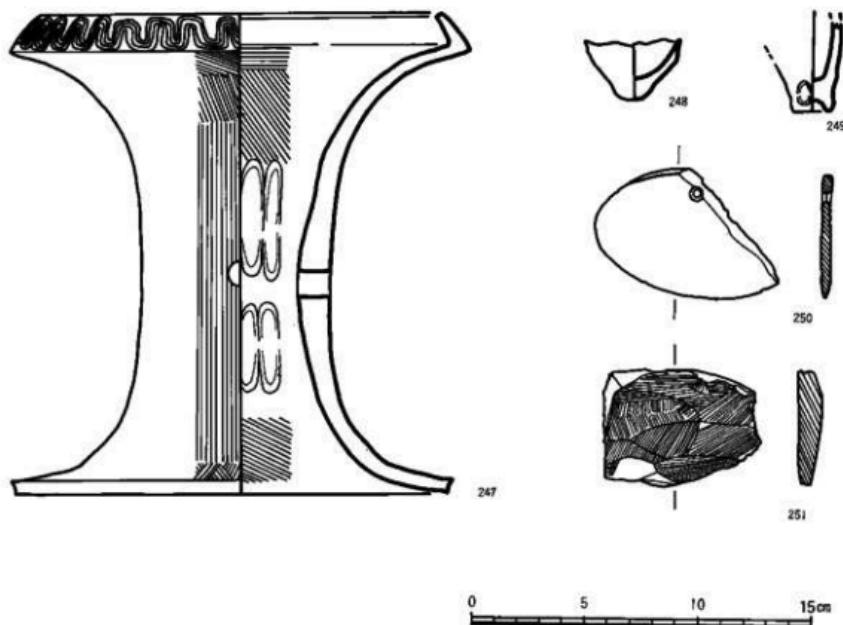
長頸壺 (第12図-239)

2点ほど出土している。径は頸部つけねで6.6cmある。タテヘラによりよく研磨され、黒褐色を呈する。頸部つけねには列点文もみられる。

高环形土器 (第12図-238~246 図版-11)

240~244の环部は、直線的に開く浅い环部に、外反しながら大きく開く口縁部をもっている。器面はいずれもヘラ磨きされ、241の口縁部には暗文がみられる。245・246の脚部は、裾がラッパ状に開き、内壁にシボリがみられる。ヘラ磨きされている。245は、脚中位に4個の円形透しが穿孔されている。246は脚先端がわずかに肥厚し浅い段がみられる。

238は、直線的に開くやや浅い环部に、口縁部がやや肥厚し逆「く」の字形に立ち上がり、「口縁端は丸く仕上げられている。底部は指頭押圧により直立気味に成形されている。环部の形態は、安国寺遺跡出土などの弥生終末の高环の环部に類似することなどから、組み合せ高环かと思われる。あるいは、脚付浅鉢とも考えられる。



第13図 2号住居跡出土遺物実測図

器台形土器（第13図-247 図版-9）

ほぼ完形の器台で、中央がすぼまり、上下がラッパ状に開いている。口縁部は、棱をつくり反転し、反転部に4単位幅6.5mmの横描波状文が施文されて、脚部端は、浅い凹線がある。脚中位に径10mmの円形透しが4ヶ所で穿孔されている。内壁中位には、上下よりの指押えがあり、外面は丁寧な刷毛目がみられる。口縁部内径17cm、器高21.2cmである。

手捏土器（第13図-248・249 図版-9）

丸底の鉢形土器である。砂粒をわずかに含み、焼成の良い黒灰色を呈する。

石器（第13図-250・251 図版-11）

250は、頁岩製の外弯半円形の石庵丁で、2ヶ所で穿孔されている。刃は両刃で、穿孔は表裏より行なわれている。背部および全面よく調整されている。251は石器の未製品で、片面は平坦に、一方は、中央は厚く、両端は先細りに研磨されている。石材は粘板岩である。

(面高 哲郎)

5. 住居跡木材炭化物の樹種

住居跡より採取した木材炭化物を、落射照明顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて観察し、樹種の鑑定を行なった。その結果、次の3種を認めた。

クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*)

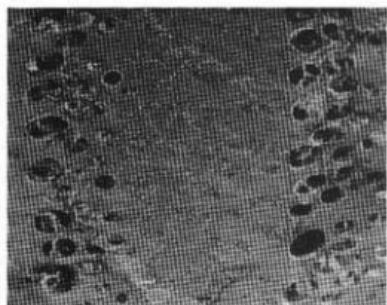
コナラ (*Quercus serrata Thunb.*)

シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum Thunb.*)

これらの木材は、住居小屋組に使用されたものと、考えられるが、現在の建築用材として、常用されるスギ、ヒノキ等の針葉樹は、全く見られず、広葉樹のみが認められたのは、県内住居跡での調査例と同様であった。

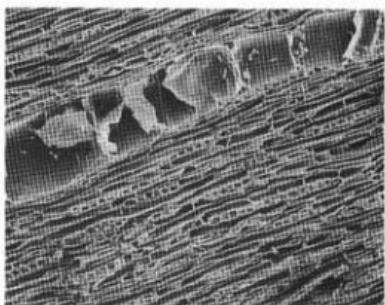
(大塚 誠)

ク リ



横断面（木口面）

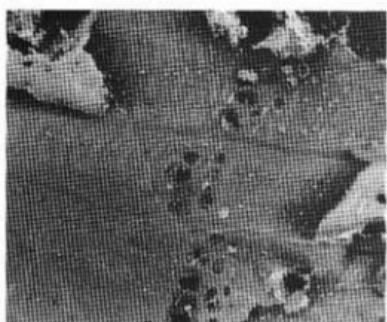
×30



接線断面（板目面）

×200

コ ナ ラ



横断面（木口面）

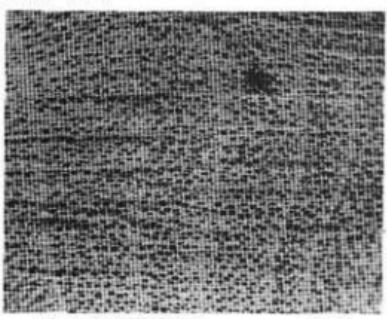
×30



接線断面（板目面）

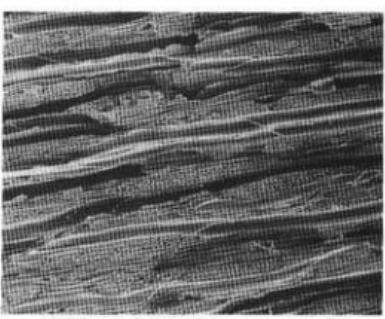
×100

シャシャンボ



横断面（木口面）

×30



接線断面（板目面）

×100

6. 結語

丸谷第1遺跡の調査において2基の住居跡が検出された。2基の住居跡は、弥生終末期である。2基の住居跡は、略方形プランで、1号は、一辺約7m、床面積約56m²、2号は、一辺約8m、床面積約80m²と大型住居跡で、数ヶ所に入り込み部分をもち、円壁に沿う小溝をもつ。1号においてみられたベッド状遺構の検出例は初めてである。

2基の住居跡にみられる入り込み部をもつ住居跡は、野尻町大荻遺跡1号住居跡、高崎町上示野原遺跡2号住居跡があり、県内での発見例は諸県地方に限定されている。^(註1)上示野原2号住居跡の場合、全掘でないので、入り込み部と柱穴との関係は不明であるが、大荻1号住居跡の場合、入り込み部は2ヶ所に設置され、柱穴に向っていて、丸谷の場合と同様である。大荻4号住居跡には、中へ70cm程入る造り出しがあるが、柱穴へは向っていない。幅についても、約110cmと幅広く、丸谷1・2号や大荻1号住居跡とは本質的に異なるものであろう。

入り込み部の壁高については、平面プランを確認したのが、第VI層御池軽石層（御池ボラ層）直土で、床面よりの高さ10cm程であったが、住居跡内の遺物の出土状態などから考えると、住居跡の周壁の高さと同じく、50cm程を考えてよいのではないかと考える。

この入り込み部については、田中氏は、大荻1号住居跡の例より間仕切り的機能を指摘されている。^(註2)豊穴住居内の間仕切りについては、石野博信氏は、小溝による間仕切りについてA～D型に分類され、うちB～D類は小溝と柱穴が関連している。^(註3)豊穴住居内を小溝と構造物によって室内を間仕切りする手法は弥生中期以降で、古墳時代を通じて行なわれていたであろうと指摘されている。丸谷遺跡の住居跡の入り込みについて考えてみると、1号・2号とも柱穴に向い、大荻2号の場合も同様であり、また、入り込み部の壁高が豊穴の壁高と類似した高さと推定されることにより、田中氏が指摘されたごとく、間仕切り的機能を考えてよいと思われる。少なくとも1号におけるベッド状遺構土は間仕切りされていたであろう。

本遺跡出土土器は、複合口縁の壺形土器、胴部が球形に張り、直口縁ないし外反する口縁をもつ壺形があり、變形土器では、長嗣形、半球形、直口縁變形土器などがある。壺形土器については、東九州の第5様式にはいるものである。變形土器については東九州および南九州の両系統の土器が認められる。^(註4)1号住居跡より出土した第4図-111は、器形はもちろん、胎土、焼成が複合口縁壺などは出土せず、南九州系土器のみを出土しているえびの市灰塚遺跡出土の土器と類似している。また、頭部において一度押圧し、そのまま上へ引き上げて口縁を整形する變形土器（第5図-112）は、鹿児島県入道遺跡、同長ヶ原遺跡、串間市屋治遺跡、灰塚遺跡において出土し、出土例がいずれも、南九州系土器を出土している遺跡である。^(註5)

都城盆地一帯、および諸県地方などは、東九州系・南九州系の両文化が複雑に入り組んでいる。この地域には、一応弥生終末される遺跡では、大荻遺跡、上示野原遺跡、年見遺跡などがあり、終末期の土器編年を行なう場合、東九州系・南九州系の両文化については考慮する必要があろう。概略、大荻、丸谷上示野原と編年できるのではないかと考える。

丸谷遺跡において検出された2基の住居跡は、いずれも大型住居跡であるが、この種の住居にて集落

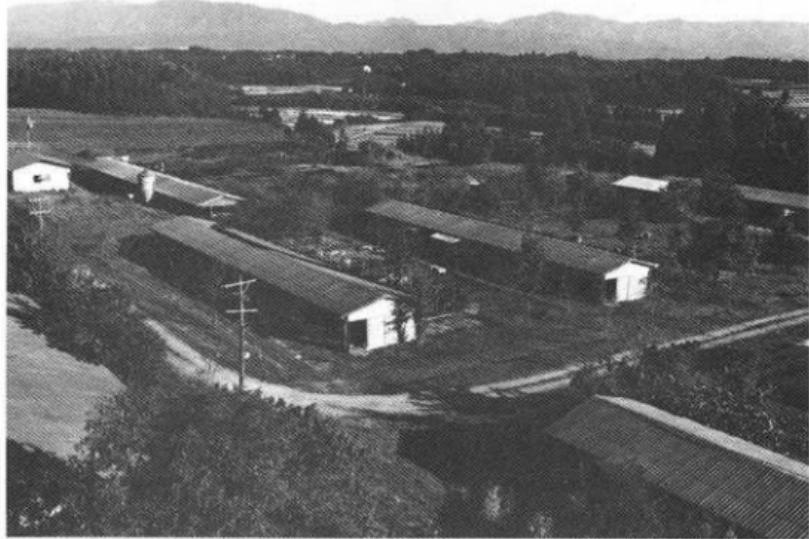
が構成されていたかどうかは、遺跡の大部分を占める西方が不明な現在判断はできない。

(面高 哲郎)

- 注1 「大荻遺跡2」(宮崎県教育委員会 1975)
- 注2 石川恒太郎、岩永哲夫、茂山 錠「高崎町上示野原遺跡について」(宮崎考古学会第5回発表要旨 1976)
- 注3 注1と同じ
- 注4 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」(日本古代文化の探求 大林太良編「家」社会思想社 1975)
- 注5 小林行雄、杉原莊介編「弥生土器集成本編1」昭39年
- 注6 「灰塚遺跡」(宮崎県教育委員会 1973)
- 注7 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」鹿児島県教育委員会 1978
- 注8 注7と同じ
- 注9 田中茂「宮崎県下出土の弥生式土器絵画」(宮崎考古1号 1975)
- 注10 「図説 宮崎の歴史」宮崎県立博物館 昭42年



遺跡遠景(南より)



遺跡遠景(北西より)